

# 殿 畠 遺 跡

主要地方道玉里水戸線道路改良  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成29年3月

茨城県水戸土木事務所  
公益財団法人茨城県教育財団



茨城県教育財団文化財調査報告第420集

# 殿畠遺跡

主要地方道玉里水戸線道路改良  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成29年3月

茨城県水戸土木事務所  
公益財団法人茨城県教育財団

## 序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県などの各事業者から委託を受けて埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として、昭和52年に調査課が設置されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、茨城県水戸土木事務所による主要地方道玉里水戸線道路改良事業に伴って実施した、茨城県小美玉市殿畠遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって、縄文時代前期、古墳時代後期及び平安時代の集落跡、古墳時代前期の方形周溝墓が確認でき、宮田地区における土地利用の一端が明らかになりました。これらの成果は、当地域の社会の成り立ちや歴史を知る上で、欠くことのできない貴重な資料となります。

本書が、歴史研究の学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上のための資料として広く御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者であります茨城県水戸土木事務所に対して厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、小美玉市教育委員会をはじめ、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成29年3月

公益財団法人茨城県教育財団  
理事長 野口通

## 例　　言

- 1 本書は、茨城県水戸土木事務所の委託により、公益財団法人茨城県教育財團が平成 26 年度に発掘調査を実施した、茨城県小美玉市宮田字権現平 172-7 ほかに所在する<sup>1の付</sup>般若遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。  
調査 平成 26 年 10 月 1 日～12 月 31 日  
整理 平成 28 年 11 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日
- 3 発掘調査は、調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。  
首席調査員兼班長　　寺内久永  
次席 調査 員　　舟橋 理  
調　　査　　員　　近江屋成陽
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長後藤一成のもと、調査員近江屋成陽が担当した。
- 5 第 13 号土坑及び第 14 号土坑出土の炭化材の年代測定、樹種同定についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、考察は付章として巻末に掲載した。

## 凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅹ系座標に準拠し、X = + 21,680 m, Y = + 45,800 mの交点を基準点（A 1 a1）とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C …、西から東へ 1, 2, 3 … とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c … j、西から東へ 1, 2, 3, … o と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 FP - 炉穴 P - ピット SD - 溝跡 SI - 壑穴建物跡 SK - 土坑 TM - 方形周溝墓

TP - 陥し穴

遺物 DP - 土製品 M - 金属製品 Q - 石器

土層 K - 扰乱

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土・赤彩・施釉		炉・火床面・繊維土器断面
	甕部材・粘土範囲・石器使用痕		柱あたり
●土器	□石器	---	硬化面

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は m, cm, g で示した。なお、現存値は ( ) を、推定値は [ ] を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

6 壑穴建物跡の「主軸」は、炉・甕を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

7 今回の報告分で、整理段階での遺構名を変更したもの及び欠番にしたもののは以下のとおりである。

変更 SK 1 → 第 1 号陥し穴 SK 3 → 第 1 号炉穴 SK 4 → 第 2 号陥し穴 SK 6 → 第 3 号陥し穴

SK18 → 第 4 号陥し穴

欠番 SK 2 · 10 · 11 · 12 · 16 · 17

# 目 次

序

例 言

凡 例

目 次

殿畠遺跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 位置と地形	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	11
1 楩文時代の遺構と遺物	11
(1) 堅穴建物跡	11
(2) 陕し穴	43
(3) 炉穴	49
(4) 土坑	50
2 古墳時代の遺構と遺物	58
(1) 堅穴建物跡	58
(2) 方形周溝墓	65
(3) 溝跡	69
3 平安時代の遺構と遺物	71
堅穴建物跡	71
4 その他の遺構と遺物	74
(1) 溝跡	75
(2) 遺構外出土遺物	76
第4節 まとめ	79
付 章	85
写真図版	PL 1 ~ PL22
抄 錄	
付 図	

# 殿畠遺跡の概要

## 遺跡の位置と調査の目的

殿畠遺跡は、小美玉市の中南部に位置し、園部川支流の沢目川左岸の標高 22 m ほどの台地平坦部に立地しています。主要地方道玉里水戸線道路改良事業に先立ち、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、茨城県教育財團が平成 26 年度に 7,625m<sup>2</sup>について発掘調査を行いました。



## 調査の内容

調査の結果、縄文時代の竪穴建物跡 14 棟、陥し穴 4 基、炉穴 1 基、土坑 19 基、古墳時代の竪穴建物跡 2 棟、方形周溝墓 1 基、溝跡 2 条、平安時代の竪穴建物跡 2 棟などを確認しました。主な出土遺物は縄文土器（深鉢）、土師器（壺・壇・高壺・鉢・壺・提瓶・甕・手捏土器）、須恵器（壺・蓋・皿・甕）、土製品（土玉・円筒埴輪）、石器（搔器・鏃・石匙・打製石斧・磨石・敲石・凹石・砥石・紡錘車）、金属製品（錢貨・鉄砲玉）などです。



遺跡の遠景



縄文時代の竪穴建物跡



縄文時代の竪穴建物跡から出土している様子



方形周溝墓の全体の様子



方形周溝墓から出土した土器

## 調査の成果

調査区は、遺跡の西部である台地縁辺部にあたります。調査では、縄文時代、古墳時代、平安時代の集落や墓域として断続的に土地利用されていることが明らかとなりました。縄文時代では、前期初頭から中期初頭の集落跡が確認でき、縄文海進と呼ばれる海水面が上昇した時に営まれた集落と考えられます。古墳時代では、4世紀の方形周溝墓1基が見つかりました。方形に区画された溝の内側の、ほぼ中央部に、埋葬施設が見つかりました。周溝からは、底に穴があけられたり、打ち欠かれたりしている土器が出土しています。亡くなった人を弔う儀式を行った痕跡と考えられます。また、壺の中には、北陸地方の影響をうけた器形のものが出土しており、遠隔地の人々との交流がうかがわれます。また、6世紀の竪穴建物跡が確認でき、墓域から集落として土地利用されたことがわかりました。

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

茨城県水戸土木事務所は、小美玉市において主要地方道玉里水戸線の道路改良事業を進めている。

平成25年11月6日、茨城県水戸土木事務所長は茨城県教育委員会教育長あてに、主要地方道玉里水戸線道路改良事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成25年12月2日に現地踏査をし、平成25年12月20日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成26年1月17日、茨城県教育委員会教育長は茨城県水戸土木事務所長あてに、事業地内に殿晶遺跡が所在すること、及びその取扱いについて別途協議が必要である旨を回答した。

平成26年3月14日、茨城県水戸土木事務所長は茨城県教育委員会教育長あてに、文化財保護法第94条に基づき、土木工事の通知を提出した。平成26年3月20日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成26年3月24日、茨城県水戸土木事務所長は茨城県教育委員会教育長あてに、主要地方道玉里水戸線の道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成26年3月24日、茨城県教育委員会教育長は茨城県水戸土木事務所長あてに、殿晶遺跡の発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として公益財團法人茨城県教育財團を紹介した。

公益財團法人茨城県教育財團は、茨城県水戸土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成26年10月1日から12月31日まで発掘調査を実施した。

## 第2節 調査経過

殿晶遺跡の調査は、平成26年10月1日から12月31日までの3か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

期間 工程	10月	11月	12月
調査準備 表土除去 遺構確認			
遺構調査			
遺物洗浄 注写 整理			
撤取			

## 第2章 位置と環境

### 第1節 位置と地形

殿島遺跡は、茨城県小美玉市宮田字権現平172-7ほかに所在している。

小美玉市は、茨城県の中央部に位置し、巴川と園部川に挟まれた標高30mを主とする行方台地と、園部川河口付近から西部へと広がる標高20m前後の出島・石岡台地によって二分されている。

これらの洪積台地からは、先の2河川に加えた鎌田川、梶無川の4河川が、支流を集めて北浦や霞ヶ浦へと流入し、その過程で形成された谷津や沖積地が樹枝状で複雑に開析されている。特に巴川と園部川の沿岸においては、細長く発達した沖積地が形成されている<sup>1)</sup>。

当遺跡が所在する行方台地の西端部は、台地中央部から緩やかに下り標高25mほどとなり、園部川に沿って、北西へと延び、やがては吾国山の東麓へと発達している。

この台地を形成している地層は、下層位から石崎層、志崎層、笠神層、見和層（成田層に相当）、茨城粘土層（常総粘土層に相当）、関東ローム層、そして現在の生活面も含む沖積層と続いている。石崎層、志崎層、笠神層は内湾底堆積、見和層は下末吉海進時の外洋から干潟に至る堆積で第四期洪積古東京湾時代のものである。茨城粘土層からは陸成堆積となり、関東ローム層は火山灰堆積となる<sup>2)</sup>。

当遺跡は、小美玉市の中央部に位置し、園部川支流の沢目川左岸の標高約22mの樹枝状の台地上に立地している。遺跡の範囲は、東西約500m、南北約700mで、今回の調査区は西部の台地縁辺部にあたる。現在の当遺跡周辺は、園部川沿岸の沖積地に水田が営まれ、台地上は山林や畠地として土地利用されている。

### 第2節 歴史的環境

殿島遺跡（1）は、行方台地の西端部に位置し、西方に園部川や出島・石岡台地を望んで集落が営まれている。園部川の両岸においては、分布調査によって確認された多くの遺跡から、古くから人々の生活が営まってきたことをうかがい知ることができる。特に、霞ヶ浦に面した地域から園部川河口付近の台地上には遺跡の分布が密で、各時代の人々が、霞ヶ浦やそれに注ぎ込む河川を取り込みながら、有効に利用していたことを知ることができる。なお本節では、園部川下流を中心に記すこととする。

旧石器時代の遺跡は、ガラス質安山岩製のナイフ形石器が採取された富士塚遺跡や硬質頁岩製の尖頭器が採取された出口遺跡、ナイフ形石器、台形様石器が出土した船山遺跡が知られている。これらの他、香取下遺跡（31）、千部塚遺跡（51）、栗又四ヶ遺跡（66）、大作台遺跡などでも確認されているが、全体的な分布は薄い。

繩文時代になると、遺跡数は爆発的に増加し、自然環境に育まれた狩猟・採取による生活の痕跡をうかがい知ることができる。小美玉市においては、草創期の遺跡こそ現時点では希薄であるが、早期以降中期にかけては急激に増加している。園部川下流域では、右岸の田木谷遺跡（40）、八幡脇貝塚（43）、宮後貝塚（53）、館山遺跡、左岸の兵助山遺跡（6）、池下北町遺跡（11）、原口遺跡（24）、吉城ノ内遺跡（30）などが早期から中期の遺跡に該当している。当遺跡においても、前期の集落跡が確認できているが、後期以降では遺跡が急減する特徴がみられる。また、早期から前期の遺跡と中期の遺跡が形成される台地が、谷津を境に異なる傾向にあり、中期から後期にかけて遺跡群の社会的変化の構造が生じた可能性が指摘されている<sup>3)</sup>。

弥生時代の遺跡は梶無川以西で少数確認されている。沢目川が園部川へ合流する近辺には庄司ノ上遺跡<sup>(7)</sup>や火打久保上遺跡<sup>(8)</sup>が所在し、園部川右岸では香取下遺跡、東前遺跡<sup>(36)</sup>、桜久保遺跡<sup>(47)</sup>、千部塚遺跡、栗又四ヶ遺跡、弥陀ノ台遺跡<sup>(76)</sup>などが、谷津口やその奥に面した台地上に位置している。わずかに採集された土器片からは、後期に属するものが多いようである<sup>(4)</sup>。

古墳時代では、園部川流域に集落跡や古墳群が分布している。前期は、当遺跡から南西側対岸の弥陀ノ台遺跡の調査で、堅穴建物跡7棟が確認され、報告では同時期の堅穴建物跡が3棟一組という有機的な関係を示唆されている<sup>(5)</sup>。古墳は全長67mの前方後円墳である羽黒山古墳を中心とする羽黒山古墳群が所在する。霞ヶ浦の北東岸の台地上に立地する稚現古平岡墳群で、方形周溝墓が1基確認されている<sup>(6)</sup>。

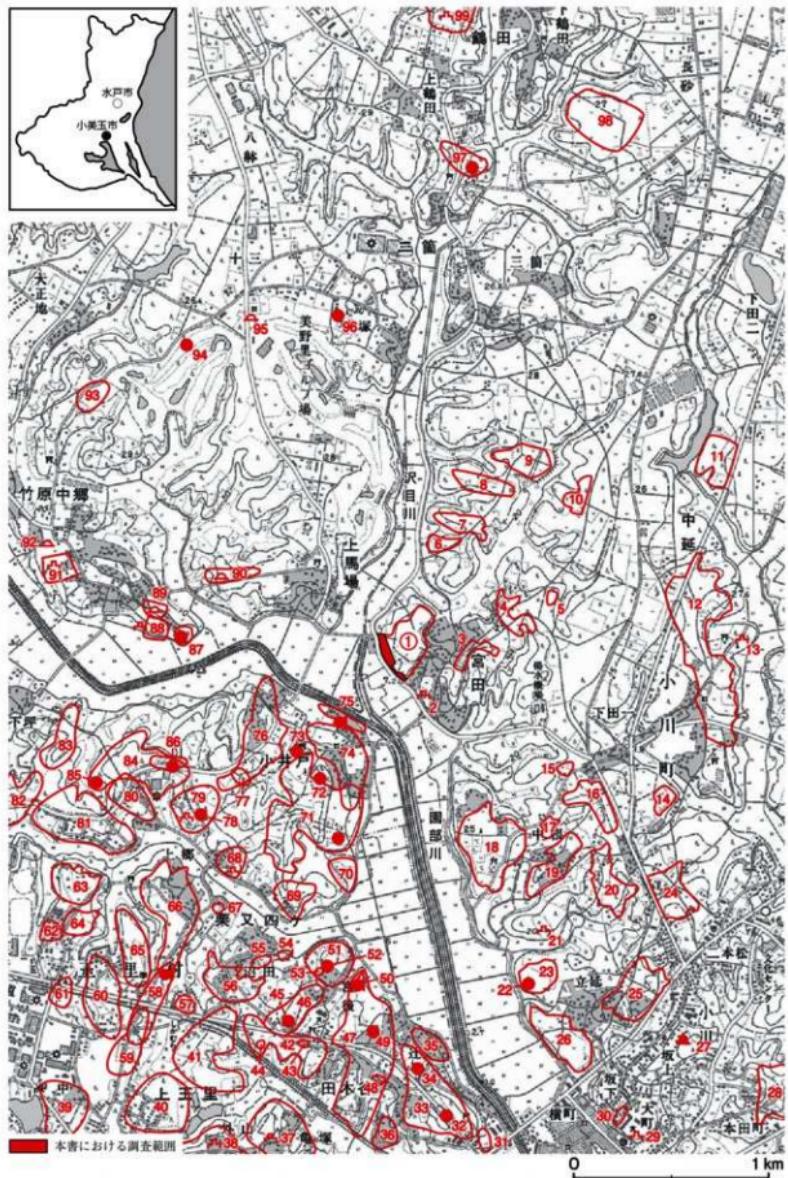
中期には園部川下流域において集落、古墳群の形成はなされておらず、恋瀬川流域に形成された舟塚山古墳群（関東第2位の規模を有する舟塚山古墳を含む）に墳墓は集中している<sup>(7)</sup>。

後期では約100mほどの前方後円墳である要害山古墳1号墳を中心とする要害山古墳群（75）のうち、要害山3号墳の調査で内径27m、外径42mの円墳で雲母片岩を使用した箱式石棺の埋葬施設が確認された。後世の盗掘により遺物や人骨は確認できなかったが、墳丘や周溝から出土している円筒型埴輪の時期から6世紀前半の築造と考えられている<sup>(8)</sup>。このほか、全長42mの前方後円墳である木船塚1号古墳を中心とする木船塚古墳群<sup>(9)</sup>（58）、大塚古墳（22）や稚現山古墳、円筒型埴輪や朝顔型埴輪が出土した地蔵塚古墳<sup>(10)</sup>などが河口付近に多数存在している。また多くの古墳の被葬者である有力者が基盤とした集落跡も推測されており、羽黒山古墳における羽黒遺跡<sup>(11)</sup>や大塚古墳における西ノ前遺跡（23）、地蔵塚古墳における羽根沢遺跡がそれに該当するとされている<sup>(12)</sup>。

奈良・平安時代の市域は常陸国茨城郡に位置し、『和名類聚抄』に記されている田余郷、白川郷、立花郷、生園郷、山前郷に比定されている。当遺跡が所在する宮田地区は、生園郷に含まれると考えられている<sup>(13)</sup>。近辺の発掘調査では、区画が確認された宮平遺跡（18）や集落遺跡である天神遺跡などあげられるが、その事例は少ない。遺跡の分布からは兵助山遺跡、天神平遺跡（20）、堂ノ上遺跡（25）など該期の遺跡とされるものは多數みられる。律令期に位置づけられる集落遺跡は古墳の所在地より離れているものが多く、古墳時代から継続する集落遺跡は古墳付近に所在するものと、離れるものが見受けられる。律令期に成立する集落、律令社会の中で早期段階で順応するグループや伝統を守るグループの存在などが推測される。

中世における当地域は、大掾氏、小田氏、江戸氏、佐竹氏などの抗争の場となった<sup>(14)</sup>。園部川下流域には多くの城館跡が見られる。大掾氏の支城としてまず挙げられるのは、富士峯館跡、館山館跡、愛宕館跡、城ノ内館跡、要害館跡、田余館跡、飯塚館跡（37）、原山館跡（38）の玉里八館である。田余館は田余砦（取手山館跡）に比定され、江戸氏・佐竹氏進行のおりに激戦となった場所である。平成24（2012）年に発掘調査され、曲輪状の平場3か所、堀跡6条、塹壕状の通路跡8か所、虎口跡1か所や門跡1か所が確認されている。宝篋印塔の部材を転用した鉄砲玉用砥石とともに火縄銃の鉄砲玉が多数出土している<sup>(15)</sup>ことは、激戦を物語る資料として特筆される。

また、大掾氏臣家の居館とされる殿坂館跡（68）や笠松館跡（79）、大掾氏一族の築城とされる竹原城跡、弓削砦跡などがある。高原城跡（91）においては南北朝期に廢城となったとされるが、大掾氏の五輪塔が所在する風林寺、永福寺などの寺院や堀ノ内、木戸橋、閑町の地名などから、富士館跡（88）と合わせて中郷城<sup>(16)</sup>とする説もある。これらの城館跡は、園部川や沢目川の左岸に分布している。一方小田氏の支城は、長方形の主郭を持つ羽鳥館跡や鶴城跡<sup>(17)</sup>（99）、小田氏家臣園部氏の居城である小川城跡（29）がある。また、宮田館跡（2）や中根城跡（21）の支城であり、園部川・沢目川左岸の大掾氏の支城と対峙して分布している。



第1図 殿島遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000分の1「石岡」）

表1 殿畠遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	繩文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町			旧石器	繩文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
①	殿畠遺跡	○		○	○	○	○	51	千部塚遺跡	○	○	○	○	○	○	○
2	宮田館跡				○		○	52	千部貝塚					○	○	
3	東ノ下遺跡	○			○			53	宮後貝塚	○						
4	ハサマ遺跡	○		○				54	寺塔遺跡	○		○		○		
5	三藏久保遺跡			○				55	沼田遺跡				○	○		
6	兵助山遺跡	○			○			56	沼田平遺跡	○	○	○	○			
7	庄司ノ上遺跡	○	○	○				57	大塚古墳群	○						
8	火打久保上遺跡	○	○					58	木船塚古墳群	○	○					
9	西原遺跡	○						59	石橋遺跡	○		○	○			
10	大峰遺跡	○						60	木ノ内遺跡	○						
11	池下北町遺跡	○						61	観音峯遺跡	○						
12	十一平遺跡	○		○				62	細田遺跡	○	○	○				
13	下田城跡						○	63	山ノ神遺跡	○	○	○	○			
14	乾谷遺跡	○						64	原田向遺跡	○	○	○				
15	白旗後遺跡	○						65	大山遺跡	○	○	○	○			
16	宮久保遺跡	○						66	栗又四ヶ遺跡	○	○	○	○			
17	白旗前遺跡		○					67	安楽寺阿弥陀堂跡					○		
18	宮平遺跡	○		○	○			68	殿塚館跡	○		○	○			
19	終平遺跡	○		○				69	極楽寺遺跡					○		
20	天神平遺跡	○			○			70	駒崎遺跡	○	○	○	○			
21	中根城跡						○	71	境塚古墳					○		
22	大塚古墳			○				72	天神山古墳					○		
23	西ノ前遺跡	○	○					73	椎現山古墳群					○		
24	原口遺跡	○			○			74	観音前遺跡	○		○	○			
25	堂ノ上遺跡	○		○	○			75	要害山古墳群					○		
26	五切遺跡	○			○			76	弥陀ノ台遺跡			○	○			
27	小川焼窯跡						○	77	笠松遺跡	○	○	○				
28	水走り遺跡	○						78	茶屋塚古墳群							
29	小川城跡						○	79	笠松館跡	○	○	○	○			
30	古城ノ内遺跡	○						80	高野遺跡	○			○			
31	香取下遺跡	○	○	○	○	○	○	81	根田上遺跡	○	○					
32	香取台稻荷古墳				○			82	池下遺跡	○			○			
33	香取遺跡	○	○	○	○	○	○	83	下坪遺跡	○	○	○	○			
34	折戸古墳			○				84	蟹宿遺跡	○	○	○	○			
35	辻微高地遺跡	○	○	○	○	○	○	85	山ノ内古墳群					○		
36	東前遺跡	○	○		○	○		86	七人塚古墳群					○		
37	飯塚跡							87	君ヶ塚古墳群					○		
38	原山館跡	○	○	○	○	○	○	88	富士館跡					○		
39	中台北遺跡	○		○	○			89	平吉墳群				○			
40	田木谷遺跡	○	○	○	○	○		90	十一久保経塚群					○		
41	福荷遺跡	○			○	○		91	高原城跡				○			
42	西平中根遺跡	○	○	○	○	○		92	一字一石経塚				○			
43	八幡駕貝塚	○		○	○			93	十三遺跡	○						
44	西平西根古墳				○			94	十三塚			○				
45	岩屋古墳			○	○			95	三箇弁天経塚群				○			
46	岩屋遺跡	○	○	○	○	○	○	96	熊野椎現古墳			○				
47	桜久保遺跡	○	○	○	○	○	○	97	蝶巣塚古墳群			○				
48	東前古墳群				○			98	東山遺跡	○	○	○	○			
49	豊下古墳			○	○			99	鶴田城跡				○			
50	宮後古墳群			○												

平成 23 年度の宮田館跡の調査では、調査区が舌状に張り出した台地の先端部及び園部川に面した急傾斜となる尾根部分で、2 区画の曲輪跡と掘立柱建物跡 1 棟、土塁跡 2 条、堀跡 1 条、土坑 1 基が確認されている<sup>10)</sup>。

※ 文中の〈 〉内の番号は、第 1 図及び表 1 の該当番号と同じである。なお、本章は『茨城県教育財团文化財調査報告』第 374 集を基にし、若干加筆したものである。

#### 註

- 1) 小川町史編さん委員会編『小川町史』下巻 小川町 1988 年 3 月
- 2) 横山芳春「茨城県における更新統下絶層群の層序と堆積史」『早稲田大学リボジトリ』早稲田大学 2005 年 3 月
- 3) 小玉秀成・本田信之『館山遺跡発掘調査報告書－旧石器・縄文・弥生時代編－玉里村総合文化センター建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』玉里村史料館 1999 年 3 月
- 4) a 本田信之『香取下遺跡』『玉里村史料館報 Vol.6』玉里村史料館 2001 年 3 月  
b 註 1 文獻に同じ
- 5) 小川和博・大河淳志・大河由紀子ほか『石岡市弥陀ノ台遺跡－小美玉市道栗又四ヶ線道路改良工事に伴う発掘調査－』小美玉市・石岡市教育委員会・有限会社日考研茨城 2014 年 8 月
- 6) 伊東重敏「玉里村椎現古墳群」『玉里村埋蔵文化財報告』第 1 集 茨城県新治郡玉里村教育委員会 1994 年 3 月
- 7) 小林三郎「玉里村椎現山古墳発掘調査報告書」玉里村教育委員会 2000 年 3 月
- 8) 宮本秀男・海老澤稔・安彦候良・佐々木義則『要害山古墳群発掘調査報告書（要害山古墳 3 号墳）』茨城県石岡市教育委員会 1988 年 3 月  
9) 註 6 文獻に同じ
- 10) 宮内直隆・石田幹治『地蔵塚古墳』小川町教育委員会 1981 年 3 月
- 11) 赤井博之『竹原小学校遺跡出土の古墳時代前期の埴輪と土師器』『小美玉市史料館報 第 4 号』小美玉市史料館 2010 年 3 月  
12) 註 9 文獻に同じ
- 13) 註 1 文獻に同じ
- 14) 註 1 文獻に同じ
- 15) 本田信之・土生朗治「－茨城県小美玉市－取手山館跡」「小美玉市埋蔵文化財調査報告」第 1 集 小美玉市教育委員会・有限会社 毛野考古学研究所 2013 年 8 月
- 16) 中郷城の所在については諸説あり。この他にも竹原城を比定する説や竹原中郷地内の高原城跡以外の場所に求める説などがある。中郷地区においては、上馬場から竹原城跡に向かうルート上にあり、また中郷から三箇弁天 總塚群(95) や中世においてランドマークとなる十三塚(94)、熊野椎現古墳(96) を経由して三箇へ至るルートもみられ、交通の要所であったことがうかがわれる。
- 17) 美野里町史編さん委員会編『美野里町史（上）』美野里町 1989 年 3 月
- 18) 田村雅樹「宮田館跡 主要地方道玉里水戸線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財团文化財調査報告』第 374 集 2013 年 3 月

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

殿畠遺跡は、小美玉市の中央部に位置し、園部川支流の沢目川左岸の標高約22mの台地上に立地している。調査区の地形は、台地西部の縁辺と急傾斜面にあたる。調査面積7,625m<sup>2</sup>のうち、5,162m<sup>2</sup>は崖部であるため安全を考慮して調査から除外することになり、平坦部の2,463m<sup>2</sup>を行った。平坦部は谷を挟んで北部の2,053m<sup>2</sup>をA区、南部の410m<sup>2</sup>をB区と呼称した。調査前の現況は山林である。

調査の結果、堅穴建物跡18棟（縄文時代14・古墳時代2・平安時代2）、方形周溝墓1基（古墳時代）、溝跡7条（古墳時代2・時期不明5）、陥れ穴4基（縄文時代）、炉穴1基（縄文時代）、土坑19基（縄文時代）を確認した。遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に18箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、弥生土器（壺）、土師器（壺・罐・高環・鉢・壺・提瓶・甕・手捏）、須恵器（壺・蓋・甕）、陶磁器（碗・皿・擂鉢）、土製品（土玉・円筒埴輪）、石器（搔器・鐵・石匙・打製石斧・磨石・敲石・凹石・砥石・紡錘車）、金属製品（錢貨・鉄砲玉）などである。調査B区については、宮田館に関する施設の可能性を視野に入れ、地形に合せて、東西南北方向に6本のトレンチを入れ、地山まで掘り下げた。地山までの土層堆積状況の確認を行ったが、遺構は確認できなかった。盛土整地層は確認できたが、下層に現代の狐銃の薬莢が出土したことから、時期は現代と判明した。

### 第2節 基本層序

調査区北東部の台地平坦部（B-2b6区）に設定した。

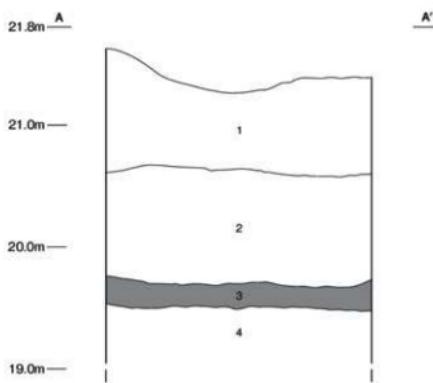
第1層は黒褐色の腐植土である。粘性、縮まりとともに弱く、層厚は80～102cmである。

第2層は褐色のハードローム層である。粘性は普通で、縮まりが強く、層厚は78～90cmである。

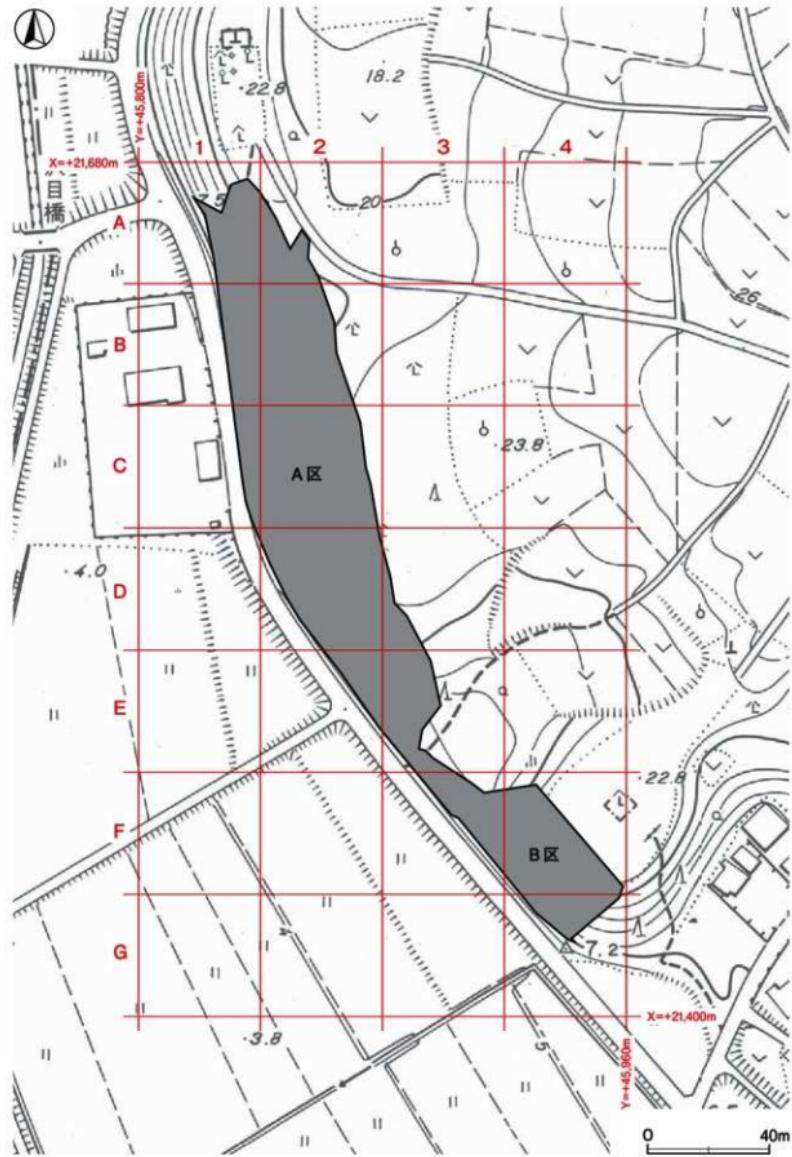
第3層は暗褐色のハードローム層である。第2黑色带（B-B II）に相当する。粘性は普通で、縮まりが強く、層厚は22～28cmである。

第4層は灰白色の粘土層である。常総粘土層に相当する。縮まりとともに強い。層厚は、下層が未掘のため不明である。

遺構は、第2層の上面で確認した。



第2図 基本土層図



第3図 厥高遺跡調査区設定図（小川町都市計画図 2,500 分の 1 より作成）

### 第3節 遺構と遺物

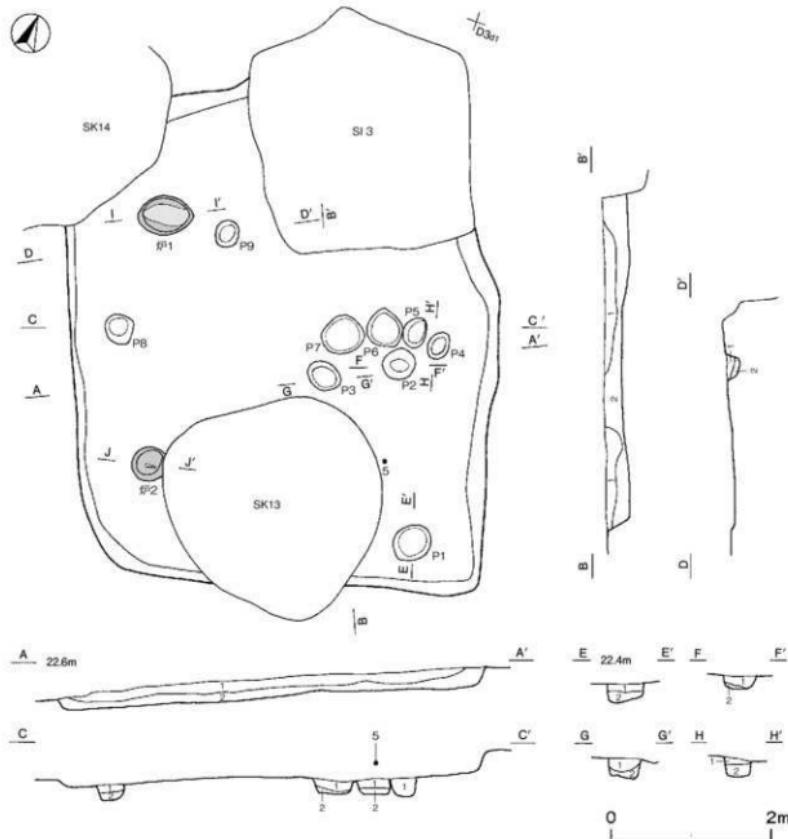
#### 1 繩文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、調査区域内のはば全域にわたって分布している。竪穴建物跡14棟、陥し穴4基、炉穴1基、土坑19基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

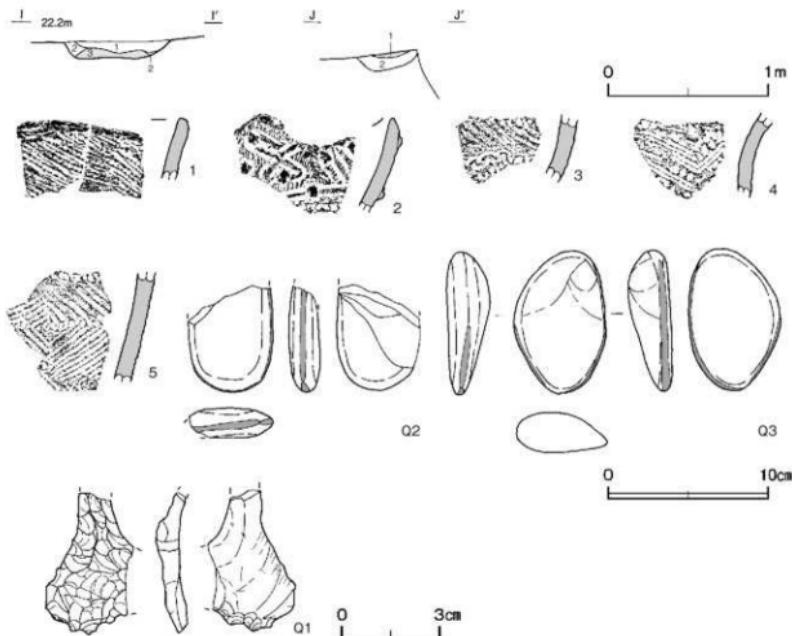
##### (1) 竪穴建物跡

###### 第1号竪穴建物跡 (第4・5図 PL 2)

位置 調査A区南東部のD2e0区、標高22mほどの台地平坦部に位置している。



第4図 第1号竪穴建物跡実測図



第5図 第1号堅穴建物跡・出土遺物実測図

**重複関係** 第3号堅穴建物跡、第13・14号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸 6.00 m、短軸 5.30 m の長方形で、長軸方向は N - 22° - W である。壁は高さ 10 ~ 23 cm で、外傾して立ち上っている。

**床** 平坦で、全面が踏み固められている。

**炉** 2か所。炉1は北西コーナ部、炉2は南西コーナ部にそれぞれ付設されている。炉1は長径 70 cm、短径 48 cm の楕円形の地床炉である。炉床は床面から深さ 12 cm で、火熱を受け赤変硬化している。炉2は第13号土坑に東部をわずかに掘り込まれているが、径 40 cm のほぼ円形の地床炉と推定できる。炉床は床面とほぼ同じ高さで、火熱を受け赤変硬化している。

#### 炉1 土層解説

- |   |   |    |                       |
|---|---|----|-----------------------|
| 1 | 暗 | 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 | 褐 | 色  | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 | 赤 | 褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |

#### 炉2 土層解説

- |   |   |   |    |                           |
|---|---|---|----|---------------------------|
| 1 | 明 | 赤 | 褐色 | 焼土ブロック多量、ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 | 褐 | 色 |    | ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量     |

**ピット** 9か所。ほかの遺構に掘り込まれていることから、主柱穴や出入り口施設に伴うピットは不明である。

P1 ~ P9 の深さは 16 ~ 25 cm である。

#### ピット 土層解説 (各ピット共通)

- |   |   |   |                       |                       |
|---|---|---|-----------------------|-----------------------|
| 1 | 褐 | 色 | ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量 |                       |
| 2 | 明 | 褐 | 色                     | ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量 |

**覆土** 2層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

**土層解説**

1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 縄文土器片 121点（深鉢）、石器3点（石匙1、磨石2）、剥片15点（チャート6、砂岩1、安山岩8）が、全域に散在して覆土上層から下層にかけて出土している。4は北西部の覆土下層、3は北西部、2・5・Q1は南東部、1は北東部の覆土上層からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から前期前半（関山I式期）と考えられる。

第1号竪穴建物跡出土遺物観察表（第5図）

番号	種別	器種	口径	覆高	底径	粘土	色調	他成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(3.8)	-	長石・石英・織維	にぶい相	普通	直前段縄文R 内面丁寧な磨き	北東部覆土上層	関山I式
2	縄文土器	深鉢	-	(5.9)	-	長石・石英・織維	にぶい相	普通	梯子状洗腹文→瘤状船付文 内面丁寧な磨き	南東部覆土上層	関山I式
3	縄文土器	深鉢	-	(4.2)	-	長石・石英・織維	黄橙	普通	0段多条縄文R L→コンパクト文 内面丁寧な磨き	北西部覆土上層	関山I式
4	縄文土器	深鉢	-	(5.2)	-	長石・石英・織維	相	普通	直前段縄文による合撃 内面丁寧な磨き	北東部覆土上層	関山I式
5	縄文土器	深鉢	-	(6.8)	-	赤玉・小包子・織維	にぶい相	普通	0段多条縄文R L→刺突文 内面丁寧な磨き	南東部覆土上層	関山I式

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	石匙	(44)	(27)	(0.95)	(7.05)	石英	横型 両面押印削離 つまみ部・刃部一部欠損	南東部覆土上層	P L 18
Q2	磨石	(6.6)	5.2	1.9	(79.1)	砂岩	側縁部使用痕	覆土中	-
Q3	磨石	8.8	5.6	2.7	147.6	砂岩	側縁部使用痕	覆土中	-

第2号竪穴建物跡（第6～8図 PL 2）

**位置** 調査A区南東部のD2c9区、標高22mほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第8号竪穴建物跡、第19号土坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長径5.40m、短径5.22mの円形である。壁は高さ6～28cmで、外傾している。

**床** 平坦で、全面が踏み固められている。

**炉** 南西部寄りに付設されている。長径70cm、短径62cmのほぼ円形の地床炉である。炉床は床面から18cmほどU字状に掘りこぼめ、第3層を埋め戻して構築され、火熱を受けて赤変硬化している。

**炉土層解説**

1 暗褐色 焼土粒子多量、ローム粒子少量 3 明褐色 ロームブロック多量

2 暗褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量

**ピット** 6か所。P1～P5は深さ19～68cmで、配置状況から主柱穴と考えられる。P6は深さ73cmで、性格不明である。

**ピット土層解説（P1～P4）**

1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

2 褐色 ロームブロック多量

**ピット土層解説（P5・P6）**

1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

2 褐色 ロームブロック中量

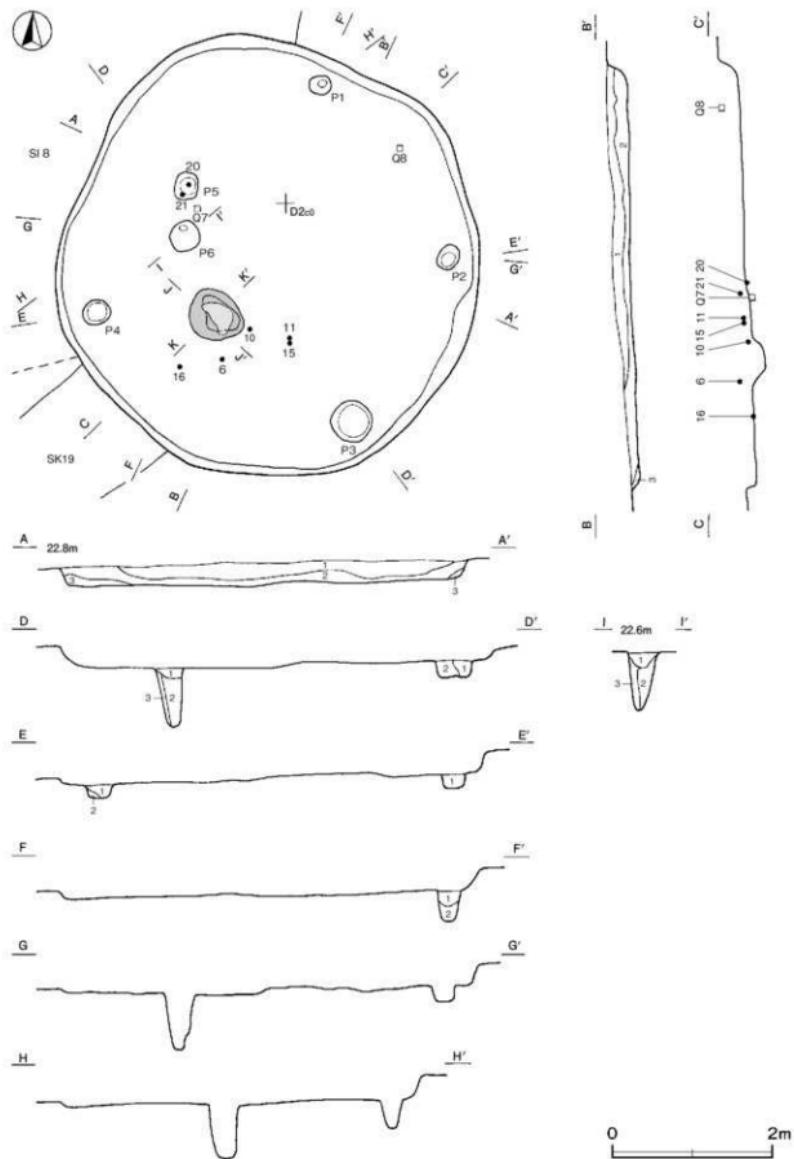
3 褐色 ロームブロック多量

**覆土** 3層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

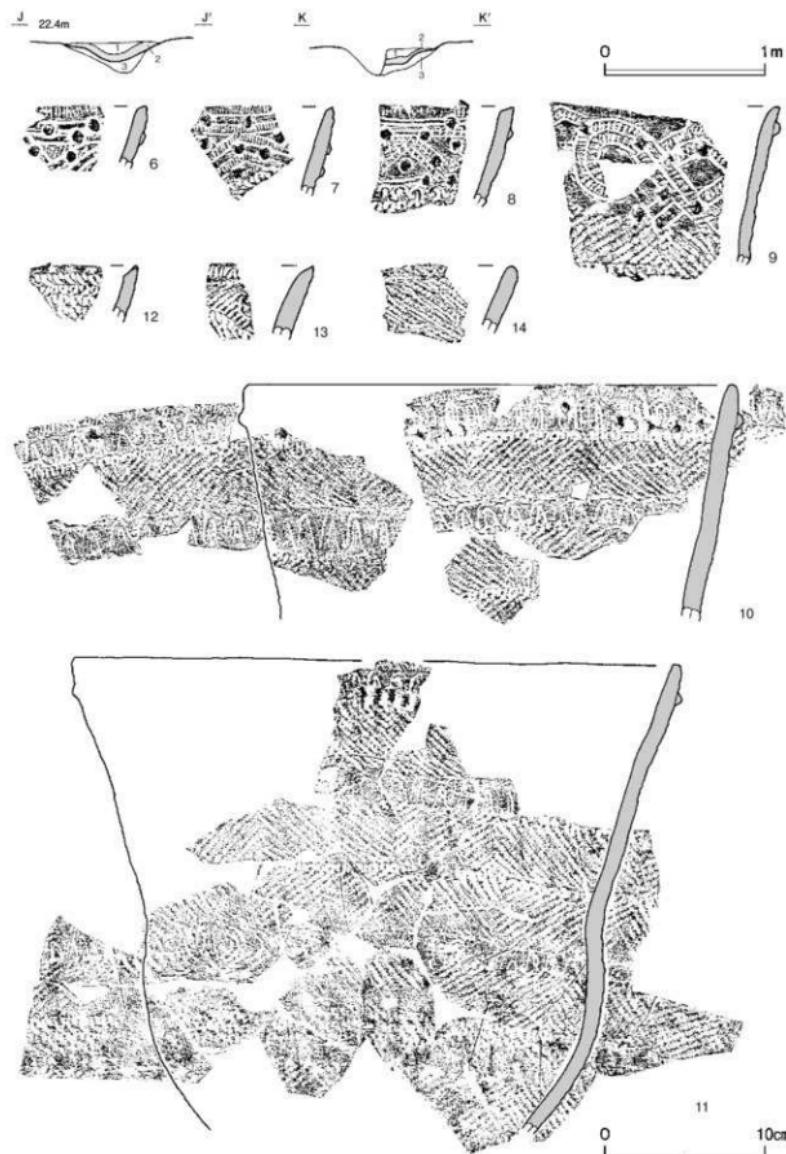
**土層解説**

1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 黄褐色 ロームブロック多量

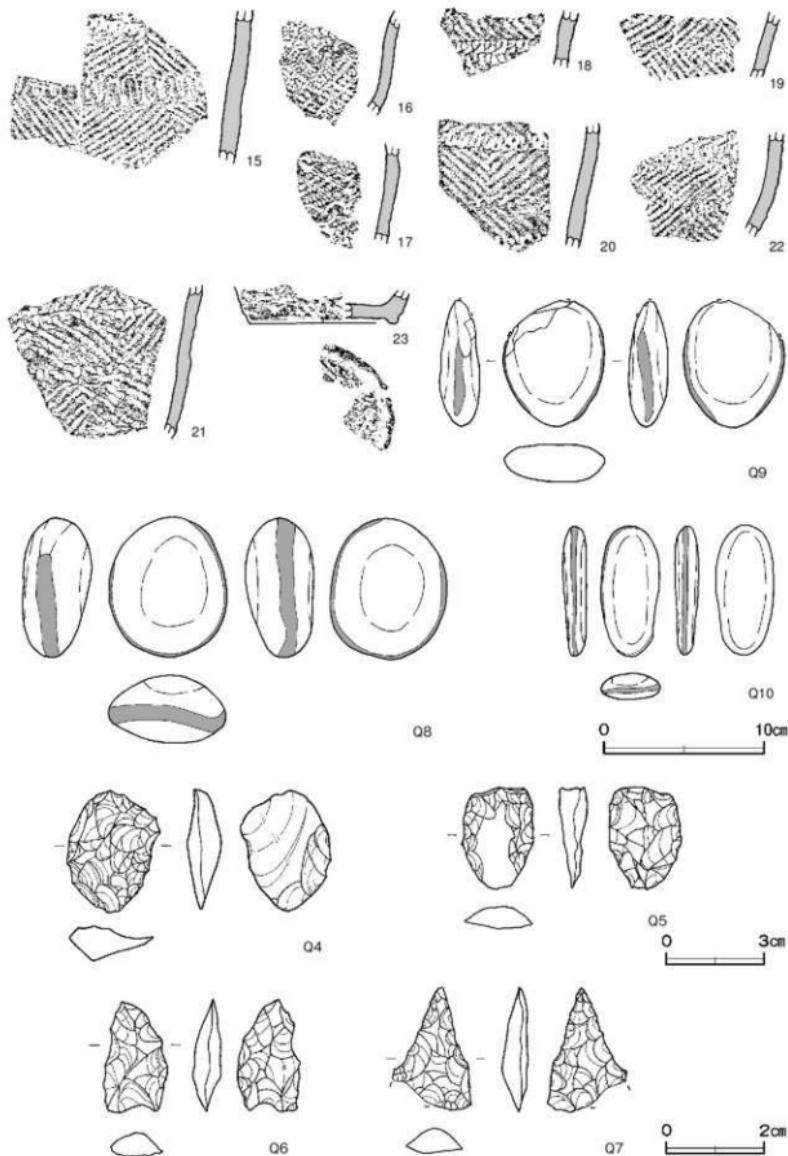
2 褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量



第6図 第2号竪穴建物跡実測図



第7図 第2号竪穴建物跡・出土遺物実測図



第8図 第2号竪穴建物跡出土遺物実測図

**遺物出土状況** 繩文土器片 221 点（深鉢），石器 8 点（搔器 2，鎌 2，磨石 4），剥片 42 点（砂岩 13，安山岩 11，チャート 10，石英 6，黒色片岩 1，緑色片岩 1）。粘土塊 1 点が、それぞれ全域に散在して、覆土上層から床面にかけて出土している。20 は P 5 内、10 は南西部の炉の付近、Q 7 は北西部の床面、Q 6・Q 10 は北東部、7～9・12・18・19・21・22 は北西部、13・14・16・17・Q 9 は南西部、11・15 は南部の覆土下層、6 は南西部、23・Q 5 は南東部、Q 8 は北東部の覆土上層、Q 4 は覆土中からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から前期前半（関山 I 式期）と考えられる。

第 2 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 7・8 図）

番号	種 別	器 形	口径	厚 高	底 槌	胎 土	色 調	焼 成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考	
6	縄文土器	深鉢	-	(3.3)	-	長石・石英・青砂 赤色粒子・繩織	に赤い赤褐色	普通	梯子状沈継文・瘤状貼付文	南西部覆土上層	関山 I 式	
7	縄文土器	深鉢	-	(5.5)	-	長石・石英・繩織	に赤い橙	普通	梯子状沈継文・瘤状貼付文	北西部覆土下層	関山 I 式	
8	縄文土器	深鉢	-	(6.3)	-	長石・石英・繩織	に赤い赤褐色	普通	「横部梯子状沈継文・瘤状貼付文」腹部ループ 單面鏡文	北西部覆土下層	関山 I 式 P.1.16	
9	縄文土器	深鉢	-	(9.7)	-	長石・石英・繩織	褐色	普通	梯子状沈継文・瘤状貼付文	北西部覆土下層	関山 I 式 P.1.16	
10	縄文土器	深鉢	[30.3]	(14.5)	-	長石・石英・赤色粒子・繩織	に赤い橙	普通	「口縁部梯子状目文・口縁部結束縄文第 1 横・コシバラ文」 「口縁部梯子状目文・口縁部結束縄文第 1 横・コシバラ文・腹部梯子状目文」 「口縁部梯子状目文・口縁部結束縄文第 1 横・コシバラ文・腹部梯子状目文」	南西部底面	関山 I 式 P.1.16	
11	縄文土器	深鉢	[37.6]	(29.0)	-	長石・石英・繩織	に赤い赤褐色	普通	「バス文」・瘤状貼付文	南西部覆土下層	関山 I 式 P.1.16	
12	縄文土器	深鉢	-	(3.5)	-	長石・石英・繩織	明赤褐色	普通	「バス文」・瘤状貼付文	北西部覆土下層	関山 I 式	
13	縄文土器	深鉢	-	(4.6)	-	長石・石英・赤色粒子・繩織	明赤褐色	普通	刷毛目文	O 段多条縄文→半截竹管による沈継文	南西部覆土下層	関山 I 式
14	縄文土器	深鉢	-	(4.2)	-	長石・石英・繩織	に赤い橙	普通	無継織文 R	南西部覆土下層	関山 I 式	
15	縄文土器	深鉢	-	(9.5)	-	長石・石英・赤色粒子・繩織	明赤褐色	普通	O 段多条縄文状構成→斜突文 ゴンバス文	南西部底面	関山 I 式	
16	縄文土器	深鉢	-	(6.5)	-	長石・石英・繩織	明赤褐色	普通	O 段多条縄文→コンバス文	南西部覆土下層	関山 I 式	
17	縄文土器	深鉢	-	(6.1)	-	長石・石英・繩織	に赤い橙	普通	O 段多条縄文→コンバス文	北西部覆土下層	関山 I 式	
18	縄文土器	深鉢	-	(3.5)	-	長石・石英・赤色粒子・繩織	に赤い赤褐色	普通	梯子状第 1 條羽状継文	北西部覆土下層	関山 I 式	
19	縄文土器	深鉢	-	(4.1)	-	長石・石英・繩織	灰褐色	普通	O 段多条羽状継文	北西部覆土下層	関山 I 式	
20	縄文土器	深鉢	-	(7.8)	-	長石・石英・繩織	褐色	普通	O 段多条羽状継文	P 5 内	関山 I 式 P.1.16	
21	縄文土器	深鉢	-	(9.5)	-	長石・石英・繩織	に赤い橙	普通	單面羽状継文	北西部覆土下層	関山 I 式 P.1.16	
22	縄文土器	深鉢	-	(6.4)	-	長石・石英・青砂 赤色粒子・繩織	に赤い赤褐色	普通	O 段多条羽状継文	北西部覆土下層	関山 I 式	
23	縄文土器	深鉢	-	(2.1)	[9.0]	長石・石英・繩織	明赤褐色	普通	上げ底・脇部下端・底部外面部單面継文 LR	南東部覆土上層	5 号 関山式	

番号	器 形	長さ	幅	厚さ	重 量	材 質	特 徴	出 土 位 置	備 考	
Q 4	搔器	37	28	11	7.37	チャート	片側側面刃部調整	覆土中	P. L. 18	
Q 5	搔器	32	22	0.8	5.70	黒色頁岩	内面部彎刃部調整	南東部覆土上層	P. L. 18	
Q 6	鎌	23	13	0.45	1.32	チャート	円弧無茎鎌	内面部彎刃部調整	北東部覆土下層	P. L. 18
Q 7	鎌	26	(1.6)	0.5	(1.56)	石灰岩	平基無茎鎌	内面部彎刃部調整	北西部床面	P. L. 18
Q 8	磨石	86	7.3	4.2	325.8	砂岩	彎継部両面使用痕	北東部覆土上層	-	
Q 9	磨石	(7.8)	6.2	2.4	(155.9)	輝岩	彎継部両面使用痕	南東部覆土下層	-	
Q 10	磨石	80	3.5	1.4	57.2	砂岩	彎継部両面使用痕	北東部覆土下層	-	

第 4 号竪穴建物跡（第 9～11 図）

**位置** 調査 A 区中央部の C 2 d7 区、標高 22 m ほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第 5・7・11・13・16 号竪穴建物に掘り込まれている。

**規模と形状** ほかの竪穴建物に掘り込まれているため、北西・南東は 8.72 m で、北東・南西軸は 6.68 m しか確認できなかった。残存部分から楕円形と推測でき、北西・南東軸方向は N - 45° - W である。壁は高さ 18 ~ 22cm で、外傾している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

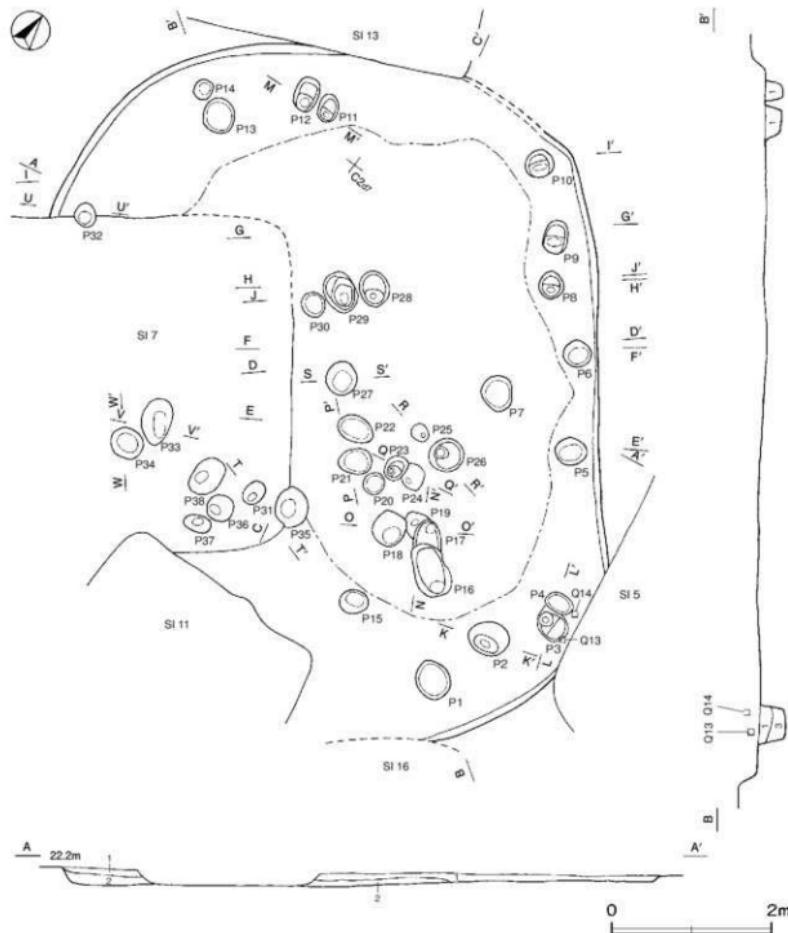
ピット 38か所。P 1～P 38は深さ12～74cmである。配置状況がまばらで、ほかの遺構に掘り込まれているため、主柱穴や出入り口施設に伴うピットは確認できなかった。

**ピット土層解説 (P 9・12・18・26・34以外)**

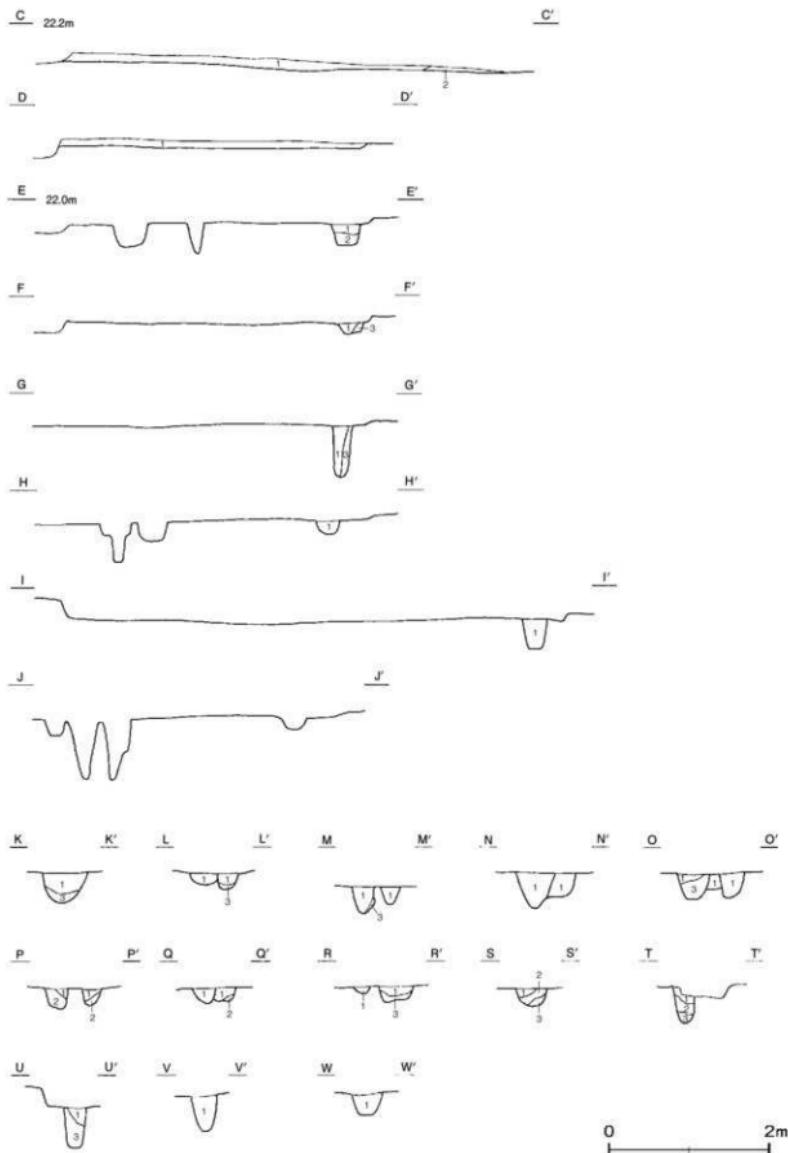
- 1 細褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 淡褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黄褐色 ロームブロック多量

**ピット土層解説 (P 9・12・18・26・34)**

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 明褐色 ロームブロック多量



第9図 第4号竪穴建物跡実測図（1）



第10図 第4号竪穴建物跡実測図（2）

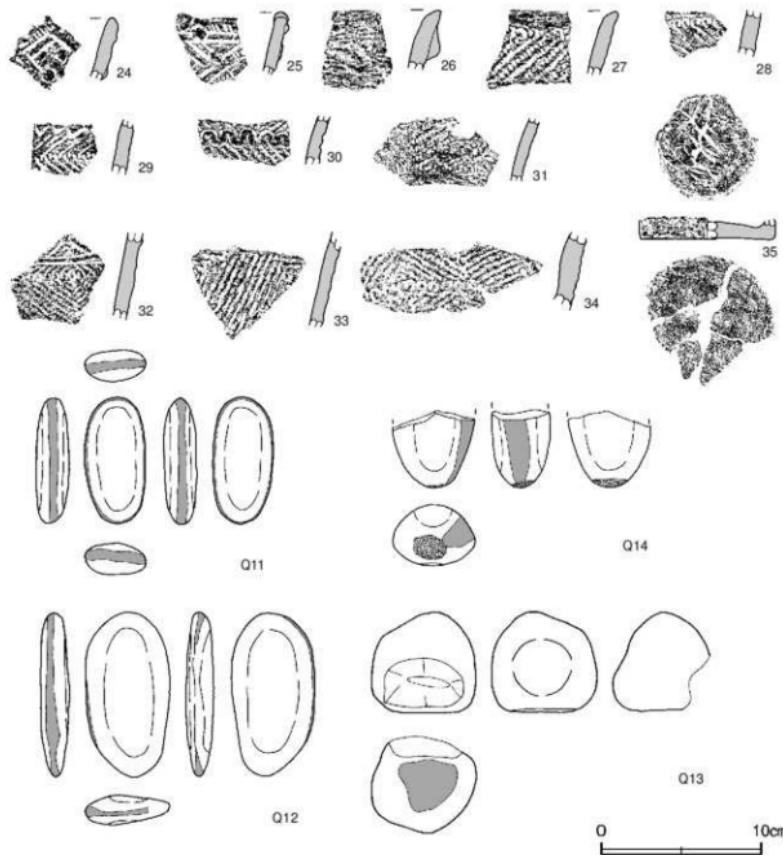
**覆土** 2層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

**土層解説**

1 暗褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量 2 明褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 縄文土器片128点(深鉢)、石器4点(磨石3、敲石1)、剥片35点(砂岩19、チャート8、安山岩5、石英2、ディサイト1)、火然した疊1点が、全域に散在して覆土上層から下層にかけて出土している。25・27は南東部の覆土下層、24・26・29・32は北西部、28・30・Q 11～Q 14は南東部の覆土上層、31・33～35は覆土中からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から前期前半(関山I式期)と考えられる。



第11図 第4号竪穴建物跡出土遺物実測図

第4号竪穴建物跡出土遺物觀察表（第11図）

番号	種 別	器種	口径	厚さ	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考	
24	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	長石・石英・繊維	にぶい黄褐色	普通	梯子状沈縄文→瘤状胎付文	北西部覆土上層	関山1式	
25	縄文土器	深鉢	-	(3.7)	-	長石・石英・繊維	にぶい黄褐色	普通	梯子状沈縄文→瘤状胎付文	南東部覆土下層	関山1式	
26	縄文土器	深鉢	-	(3.5)	-	長石・石英・繊維	明赤褐色	普通	筒状胎付文→無筋縄文R	北西部覆土上層	関山1式	
27	縄文土器	深鉢	-	(3.9)	-	長石・石英・繊維	明褐色	普通	單面縄文LR	南東部覆土下層	関山式	
28	縄文土器	深鉢	-	(2.7)	-	長石・石英・繊維	にぶい橙	普通	單面縄文LR→斜交文	南東部覆土上層	関山式	
29	縄文土器	深鉢	-	(3.2)	-	長石・石英・繊維	橙	普通	單面羽状縄文→コンバックス文	北西部覆土上層	関山1式	
30	縄文土器	深鉢	-	(2.9)	-	長石・石英・繊維	にぶい橙	普通	單面羽状縄文→コンバックス文	南東部覆土上層	関山1式	
31	縄文土器	深鉢	-	(4.0)	-	長石・石英・繊維	にぶい橙	普通	單面羽状縄文	覆土中	関山1式	
32	縄文土器	深鉢	-	(5.4)	-	長石・石英・繊維	にぶい赤褐色	普通	單面羽状縄文→半截竹管による沈縄文→斜交文	北西部覆土上層	関山1式	
33	縄文土器	深鉢	-	(5.9)	-	長石・石英・繊維	にぶい橙	普通	結束縄文第1種	覆土中	関山式	
34	縄文土器	深鉢	-	(4.8)	-	長石・石英・繊維	赤色粒子・繊維	橙	普通	結束縄文第1種	覆土中	関山1式
35	縄文土器	深鉢	-	(1.2)	[8.2]	長石・石英・繊維	にぶい橙	普通	外・内面ナゲ 内面擦痕	覆土中	後期前半	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q 11	磨石	7.8	3.7	2.0	864	砂岩	側縁部使用痕	南東部覆土上層	-
Q 12	磨石	10.1	5.1	1.8	1254	砂岩	側縁部片面使用痕	南東部覆土上層	-
Q 13	磨石	6.1	6.5	6.0	3072	砂岩	側縁部面に指掛け状の剥離 一面使用痕	南東部覆土上層	P L 18
Q 14	敲石	(4.8)	5.1	3.7	(98.0)	砂岩	磨石兼用 上部欠損 先端部敲打痕 側縁部片面磨痕	南東部覆土上層	-

## 第5号竪穴建物跡（第12図 PL 3）

位置 調査 A 区中央部の C 2 d8 区、標高 22 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第4号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 東部が調査区域外へ延びているため、南北軸は 5.25 m で、東西軸は 3.70 m しか確認できなかった。確認できた部分から方形または長方形と推測でき、南北軸方向は N - 8° - W である。壁は高さ 15 ~ 20 cm で、外傾している。

床 平坦で、全体が踏み固められている。

ピット 4 か所。東部が調査区域外へ延びているため、不明な部分があるが、P 1 は深さ 65 cm で主柱穴と考えられ、P 2 ~ P 4 は深さ 10 ~ 24 cm で補助柱穴と考えられる。

## ピット土層解説（P 2 ~ P 4）

1	暗 橙 色	ロームブロック中量
2	暗 橙 色	ロームブロック中量
3	暗 橙 色	ロームブロック少量
4	暗 橙 色	ロームブロック多量

## ピット土層解説（P 2 ~ P 4）

1	黒 橙 色	ロームブロック微量
2	暗 橙 色	ロームブロック多量
3	暗 橙 色	ロームブロック少量

覆土 2 層に分層できる。含有物が少なく、周囲からの流れ込んだ状況から、自然堆積である。

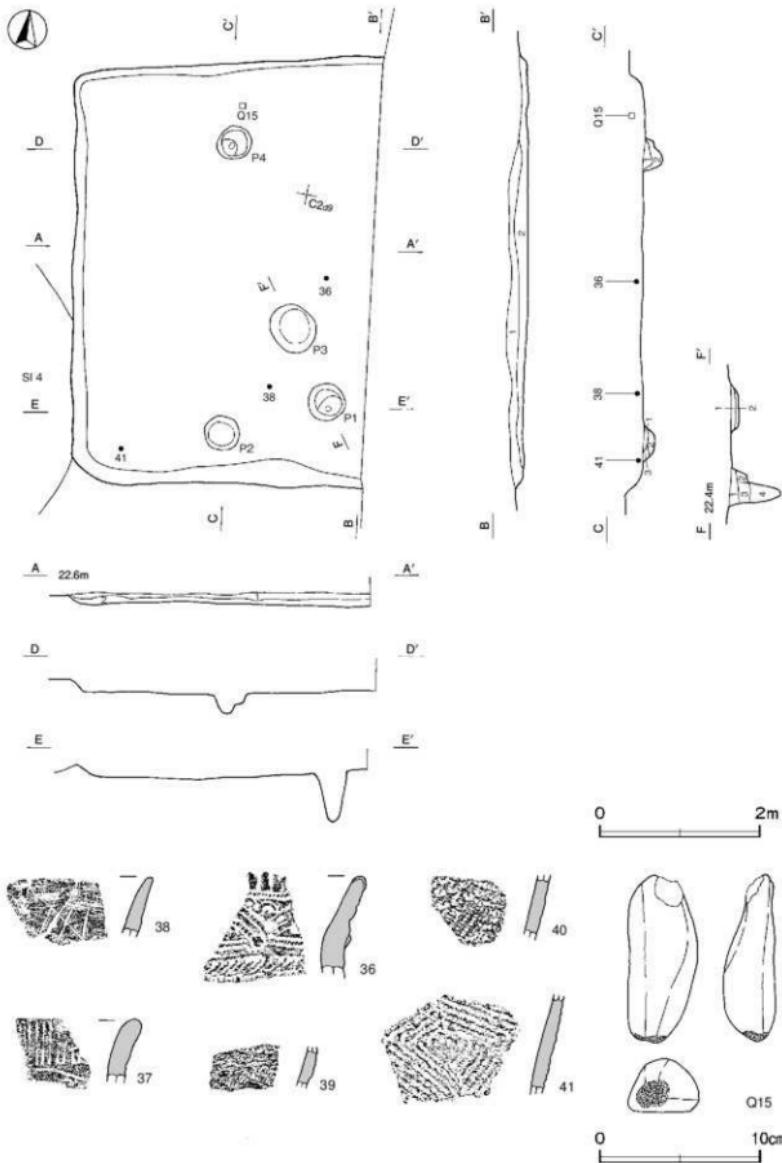
## 土層解説

1	暗 橙 色	ローム粒子微量
---	-------	---------

2	暗 橙 色	ロームブロック少量
---	-------	-----------

遺物出土状況 縄文土器片 73 点（深鉢）、石器 1 点（敲石）、剝片 23 点（砂岩 12、チャート 7、黒色片岩 1、石英閃綠岩 1、石灰岩 1、石英 1）が、覆土上層から下層にかけて散在した状態で出土している。38 は南部、41 は南西コーナー部、36 は東部の覆土下層、37 ~ 40 は南東部、39 は北西部、Q 15 は北部の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、前期前半の関山式と前期中葉の黒浜式の土器片が混在しているが、出土土器から前期中葉（黒浜式期）と考えられる。



第12図 第5号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第5号竪穴建物跡出土遺物観察表（第12図）

番号	種別	器種	口径	縦高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
36	縄文土器	深鉢	-	(6.1)	-	長石・石英・鐵達	棕	普通	口縁部山形の刷み目 口縁部梯子状焼締文→縁 鉢付文	東部覆土下層	関山I式
37	縄文土器	深鉢	-	(3.8)	-	長石・石英・骨粉 赤色粒子・鐵達	灰褐色	普通	手鉢骨質文	東東部覆土上層	関山II式
38	縄文土器	深鉢	-	(3.7)	-	長石・石英・ 骨粉・鐵達	灰褐色	普通	梯子状焼締文	南部覆土下層	黒浜式
39	縄文土器	深鉢	-	(2.4)	-	長石・鐵達	灰褐色	普通	梯子状焼締文L.R.	北西部覆土上層	黒浜式
40	縄文土器	深鉢	-	(4.0)	-	長石・石英・ 赤色粒子・鐵達	灰褐色	普通	單面羽状焼締文	東東部覆土上層	黒浜式
41	縄文土器	深鉢	-	(6.2)	-	長石・石英・ 赤色粒子・鐵達	灰褐色	普通	單面羽状焼締文	南西コーナー部 覆土下層	黒浜式

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 15	敲石	103	4.5	3.3	(1718)	石英閃岩	一部欠損 先端部敲打痕	北部覆土上層	-

## 第7号竪穴建物跡（第13・14図 PL 3・4）

位置 調査A区中央部のC2d6区、標高21mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第4号竪穴建物跡を掘り込み、第11号竪穴建物、第15号土坑、第4号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.38m、短軸4.16mの長方形で、長軸方向はN-51°-Eである。壁は高さ18~22cmで、外傾している。

床 平坦で、炉の周囲と東壁寄りが踏み固められている。

炉 炉はほぼ中央部に付設されている。長径102cm、短径92cmの梢円形の地床炉である。炉床は床面から深さ28cmで、火熱を受け赤変硬化している。

## 炉土層解説

- |         |                           |         |                       |
|---------|---------------------------|---------|-----------------------|
| 1 赤 極 色 | 燒土ブロック多量、ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 3 暗 極 色 | ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黄 極 色 | ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量     | 4 極 色   | ロームブロック多量             |

ピット 9か所。P1~P6は深さ10~41cmで、配置状況から主柱穴と考えられる。P7は深さ21cmで配置状況と床面の硬化範囲から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P8・P9は深さはそれぞれ15cm、34cmで、それぞれコーナー部に配置することから、補助柱穴と考えられる。

## ピット土層解説（各ピット共通）

- |         |                       |         |           |
|---------|-----------------------|---------|-----------|
| 1 黒 極 色 | ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量 | 3 明 極 色 | ロームブロック多量 |
| 2 黑 極 色 | ロームブロック多量             |         |           |

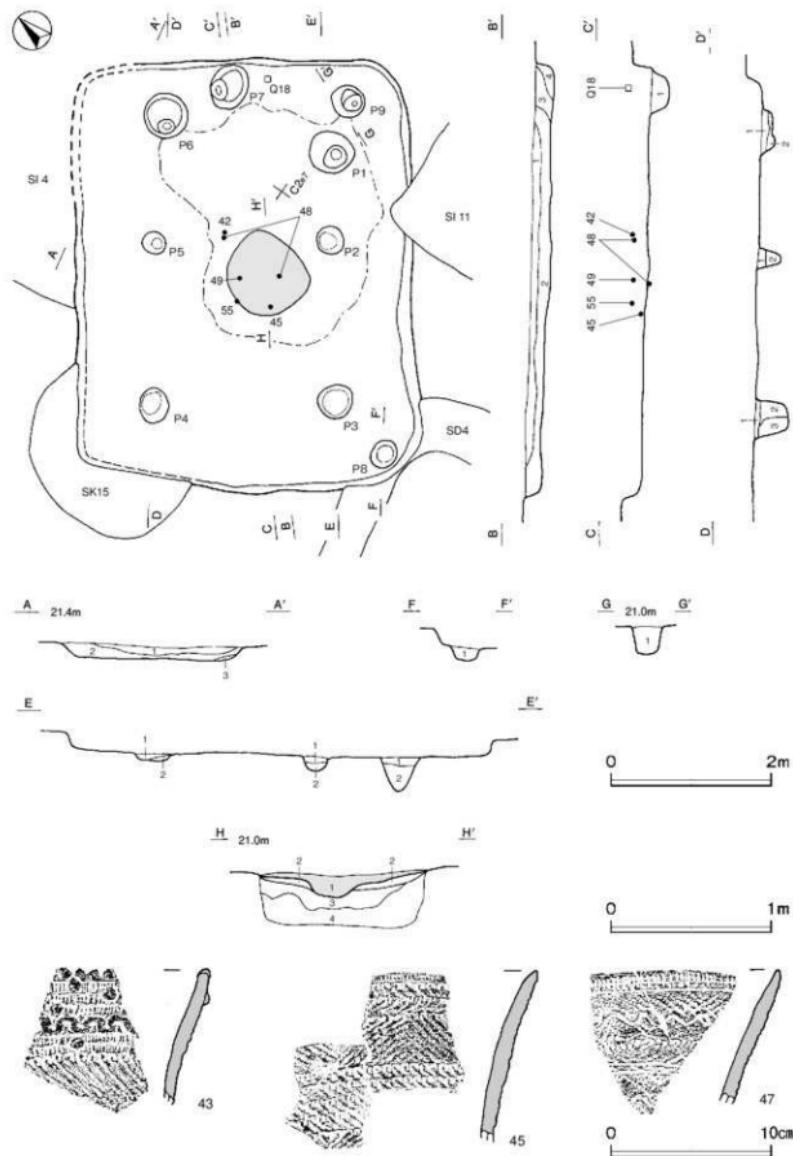
覆土 4層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

## 土層解説

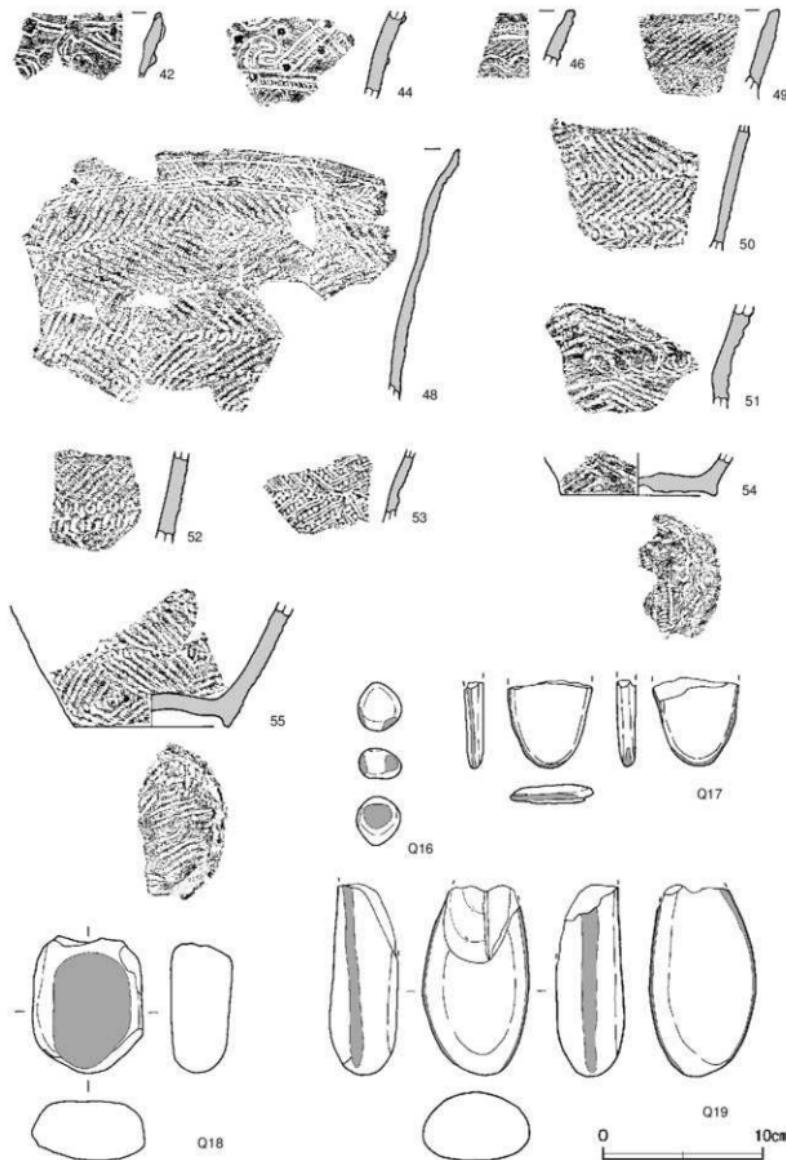
- |         |                       |         |                       |
|---------|-----------------------|---------|-----------------------|
| 1 黒 極 色 | ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量 | 3 極 色   | ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗 極 色 | ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量 | 4 明 極 色 | ロームブロック多量             |

遺物出土状況 縄文土器片300点（深鉢）、石器4点（磨石）、剥片71点（安山岩44、砂岩20、チャート5、雲母片岩1、石英岩1）が、覆土上層と炉内から散在した状態で出土している。特に覆土上層のものは、北部からの出土量が多くみられる。53は炉の掘方覆土中、45・48は炉内、42・49・55は中央部、43・44・54は南部、46・47・50~52、Q17・Q19は北部、Q18は東北部の覆土上層、Q16は覆土中からそれぞれ出土している。なお48は、炉内と中央部の覆土上層から出土している破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から前期前半（関山I式期）と考えられる。



第13図 第7号竪穴建物跡・出土遺物実測図



第14図 第7号竪穴建物跡出土遺物実測図

第7号竪穴建物跡出土遺物観察表（第13・14図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
42	縄文土器	深鉢	-	(4.0)	-	長石・石英・繊維	にい・赤茶	普通	半截竹管による沈置文→腹状貼付文	中央部覆土上層	関山1式
43	縄文土器	深鉢	-	(8.3)	-	長石・石英・赤色粒子・繊維	にい・赤茶	普通	口沿部山形の付文文→縄部梯子状沈置文→コラボス文→腹状貼付文、側部0段多条綱文	南部覆土上層	関山1式 P.L. 16
44	縄文土器	深鉢	-	(5.4)	-	長石・石英・赤色粒子・繊維	内・外・赤茶	普通	口縁部半截竹管による沈置文の中に削込みを充てん→コラボス文→腹状貼付文、側部0段多条綱文	南部覆土上層	関山1式
45	縄文土器	深鉢	-	(10.4)	-	長石・石英・赤色粒子・繊維	内・外・赤茶	普通	口部器割み目 単節羽状綱文→ループ文	側内	関山式 P.L. 16
46	縄文土器	深鉢	-	(3.4)	-	長石・石英・赤色粒子・繊維	にい・赤茶	普通	口部器割み目 単節羽状綱文→ループ文	北部覆土上層	関山1式
47	縄文土器	深鉢	-	(8.6)	-	長石・石英・赤色粒子・繊維	にい・赤茶	普通	口部器割み文 LR→梯子状沈置文→コラボス文	北部覆土上層	関山式 P.L. 16
48	縄文土器	深鉢	-	(15.4)	-	長石・石英・繊維	にい・赤茶	普通	口部器割み文 LR→梯子状沈置文→コラボス文	中央部覆土上層	関山1式 P.L. 16
49	縄文土器	深鉢	-	(5.4)	-	長石・石英・繊維	明赤茶	普通	口部器割み文 LR→梯子状沈置文	中央部覆土上層	関山1式
50	縄文土器	深鉢	-	(2.7)	-	長石・石英・赤色粒子・繊維	外側 内灰黄茶	普通	口部器割み文 LR→梯子状沈置文	北部覆土上層	関山1式 P.L. 17
51	縄文土器	深鉢	-	(6.4)	-	長石・石英・赤色粒子・繊維	橙	普通	単節羽状綱文→ループ文	北部覆土上層	関山1式
52	縄文土器	深鉢	-	(5.5)	-	長石・石英・赤色粒子・繊維	明赤茶	普通	口部器割み文 LR→梯子状沈置文	北部覆土上層	関山式
53	縄文土器	深鉢	-	(4.2)	-	長石・石英・繊維	明赤茶	普通	直面段合撫(正反合)羽状綱文	側面覆土中	関山式
54	縄文土器	深鉢	-	(2.6)	[9.6]	長石・石英・繊維	にい・赤	普通	側面下端半埋羽状綱文 底部外底單綱文 LR	南部覆土上層	5% 関山式
55	縄文土器	深鉢	-	(7.6)	[9.4]	長石・石英・赤色粒子・繊維	橙	普通	側部下端結束縫文第1種 底部外面單綱文 LR	中央部覆土上層	10% 関山式

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 16	磨石	30	27	19	18.5	泥岩	3か所使用痕	覆土中	P.L. 18
Q 17	磨石	(5.4)	(5.2)	12	(39.5)	砂岩	側縁部両面使用痕	北部覆土上層	-
Q 18	磨石	84	79	40	298.0	砂岩	一面使用痕	北東部覆土上層	P.L. 18
Q 19	磨石	(11.8)	6.6	43	(476.6)	砂岩	側縁部両面使用痕	北部覆土上層	P.L. 18

## 第8号竪穴建物跡（第15・16図 PL 4）

位置 調査A区南部のD2b9区。標高22mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第18号竪穴建物跡、第29号土坑を掘り込み、第2号竪穴建物、第2号陥し穴、第5・19号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 はかの遺構に掘り込まれているため、東西軸6.60mで、南北軸は7.10mしか確認できなかった。長方形と推定でき、南北軸方向はN-15°-Wである。壁は高さ8~10cmで、緩やかに立ち上っている。

床 平坦で、炉の周囲と東壁寄りが踏み固められている。

炉 2か所。炉1は北西部寄り、炉2南西部寄りにそれぞれ付設されている。炉1は長径70cm、短径48cmの楕円形の地床炉である。炉床は床面とほぼ同じ高さで、火熱を受け赤変硬化している。床面から28cmまで掘り込み、焼土ブロックとロームブロックを混入した2層とロームブロックを混入した3層を埋め戻して構築されている。炉2は長径90cm、短径40cmの楕円形の地床炉である。炉床は床面と同じ高さで、火熱を受け赤変硬化している。掘方は床面から30cmまで掘り込み、焼土ブロックとロームブロックを混入した第2・3層を埋め戻して構築されている。

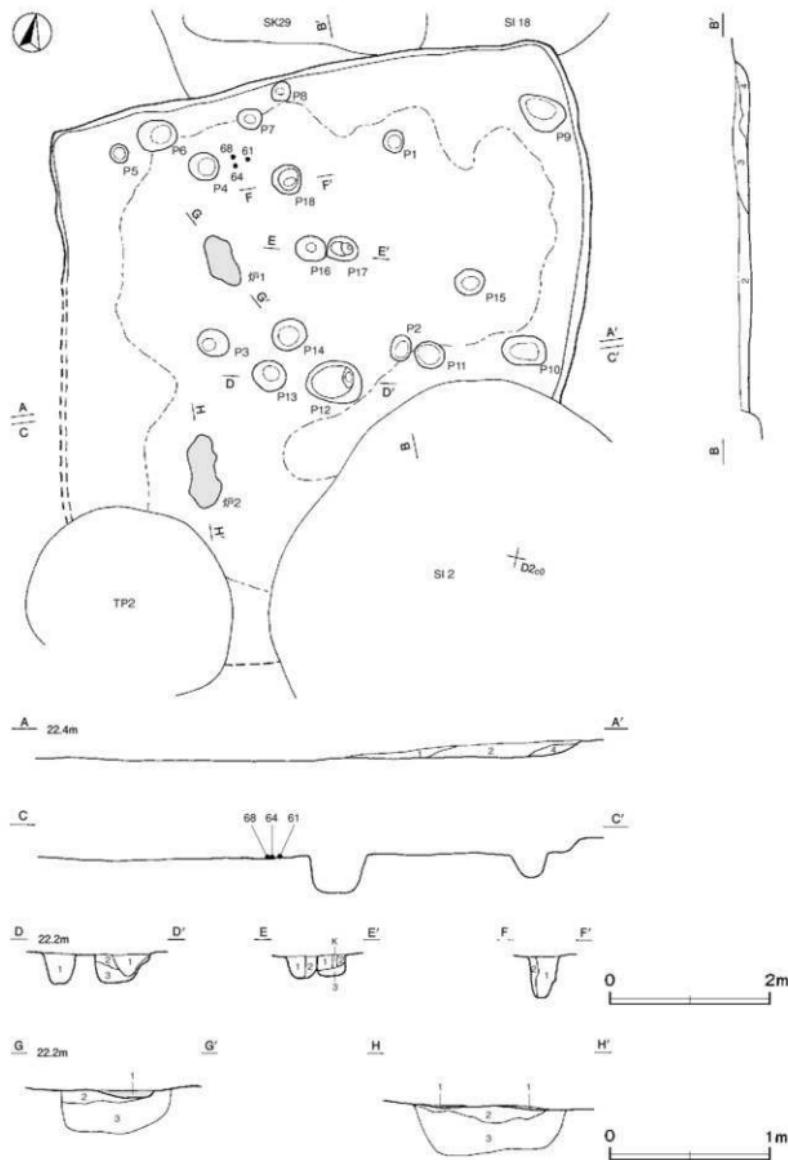
## 炉1土層解説

- 1 明赤褐色 焼土ブロック多量
- 2 黒褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック少量
- 3 明褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量

## 炉2土層解説

- 1 明赤褐色 焼土ブロック多量
- 2 黒褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック多量

ピット 18か所。P1~P4は深さ9~34cmで、配置状況から主柱穴と考えられる。南東部ははかの遺構に掘り込まれて不明であるが、配置状況から6本の主柱穴であった可能性がある。その他のピットは深さ12~52cmで、位置と深さが不揃いであるため、性格は不明である。



第15図 第8号竪穴建物跡実測図

**ピット土層解説（各ピット共通）**

- |                             |                |
|-----------------------------|----------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 褐色 ロームブロック多量 |
| 2 明褐色 ロームブロック多量             |                |

**覆土** 4層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

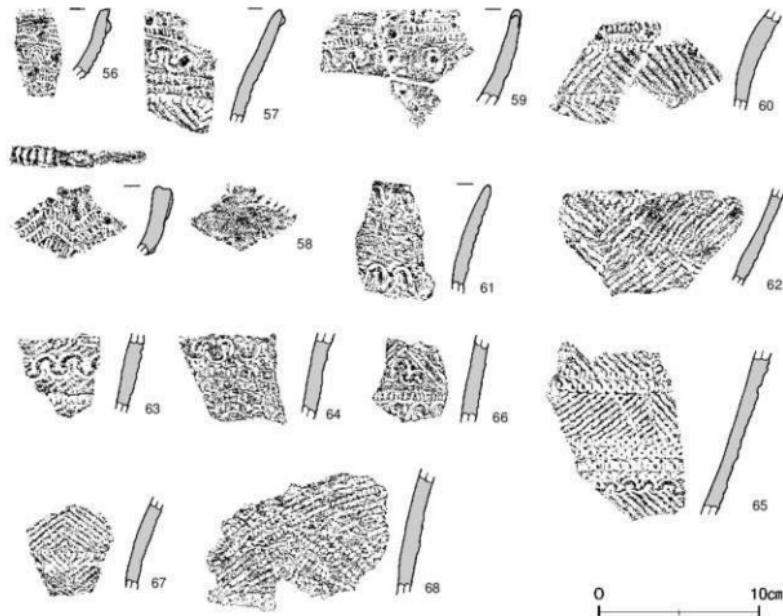
**土層解説**

- |                             |                            |
|-----------------------------|----------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 明褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 明褐色 ロームブロック多量            |

**遺物出土状況** 繩文土器片 146 点（深鉢）、削片 19 点（砂岩 9、安山岩 4、石灰岩 2、チャート 2、黒色片岩

1、雲母片岩 1）が、覆土中から床面にかけて出土している。特に覆土中のものは北東部に集中し、北西部に若干の出土がみられる。61・64・68 は北西部の床面、56～60・62・63・65～67 は北東部の覆土中からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から前期前半（関山 I 式期）と考えられる。



第 16 図 第 8 号堅穴建物跡出土遺物実測図

第 8 号堅穴建物跡出土遺物観察表（第 16 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
56	縄文土器	深鉢	-	(44)	-	灰石・石英・青石・礫類	にぶい赤褐	普通	平縞竹皆による洗顔文の中に刷毛目を光模→コントラストによる強烈貼付文	北東部覆土中	関山 I 式
57	縄文土器	深鉢	-	(70)	-	灰石・石英・青石・礫類	にぶい褐	普通	1周部手彫り文による洗顔文の中に刷毛目を光模出→コントラストによる強烈貼付文	北東部覆土中	関山 I 式

番号	種別	部種	口径	壁高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
58	縄文土器	深鉢	-	(4.3)	-	長石・石英・繊維	明赤褐色	普通 バス文→羽状貼付文	手取竹筒による沈縄文の中に刷み目を光燒→コン バス文→羽状貼付文	北東部覆土中	関山1式
59	縄文土器	深鉢	-	(5.5)	-	長石・石英・繊維	外縁 / 内底端	普通 バス文→羽状貼付文	手取竹筒による沈縄文の中に刷み目を光燒→コン バス文→羽状貼付文	北東部覆土中	関山1式
60	縄文土器	深鉢	-	(6.2)	-	長石・石英・繊維	にぶい・相	普通 バス文→羽状貼付文	手取竹筒による沈縄文の中に刷み目を光燒→コン バス文→羽状貼付文	北東部覆土中	関山1式
61	縄文土器	深鉢	-	(6.8)	-	長石・石英・繊維	にぶい・相	普通 単節羽状縄文→縦長いコンバス文	北西部床面	関山1式	
62	縄文土器	深鉢	-	(5.9)	-	長石・石英・繊維	相	普通 結束縄文第1種	北東部覆土中	関山1式	
63	縄文土器	深鉢	-	(4.8)	-	長石・石英・繊維	相	普通 単節羽状縄文→コンバス文	北東部覆土中	関山1式	
64	縄文土器	深鉢	-	(5.1)	-	長石・石英・繊維	相	普通 単節羽状縄文→コンバス文	北西部床面	関山1式	
65	縄文土器	深鉢	-	(10.1)	-	長石・石英・繊維	にひ・赤褐色	普通 バス文	手取竹筒による羽状縄文→結束縄文第2種→コ ンバス文	北東部覆土中	関山1式
66	縄文土器	深鉢	-	(4.9)	-	長石・石英・繊維	外明赤褐色 内黒褐色	普通 直前投合焼(正反合) 縄文による羽状構成	北東部覆土中	関山1式	
67	縄文土器	深鉢	-	(5.8)	-	長石・石英・繊維	相	普通 結束縄文第1種	北東部覆土中	関山1式	
68	縄文土器	深鉢	-	(7.8)	-	長石・石英・繊維	にぶい・相	普通 直前投合焼(正反合) 縄文による羽状構成	北西部床面 P. 1, 17		

### 第9号竪穴建物跡 (第17・18図 PL 5)

位置 調査A区中央部のC2h6区、標高22mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号方形周溝墓に掘り込まれている。

規模と形状 第1号方形周溝墓の埋葬施設に掘り込まれているが、北西・南東軸3.72m、北東・南西軸は4.04mの長方形と推測できる。北東・南西軸方向はN-60°-Eである。壁は高さ3~12cmで、外傾している。

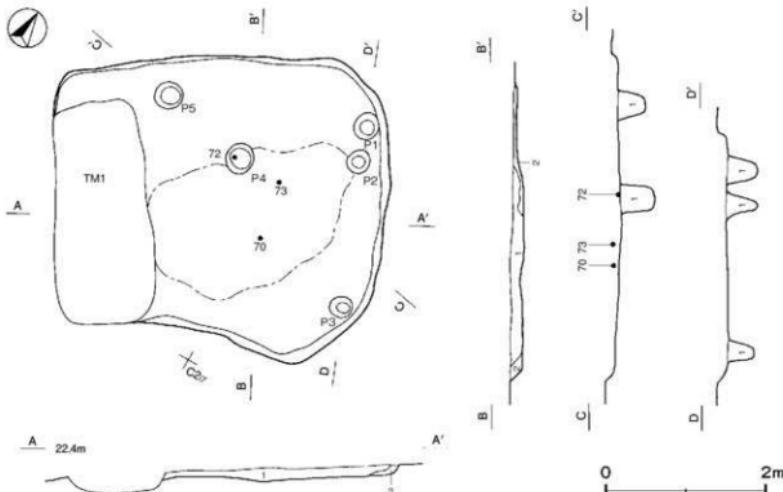
床 平坦で、中央部から北東壁寄りにかけて踏み固められている。

ピット 5か所。P4は深さ42cmで、ほぼ中央に位置する配置状況から主柱穴と考えられる。P1~P3・

P5は深さ32~38cmで、壁際に配置されている状況から、補助柱穴と考えられる。

#### ピット土層解説 (各ピット共通)

1 埋 地色 ロームブロック多量、炭化枝子微量



第17図 第9号竪穴建物跡実測図

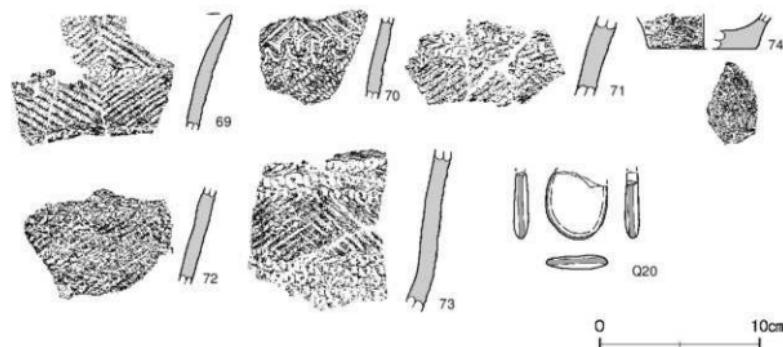
**覆土** 2層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれていることから、埋め戻されている。

**土層解説**

1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 2 明褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 繩文土器片43点(深鉢)、石器1点(磨石)、自然縫1点(安山岩)が、覆土中から散在した状態で出土している。70は南東部、72・73は中央部の覆土下層、Q20は南東部の覆土上層、69は北東部、71・74は北西部の覆土中からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から前期前半(関山I式期)と考えられる。



第18図 第9号竪穴建物跡出土遺物実測図

第9号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第18図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
69	繩文土器	深鉢	-	(7.1)	-	長石・石英・黒母・赤色粒子・繩維	明褐色	普通	結束縄文第1種	北東部覆土中	関山I式
70	繩文土器	深鉢	-	(5.0)	-	長石・石英・青白・繩維	にぬき縫	普通	開始縄文第1種→半載竹管による沈縄文→コシバ 火文	南東部覆土下層	関山I式
71	繩文土器	深鉢	-	(4.9)	-	長石・石英・繩維	にぬき縫	普通	結束縄文第2種	北西部覆土中	関山I式
72	繩文土器	深鉢	-	(5.8)	-	長石・石英・繩維	標	普通	結束縄文第1種	中央部覆土下層	関山I式
73	繩文土器	深鉢	-	(9.8)	-	長石・石英・繩維	にぬき縫	普通	結束縄文第1種→ループ文	中央部覆土下層	関山I式
74	繩文土器	深鉢	-	(2.2)	(6.6)	長石・石英・繩維	にぬき縫	普通	内面ナデ	北西部覆土中	5cm

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q20	磨石	(4.1)	3.8	0.8	(160)	砂岩	一部欠損 繩縫部使用痕	南東部覆土上層	-

第10号竪穴建物跡 (第19・20図 PL 5)

**位置** 調査A区南部のC2a8区、標高22mほどの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 東部が調査区域外に延びているため、南北軸は6.70mで、東西軸は2.40mしか確認できなかった。

残存部分の形状から方形または長方形と推測できる。南北軸方向はN-12°-Wである。壁は高さ7~11cmで、外傾している。

**床** 平坦で、北西部コーナー部と南壁際を除いて踏み固められている。

**ピット** 7か所。調査区域外に延びていることから不明な点が多いが、P1・P2は深さが42・27cmで、配置状況から主柱穴と推測できる。P5は深さ44cmで南壁際の配置状況と床面が硬化しているところから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。底面には柱のあたりが認められる。P3・P4・P6・P7は深さ10～40cmで、配置状況が不鮮明なため、性格は不明である。

**ピット土層解説 (P1・P3)**

- 1 黒褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量
- 2 黑褐色 ロームブロック少量、焼土粒子、炭化粒子微量
- 3 黄褐色 ロームブロック多量

- 2 黑褐色 ロームブロック多量、焼土粒子、炭化粒子微量
- 3 黄褐色 ロームブロック多量

**ピット土層解説 (P4)**

- 1 黒褐色 ロームブロック多量、焼土粒子、炭化粒子微量

**ピット土層解説 (P5・P7)**

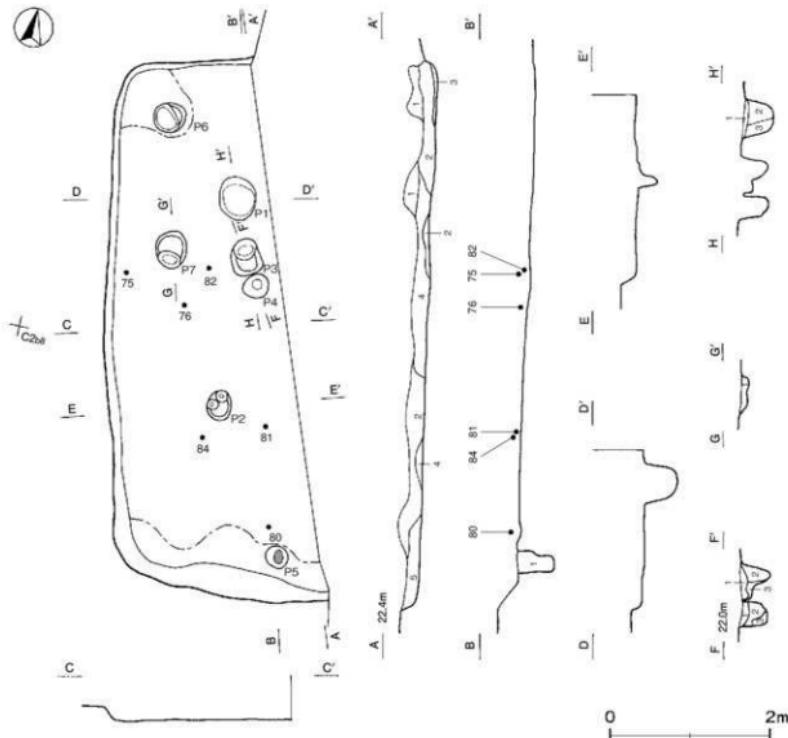
- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子、炭化粒子微量

**覆土** 5層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれ、不規則な堆積状況から埋め戻されている。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量
- 3 褐色 ロームブロック多量

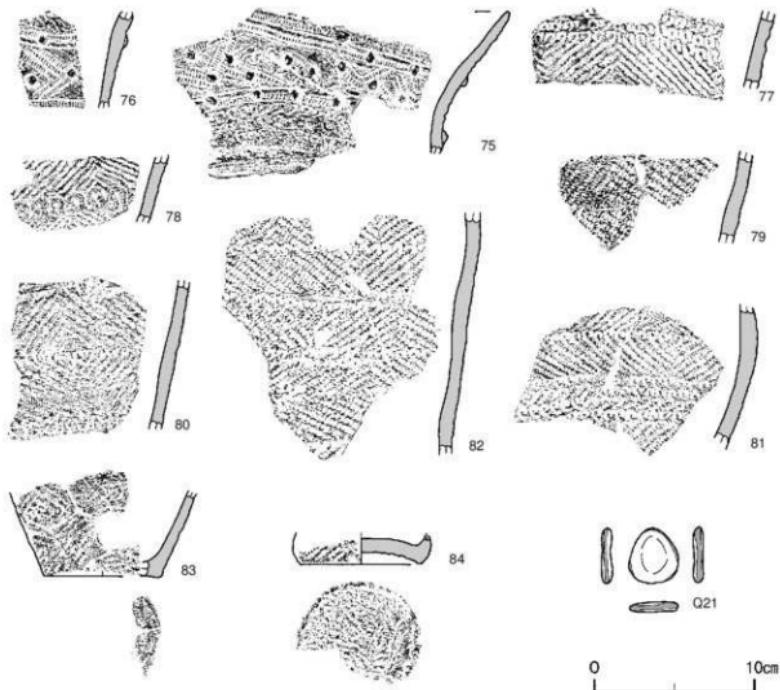
- 4 明褐色 ロームブロック多量
- 5 黑褐色 ロームブロック少量



第19図 第10号堅穴建物跡実測図

**遺物出土状況** 繩文土器片 76 点（深鉢），石器 1 点（磨石），剥片 10 点（砂岩 3，チャート 2，疊岩 2，雲母片岩 1，緑色片岩 1），石灰岩 1）が、覆土上層から下層にかけて散在した状態で出土している。75・76・82 は西部，77 は北部，78・80・81・84 は南部の覆土下層，83 は北部，79・Q21 は南部の覆土上層からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から前期前半（関山 I 式期）と考えられる。



第 20 図 第 10 号堅穴建物跡出土遺物実測図

第 10 号堅穴建物跡出土遺物観察表（第 20 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
75	縄文土器	深鉢	-	(92)	-	長石・石英・繩維	明赤褐色	普通	土台平敷竹管による洗練文の中に割込み目を充填	西部覆土下層	関山 I 式 P.L. 17
76	縄文土器	深鉢	-	(69)	-	長石・石英・繩維	褐色	普通	土台平敷竹管による洗練文の中に割込み目を充填→刷毛刷拭行文	西部覆土下層	関山 I 式
77	縄文土器	深鉢	-	(49)	-	長石・石英・繩維	褐色	普通	上位多段ループ文 下位單節羽状繩文	北部覆土下層	関山 I 式
78	縄文土器	深鉢	-	(43)	-	長石・石英・繩維	褐色	普通	单節羽状繩文→コンバース文	南部覆土下層	関山 I 式
79	縄文土器	深鉢	-	(56)	-	長石・石英・繩維	褐色	普通	单節羽状繩文	南部覆土上層	関山式
80	縄文土器	深鉢	-	(93)	-	長石・石英・繩維	褐色	普通	結束羽状繩文第 2 種	南部覆土下層	関山 I 式
81	縄文土器	深鉢	-	(75)	-	長石・石英・繩維	褐色	普通	上位束縛繩文第 1 種 多段ループ文	南部覆土下層	関山 I 式
82	縄文土器	深鉢	-	(148)	-	長石・石英・繩維	褐色	普通	結束束縛繩文第 1 種	西部覆土下層	関山 I 式 P.L. 17

### 第12号竪穴建物跡（第21・22図）

**位置** 調査A区中央部のC217区、標高22mほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第16号竪穴建物跡を掘り込み、第11号竪穴建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 第11号竪穴建物に掘り込まれているため、東西軸は3.10mで、南北軸は1.10mしか確認できなかった。残存部分の形状から台形と推測でき、東西軸方向はN-90°-Wである。壁は高さ17~38cmで、ほぼ直立している。

**床** 平坦である。特に顯著な踏み固めは確認できなかった。

**ピット** 3か所。P1は深さ20cm、P2は深さ17cm、P3は深さ19cmである。全体の配置状況が確認できいため、性格は不明である。

#### ピット土層解説（各ピット共通）

1 黒褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量

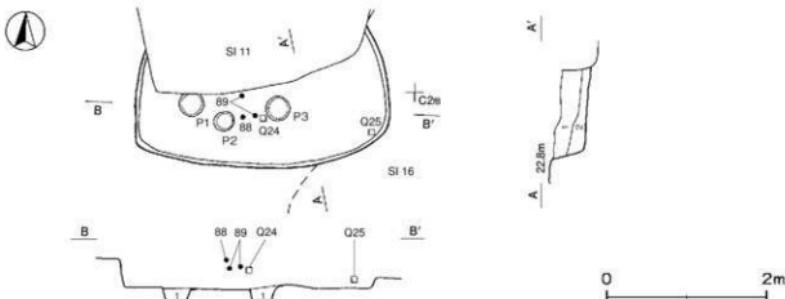
**覆土** 2層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

#### 土層解説

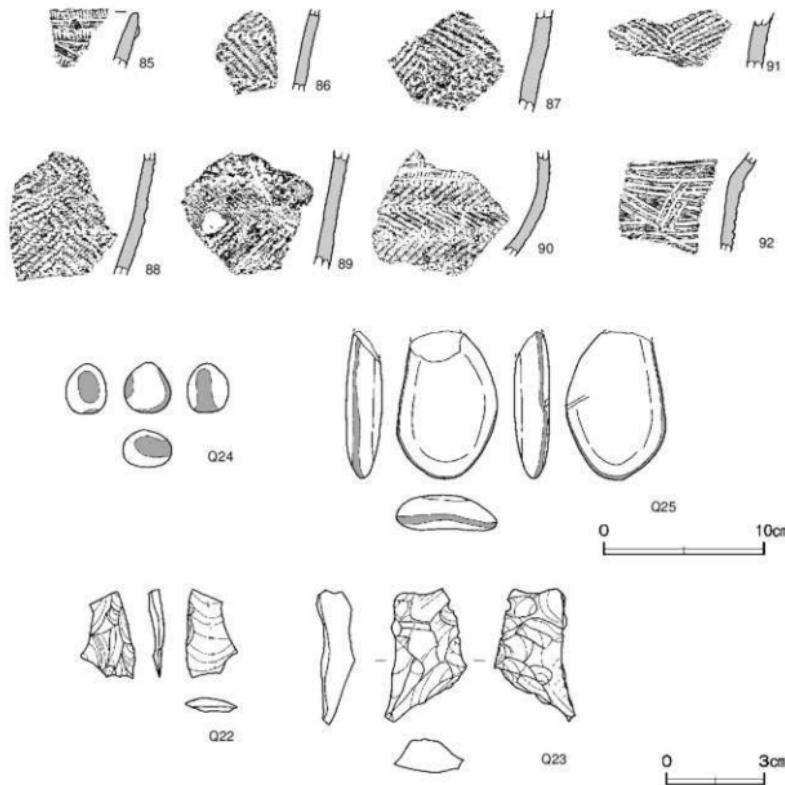
1 黒褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量 2 暗褐色 ロームブロック多量

**遺物出土状況** 繩文土器片81点（深鉢）、石器4点（搔器2、磨石2）、剝片4点（砂岩3、安山岩1）が、覆土上層から下層にかけて散在した状態で出土している。特に南壁寄りの中央部分に集中している。Q25は南東部の覆土下層、85・86・90は東部、87・91・92は西部、88・89・Q24は南部の覆土上層、Q22・Q23は覆土中からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から前期前半（関山I式期）と考えられる。



第21図 第12号竪穴建物跡実測図



第22図 第12号堅穴建物跡出土遺物実測図

第12号堅穴建物跡出土遺物観察表（第22図）

番号	種別	器種	口径	器高	底深	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
85	縄文土器	深鉢	-	(3.5)	-	長石・石英・繊維	にぶい褐色	普通	梯子状弦文→瘤状貼付文	東部覆土上層	関山1式
86	縄文土器	深鉢	-	(5.0)	-	長石・石英・繊維	明褐色	普通	結束縄文1種	東部覆土上層	関山1式
87	縄文土器	深鉢	-	(6.1)	-	長石・石英・ 雲母・繊維	にぶい褐色	普通	結束縄文1種	西部覆土上層	関山1式
88	縄文土器	深鉢	-	(7.4)	-	長石・石英・ 雲母・繊維	明赤褐色	普通	結束縄文第1種	南部覆土上層	関山1式
89	縄文土器	深鉢	-	(7.3)	-	長石・石英・繊維	褐色	普通	補修孔、多段ループ文→單節羽状縄文	南部覆土上層	関山1式
90	縄文土器	深鉢	-	(6.5)	-	長石・石英・繊維	にぶい褐色	普通	上部梯子状弦文、下位結束縄文第1種	東部覆土上層	関山1式 P.1.17
91	縄文土器	深鉢	-	(3.5)	-	長石・石英・繊維	褐色	普通	單節羽状縄文	西部覆土上層	前期前半
92	縄文土器	深鉢	-	(5.9)	-	長石・石英・繊維	褐色	普通	平底竹筒による沈縄文	西部覆土上層	前期前半

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 22	鋸器	27	1.6	0.4	1.48	黒曜石	刃部片面調整	覆土中	P L 18
Q 23	鋸器	41	2.5	1.1	9.66	チャート	刃部片面調整	覆土中	P L 18
Q 24	磨石	30	3.0	2.4	28.8	安山岩	3か所使用痕	南部覆土上場	-
Q 25	磨石	(9.1)	6.2	2.2	(167.3)	砂岩	開縫部両面使用痕	南東部覆土下層	-

### 第 14 号竪穴建物跡 (第 23 図 PL 5)

**位置** 調査 A 区北部の C 2a7 区、標高 18 ~ 19 m ほどの台地斜面部に位置している。

**規模と形状** 西部が調査区域外に延びているため、南北軸は 4.10 m で、東西軸は 3.06 m しか確認できなかった。

残存部分の形状から楕円形と推測できる。南北軸方向は N = 0° である。壁は高さ 10 ~ 26 cm で、外傾している。

**床** 平坦である。特に顯著な踏み固めは確認できなかった。

**ピット** 7 か所。P 1 ~ P 7 は深さ 10 ~ 22 cm である。配置状況の全容がつかめないため、性格は不明である。

#### ピット土層解説 (各ピット共通)

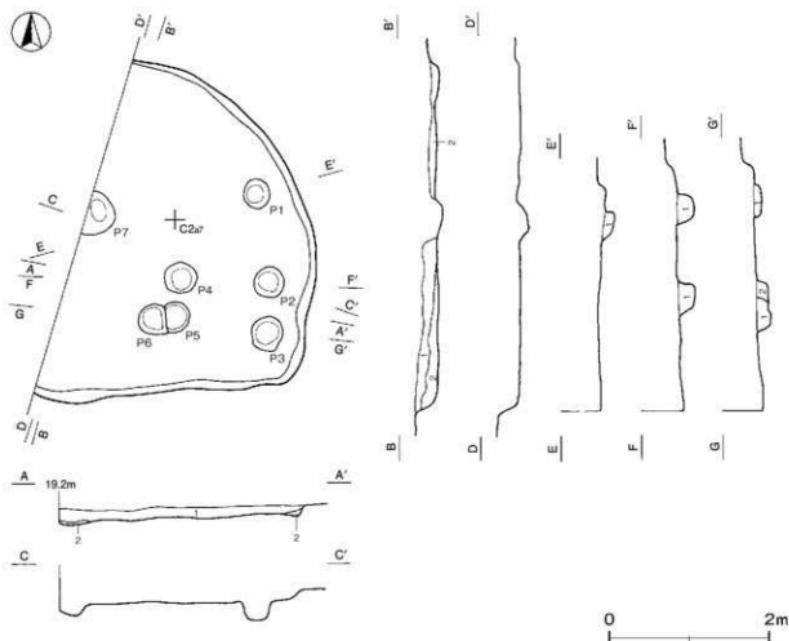
1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 2 明褐色 ロームブロック多量

**覆土** 2 層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれていることから、埋め戻されている。

#### 土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 2 明褐色 ロームブロック多量

**所見** 時期は、出土遺物がないが、遺構の形状や覆土の状況から縄文時代と考えられる。



第 23 図 第 14 号竪穴建物跡実測図

### 第15号竪穴建物跡（第24図 PL 6）

**位置** 調査A区中央部のC2h5区、標高21mほどの平坦部に位置している。

**重複関係** 第1号方形周溝墓に掘り込まれている。

**規模と形状** 第1号方形周溝墓に掘り込まれているため、東西軸は3.68mで、南北軸は2.40mしか確認できなかった。残存部分の形状から楕円形と推測でき、東西軸方向はN-55°-Eである。壁は高さ6~18cmで、ほぼ直立している。

**床** 平坦で、特に顯著な踏み固めは確認できなかった。

**炉** 南壁寄りに付設されている。長径90cm、短径74cmの楕円形の地床炉である。炉床は床面とほぼ同じ高さで、火熱を受けて赤変硬化している。床面から深さ16cmほど掘り込み、焼土ブロックやロームブロックを多量に含んだ第3~8層を埋め戻して構築されている。

#### 炉土層解説

1	暗 色	ローム粒子中量	5	にぶい赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子微量
2	暗赤褐色	焼土ブロック多量、ロームブロック少量	6	褐 色	ロームブロック中量
3	明赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子微量	7	明 褐 色	焼土ブロック少量、炭化粒子微量
4	暗 褐 色	ローム粒子少量	8	黄 褐 色	ロームブロック多量、焼土粒子微量

**ピット** 4か所。P1~P3は深さ13~25cmで、壁際の配置状況から主柱穴、または補助柱穴と推測できる。P4は深さ22cmで、性格は不明である。

#### ピット土層解説（各ピット共通）

1	暗 褐 色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
---	-------	-----------------------

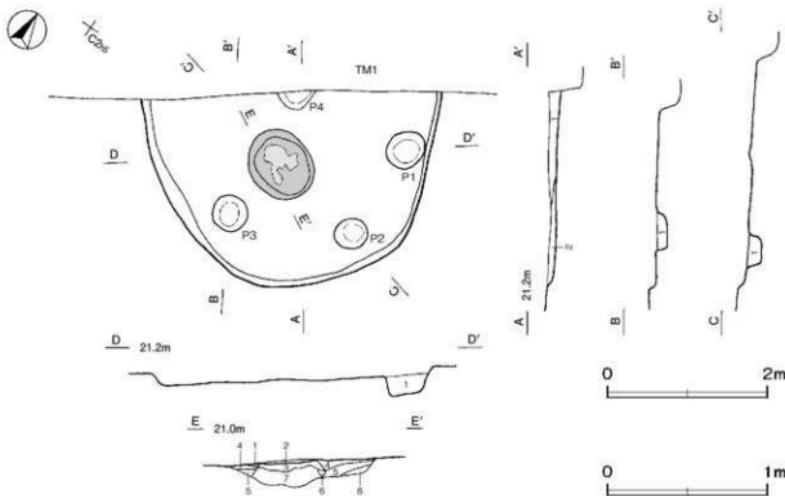
**覆土** 2層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれ、不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

#### 土層解説

1	暗 褐 色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	2	明 褐 色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量
---	-------	-----------------------	---	-------	-----------------------

**遺物出土状況** 剥片1点（凝灰岩）が覆土中から出土している。

**所見** 出土土器がないため、詳細な時期は不明であるが、遺構の形状や覆土の状況から縄文時代と考えられる。



第24図 第15号竪穴建物跡実測図

第16号竪穴建物跡（第25・26図 PL 6）

位置 調査A区中央部のC28区、標高22mほどの台地平坦部に位置している。

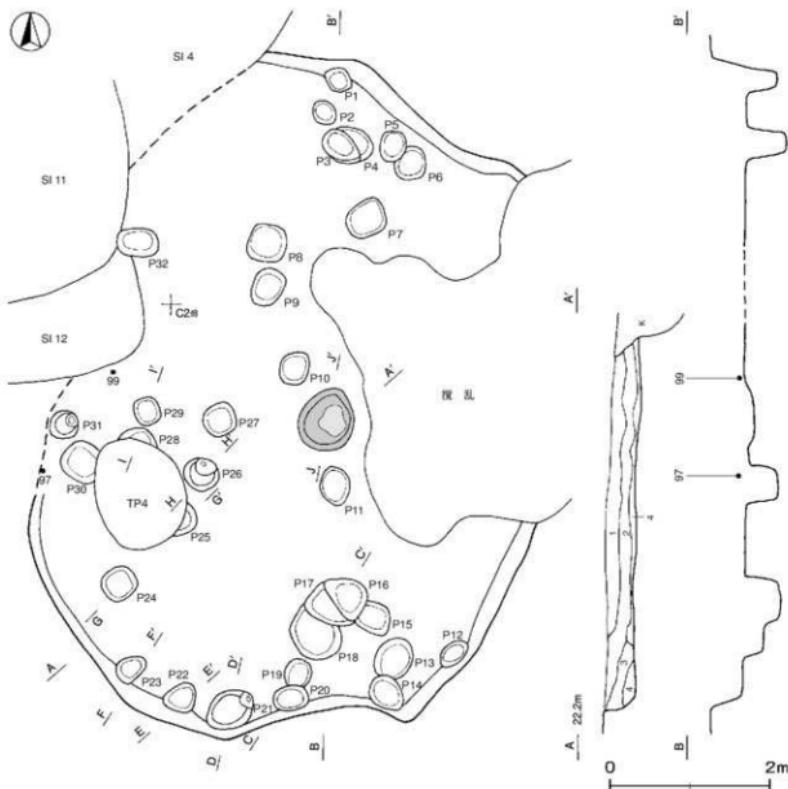
重複関係 第4・11・12号竪穴建物、第4号陥入穴、第9号土坑に掘り込まれている。さらに東部は、風倒木痕で壊されている。

規模と形状 ほかの遺構に掘り込まれ、東部を風倒木痕で壊されているため、北東・南西軸は8.20mで、北西・南東軸は6.08mしか確認できなかった。残存部分の形状から楕円形と推測できる。北西・南東軸方向はN-23°-Eである。壁は高さ22~30cmで、ほぼ直立している。

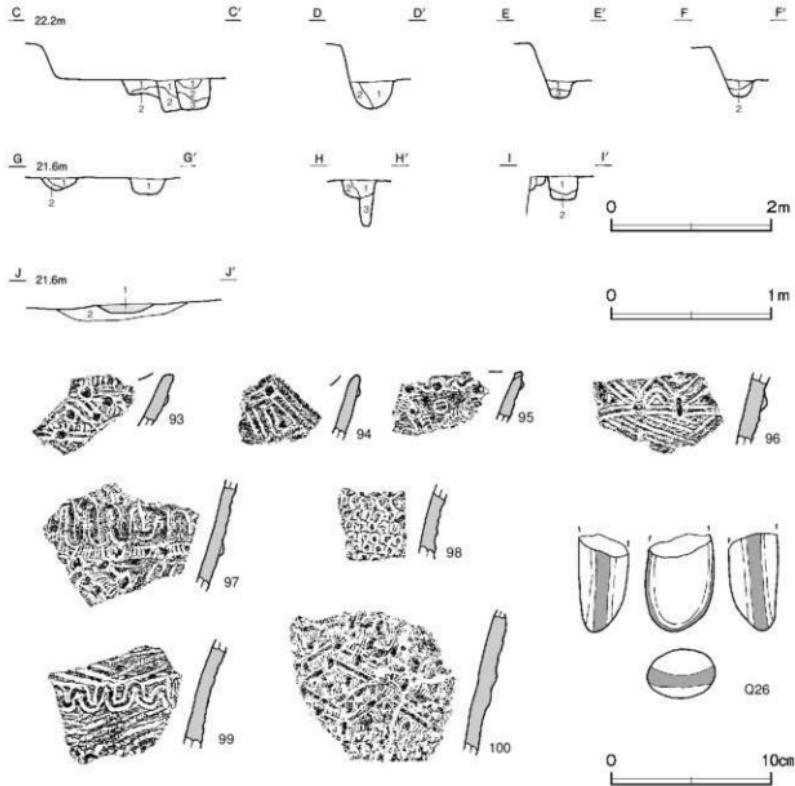
床 平坦で、特に顯著な踏み固めは確認できなかった。

炉 残存部分からほぼ中央部に付設されていると推測できる。長径80cm、短径70cmの楕円形の地床炉である。

炉床は床面と同じ高さで、火熱を受け赤変硬化している。床面から10cmほど掘り込み、焼土ブロックとロームブロックを含んだ第2層を埋め戻して構築されている。



第25図 第16号竪穴建物跡実測図



第26図 第16号堅穴建物跡・出土遺物実測図

**炉土層解説**

1 赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子微量

2 棕褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック中量

**ピット** 32か所。P 1～P 32は深さ9～61cmである。主柱穴は配置状況や深さが不揃いであることから不明である。補助柱穴は壁際に位置するP 1・P 3・P 5・P 6・P 12・P 14・P 20～P 23が該当し、そのほかのピットは性格不明である。

**ピット土層解説 (P16・P18・P22)**

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 棕褐色 ロームブロック多量
- 3 明褐色 ロームブロック多量

**ピット土層解説 (その他)**

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 明褐色 ロームブロック多量
- 3 棕褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

**覆土** 4層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれていることから、埋め戻されている。

**土層解説**

- |                             |                             |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 棕褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 明褐色 ロームブロック多量             |

**遺物出土状況** 繩文土器片 162 点（深鉢）、石器 1 点（磨石）、剥片 44 点（砂岩 20、安山岩 10、チャート 9、石英岩 3、雲母片岩 2）が、北部と東部の覆土中層から下層にかけて出土している。特に北部に集中している。97・99 は西部、100 は北部の覆土下層、93～96・98・Q 26 は北部の覆土中層からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から前期前半（関山 1 式期）と考えられる。

第 16 号堅穴建物跡出土遺物観察表（第 26 図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
93	縄文土器	深鉢	-	(3.1)	-	長石・石英・構造	にぶい褐色	普通	梯子状沈澱文・瘤状胎付文	北部覆土中層	関山 1 式
94	縄文土器	深鉢	-	(4.0)	-	長石・石英・構造	にぶい褐色	普通	波状口縁・梯子状沈澱文・瘤状胎付文	北部覆土中層	関山 1 式
95	縄文土器	深鉢	-	(3.1)	-	長石・石英・構造	にぶい褐色	普通	円形竹管による網状文・手載竹管による爪形文	北部覆土中層	関山 1 式
96	縄文土器	深鉢	-	(4.1)	-	長石・石英・構造	にぶい褐色	普通	円形竹管による網状文・手載竹管による爪形文→手載竹管によるコンバスト・瘤状胎付文	北部覆土中層	PL 17
97	縄文土器	深鉢	-	(6.8)	-	長石・石英・構造	にぶい褐色	普通	直角多条縞文→半斜竹管による平行沈澱文→瘤状胎付文	北部覆土中層	PL 17
98	縄文土器	深鉢	-	(4.3)	-	長石・石英・構造	にぶい褐色	普通	梯子状沈澱文→コンバスト・瘤状胎付文	北部覆土中層	関山 1 式
99	縄文土器	深鉢	-	(6.6)	-	長石・石英・構造	にぶい褐色	普通	直角羽状綫文→縦長いコンバスト文	北部覆土下層	関山 1 式
100	縄文土器	深鉢	-	(8.7)	-	長石・石英・構造	褐色	普通	梯子状沈澱文→多段ループ文・瘤状胎付文	北部覆土下層	関山 1 式

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 26	磨石	(6.1)	(4.3)	(3.0)	(105.1)	砂岩	側縁部両面使用痕	北部覆土中層	-

第 17 号堅穴建物跡（第 27 図 PL 6）

**位置** 調査 A 区中央部の C 218 区、標高 23 m ほどの平坦部に位置している。

**重複関係** 第 6 号堅穴建物、第 1 号方形周溝墓に掘り込まれている。

**規模と形状** ほかの遺構に掘り込まれているため、北西・南東軸は 4.16 m で、北東・南西軸は 2.40 m しか確認できなかった。残存部分の形状から楕円形と推測できる。北西・南東軸方向は N - 43° - W である。壁は高さ 8～20cm で、ほぼ直立している。

**床** 平坦である。特に顯著な踏み固めは確認できなかった。

**炉** 南東コーナー部に付設されている。長径 62cm、短径 48cm の楕円形の地床炉である。炉床は床面と同じ高さで、火熱を受け赤変硬化している。掘方は床面から 12cm まで掘り込み、ロームブロックを含んだ 2 層を埋め戻して構築されている。

#### 炉土層解説

1 赤褐色 燐土ブロック多量、炭化粒子微量 2 黑褐色 ロームブロック多量、燒土粒子、炭化粒子微量

**ピット** 7 か所。P 1～P 7 は深さ 12～37cm で、ほかの遺構に掘り込まれているため、不明な点もあるが、壁際の配置状況から主柱穴に対する補助柱穴と推測できる。

#### ピット土層解説（各ピット共通）

1 黒褐色 ロームブロック中量

**覆土** 3 層に分層できる。第 1 層は含有物がきわめて少ない自然堆積で、2 層以下はロームブロックが多く含まれていることから、埋め戻されている。

#### 土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量、燒土粒子、炭化粒子微量

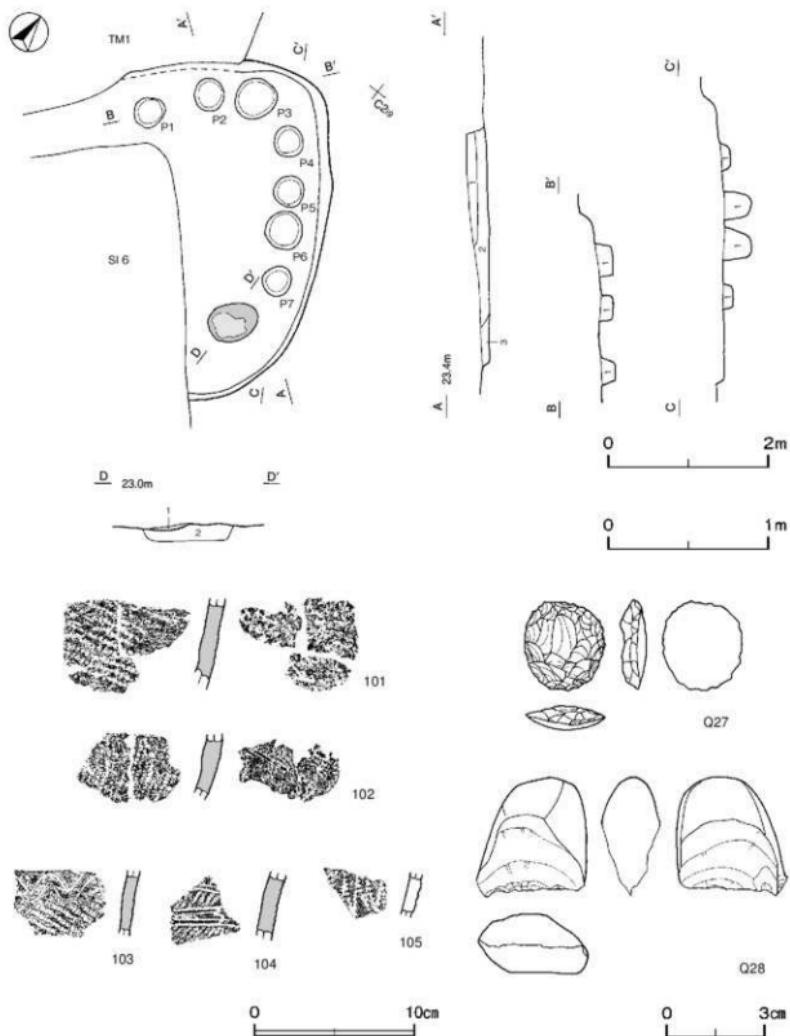
2 黑褐色 ロームブロック多量、燒土粒子、炭化粒子微量

3 明褐色 ロームブロック多量、燒土ブロック少量、炭化粒子微量

4 黑褐色 ロームブロック少量、燒土粒子、炭化粒子微量

**遺物出土状況** 縄文土器片 21 点（深鉢）、石器 2 点（円形搔器・搔器）、剥片 11 点（安山岩 3、頁岩 2、砂岩 2、チャート 2、石英岩 1、石灰岩 1）が東部と西部に散在して覆土中から出土している。101 は東部、102

~ 105・Q 27 は西部、Q 28 は覆土中からそれぞれ出土している。  
所見 時期は、出土土器から前期後半（浮島Ⅲ式期）と考えられる。



第 27 図 第 17 号堅穴建物跡・出土遺物実測図

第17号竪穴建物跡出土遺物観察表（第27図）

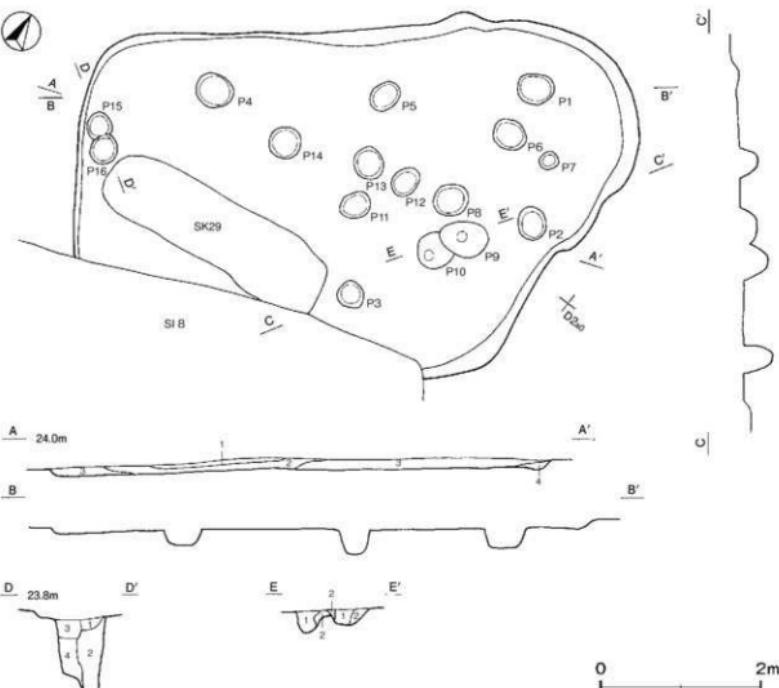
番号	種別	器種	口径	基高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
101	縄文土器	深鉢	-	(5.6)	-	長石・石英・鐵進	にぶい橙	普通	外腹單節縄文R L 内面柔痕文	東部覆土中	早期末期
102	縄文土器	深鉢	-	(4.1)	-	長石・石英・鐵進	明褐	普通	外腹單節縄文R L 内面条板文	西部覆土中	早期末期
103	縄文土器	深鉢	-	(4.0)	-	長石・石英・鐵進	にぶい褐	普通	單面縄文R L →コンバース文	西部覆土中	関山I式
104	縄文土器	深鉢	-	(5.0)	-	長石・石英・鐵進 赤色粒子・鐵進	にぶい橙	普通	單面縄文L R →半蔵竹管による沈縄文	西部覆土中	関山II式
105	縄文土器	深鉢	-	(2.9)	-	青石・石英・鐵進 赤色粒子	にぶい青褐	普通	外腹只股復線文 内面磨き	西部覆土中	浮島III式

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 27	円形接着器	27	2.5	0.7	565	チャート	側縁部使用痕	西部覆土中	PL 18
Q 28	搔器	37	3.4	1.8	240	泥岩	先端部押付適應刃部調整	覆土中	PL 18

第18号竪穴建物跡（第28・29図 PL 7）

位置 調査A区南部のD 2a8区、標高23mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第8号竪穴建物、第29号土坑に掘り込まれている。



第28図 第18号竪穴建物跡実測図

**規模と形状** ほかの遺構に掘り込まれているため、北東・南北軸は7.10mで、北西・南北軸は4.20mしか確認できなかった。残存部分の形状から不整長方形と推測できる。北東・南北軸方向はN-52°-Eである。壁は高さ5~8cmで、緩やかに立ち上っている。

**床** 平坦で、特に顕著な踏み固めは確認できなかった。

**ピット** 16か所。ほかの遺構に掘り込まれているため、不明な点もあるが、P1~P5は深さ23~36cmで、配置状況から主柱穴と推測できる。そのほかのピットは深さ21~88cmで、配置状況や深さがまばらで性格は不明である。

#### ピット土層解説 (P9・P10)

- |                             |                 |
|-----------------------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量 | 2 黄褐色 ロームブロック多量 |
|-----------------------------|-----------------|

#### ピット土層解説 (P15・P16)

- |                             |                             |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 單褐色 ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量 | 2 黄褐色 ロームブロック多量 (粘性弱・締まり普通) |
| 3 黄褐色 ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量 | 4 黄褐色 ロームブロック多量 (粘性・締まり強)   |

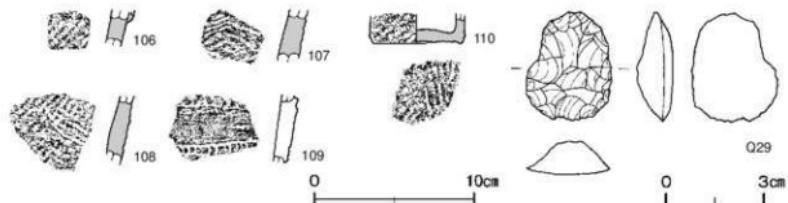
**覆土** 4層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれていることから、埋め戻されている。

#### 土層解説

- |                             |                             |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 單褐色 ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量 | 3 明褐色 ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黄褐色 ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量 | 4 明褐色 ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量 |

**遺物出土状況** 繩文土器片20点(深鉢)、石器1点(搔器)、剥片9点(砂岩4、頁岩3、安山岩1、石英岩1)が、覆土中から散在した状態で出土している。

**所見** 時期は、前期後半(浮島式期)の土器の混入がみられるが遺構の新旧関係や、出土土器の状況から前期前半(開山I式期)と考えられる。



第29図 第18号堅穴建物跡出土遺物実測図

第18号堅穴建物跡出土遺物観察表 (第29図)

番号	種別	器種	口径	基高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	ほか	出土位置	備考
106	縄文土器	深鉢	-	(22)	-	長石・石英・繊維	にぶい橙	普通	单脚縦文LR+瘤状貼付文		覆土中	開山I式
107	縄文土器	深鉢	-	(3.2)	-	長石・石英・灰母・繊維	にぶい橙	普通	0段多条縦文による羽状構成		覆土中	前期前半
108	縄文土器	深鉢	-	(4.1)	-	長石・石英・繊維	にぶい橙	普通	单脚羽状縦文		覆土中	前期前半
109	縄文土器	深鉢	-	(4.2)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	半載竹管による爪形文		覆土中	浮島式
110	縄文土器	深鉢	-	(19)	[5.4]	長石・石英・繊維	明褐	普通	下端・底部外面縦文RL 内面ナデ		覆土中	5% 開山I式

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 29	器種	34	26	11	10.1	チャート	側縁部刃部調整	覆土中	P L 18

表2 繩文時代竪穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形 長軸×短軸(m)	底高 (cm)	床面 埋溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考	
						柱穴	造入口	廻廊	庇	庇					
1	D 2e0	N - 22° - W	長方形	6.00 × 5.30	10 ~ 23	平坦	-	-	-	-	9	2	人為 縄文土器、石器	関山1式	本跡→SK13-14 →SI 3
2	D 2e9	-	円形	5.40 × 5.22	6 ~ 28	平坦	-	5	-	-	1	1	人為 縄文土器、石器、粘土塊	関山1式	SI 8, SK19 → 本跡
4	C 2d7	N - 45° - W	[楕円形]	8.72 × (6.68)	18 ~ 22	平坦	-	-	-	-	38	-	人為 縄文土器、石器、洞片、火熱土	関山1式	本跡→SI 5 - 7 · 11-13 · 16
5	C 2d8	N - 8° - W	[方角/長方形]	5.25 × (3.70)	15 ~ 20	平坦	-	1	-	-	3	-	自然 縄文土器、石器、洞片	黒浜式	-
7	C 2d6	N - 51° - W	長方形	5.38 × 4.16	18 ~ 22	平坦	-	6	1	2	-	1	人為 縄文土器、石器、洞片	関山1式	SI 4 → 本跡
8	D 2b9	N - 15° - W	[長方形]	(7.10) × 6.60	8 ~ 10	平坦	-	4	-	-	14	2	人為 縄文土器、洞片	関山1式	SI 18, SK29 → 本跡→SI 2, 7TP2, SK5 · 19
9	C 2b6	N - 60° - E	[長方形]	4.04 × (3.22)	3 ~ 12	平坦	-	1	-	4	-	-	人為 縄文土器、石器、自然土	関山1式	本跡→TM 1
10	C 2a8	N - 12° - W	[方角/長方形]	6.70 × (2.40)	7 ~ 11	平坦	-	2	1	-	4	-	人為 縄文土器、石器、洞片	関山1式	-
12	C 2d7	N - 90° - W	[台形]	3.10 × (1.10)	17 ~ 38	平坦	-	-	-	-	3	-	人為 縄文土器、石器、洞片	関山1式	SI 16 → 本跡 → SI 11
14	C 2a7	N - 0°	[楕円形]	4.10 × (3.06)	10 ~ 26	平坦	-	-	-	-	7	-	人為 -	縄文	-
15	C 2b5	N - 55° - E	[楕円形]	3.68 × (2.40)	6 ~ 18	平坦	-	3	-	-	1	1	人為 洞片	縄文	本跡→TM 1
16	C 2f8	N - 23° - E	[楕円形]	8.20 × (6.08)	22 ~ 30	平坦	-	-	-	10	22	1	人為 縄文土器、石器、洞片	関山1式	本跡→SI 4 · 5 · 11 · 12 · TP 4, SK 9
17	C 2i8	N - 43° - W	[楕円形]	4.16 × (2.40)	8 ~ 20	平坦	-	-	-	7	-	1	自然 縄文土器、石器、洞片	浮島皿式	本跡→SI 6, TM 1
18	D 2a8	N - 52° - E	[楕円形]	7.10 × (4.20)	5 ~ 8	平坦	-	5	-	-	11	-	人為 縄文土器、石器、洞片	関山1式	本跡→SI 8, SK 29

## (2) 陥し穴

陥し穴4基は、調査A区の中央部から南部にかけて点在している。

## 第1号陥し穴 (第30・31図 PL12)

位置 調査 A 区南部の D 3 h2 区。標高 22 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径 3.25 m、短径 2.00 m の楕円形で、長径方向は N - 48° - W である。深さは 90 cm で、底面は長径 1.80 m、短径 0.30 m と幅狭で、平坦である。壁は外傾している。

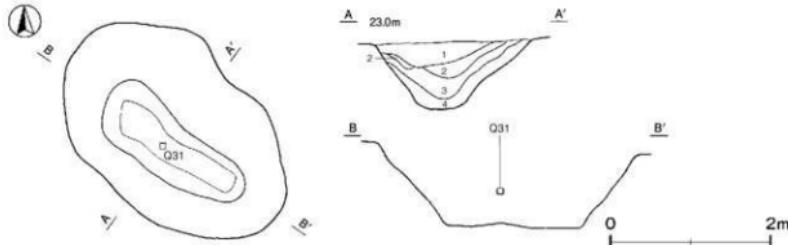
覆土 4 層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれていることから、埋め戻されている。

## 土層解説

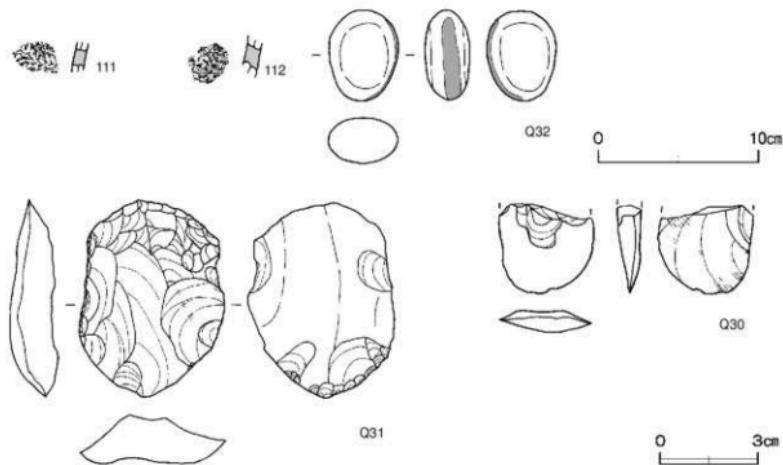
- |       |                       |       |                       |
|-------|-----------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量 | 3 黑褐色 | ロームブロック多量             |
| 2 暗褐色 | ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量 | 4 明褐色 | ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 縄文土器片 14 点 (深鉢)、石器 3 点 (搔器 2、磨石 1)、洞片 5 点 (砂岩 3、安山岩 1、ホルンフェルス 1) が出土している。Q 31 は中央部の覆土第 3 層、111 · 112 · Q 30 · Q 32 は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から前期前半 (関山式期) と考えられる。



第30図 第1号陥し穴実測図



第31図 第1号陥し穴出土遺物実測図

第1号陥し穴出土遺物観察表（第31図）

番号	種別	器種	口径	基高	底径	船 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
111	縄文土器	深鉢	-	(18)	-	長石・石英・雲母・繊維	にぶい橙	普通	結束繩文第1種	覆土中	関山式
112	縄文土器	深鉢	-	(27)	-	長石・石英・繊維	にぶい橙	普通	結束繩文第1種	覆土中	関山式

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
Q 30	縫器	(27)	29	0.8	(5.65)	ホルンフェルス	側面刃部調整	覆土中	-
Q 31	縫器	60	45	15	428	チャート	側面刃部調整	中央部覆土 第3層	PL 18
Q 32	磨石	56	44	28	99.4	チャート	側縁部使用痕	覆土中	-

第2号陥し穴（第32・33図 PL12）

位置 調査A区南部のD2c8区、標高21mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第8号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径2.57m、短径2.27mの楕円形で、長径方向はN-60°-Wである。深さは288cmで、底面は長径0.91m、短径0.47mで、平坦である。壁はほぼ直立している。また、底面から高さ70cmほどの位置に緩やかな傾斜面がある。

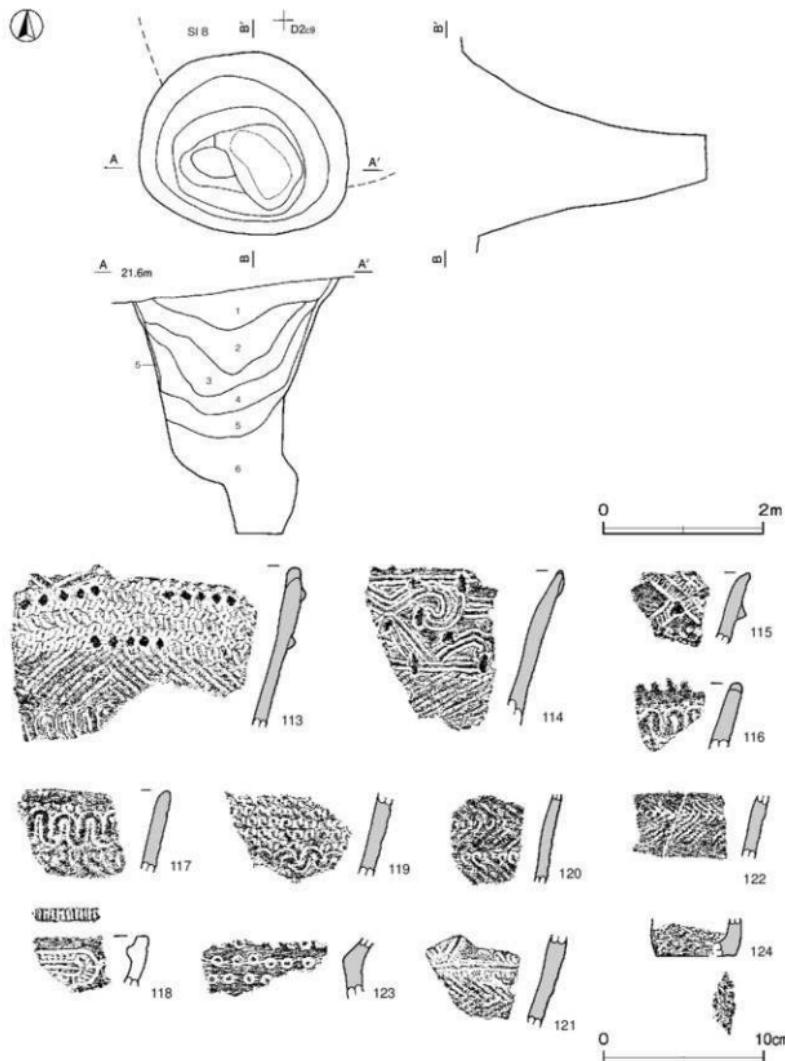
覆土 6層に分層できる。第1層は周囲からの流れ込みの状況から、自然堆積で、第2～6層はロームブロックが多く含まれていることから、埋め戻されている。

#### 土層解説

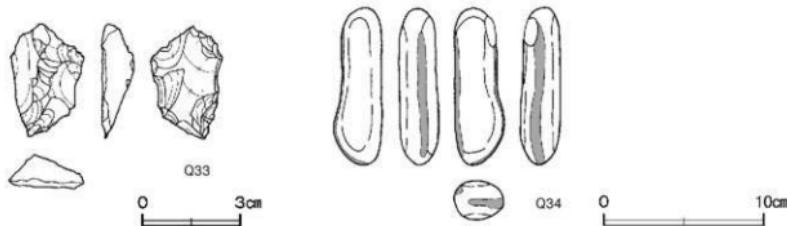
- |         |                       |         |                      |
|---------|-----------------------|---------|----------------------|
| 1 縮 極 色 | ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量   | 4 明 極 色 | ロームブロック多量、白色粘土ブロック少量 |
| 2 縮 極 色 | ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量 | 5 黄 極 色 | ロームブロック多量            |
| 3 明 極 色 | ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量 | 6 縮 極 色 | ロームブロック多量、白色粘土ブロック中量 |

**遺物出土状況** 植文土器片 253 点(深鉢), 石器 4 点(撃器 1, 磨石 3), 刺片 30 点(砂岩 15, 砂岩 10, チャート 3, 雲母片岩 1, 石英岩 1)が、覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から前期前半(関山式期)と考えられる。



第32図 第2号陥し穴・出土遺物実測図



第33図 第2号陥し穴出土遺物実測図

第2号陥し穴出土遺物観察表（第32・33図）

番号	種別	器種	口径	断面	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
113	縄文土器	深鉢	-	(9.9)	-	長石・石英・繊維	に赤い褐	普通	口縁部山形の突起 単唇状突起文→多段ループ文→コンバスト文→瘤状貼付文	覆土中	関山1式 PL 17
114	縄文土器	深鉢	-	(9.5)	-	長石・石英・繊維	に赤い褐	普通	口縁部山形の突起 半截竹管による沈模文・單唇状貼付文	覆土中	関山1式 PL 17
115	縄文土器	深鉢	-	(4.4)	-	長石・石英・繊維	明赤褐	普通	梯子状沈模文→瘤状貼付文	覆土中	関山1式
116	縄文土器	深鉢	-	(4.2)	-	長石・石英・繊維	明赤褐	普通	口縁部山形の崩れ目文 口縁部単筋縫文→コンバスト文	覆土中	関山1式 PL 17
117	縄文土器	深鉢	-	(5.0)	-	長石・石英・繊維	に赤い褐	普通	单筋縫文 L R →コンバスト文	覆土中	関山1式
118	縄文土器	深鉢	-	(3.1)	-	長石・石英	灰褐	普通	口唇部削み目 梯子状沈模文	覆土中	関山1式
119	縄文土器	深鉢	-	(5.2)	-	長石・石英・繊維	に赤い褐	普通	多段ループ文→コンバスト文	覆土中	関山1式
120	縄文土器	深鉢	-	(5.6)	-	長石・石英・赤色粒子・繊維	明赤褐	普通	結束縫文第1種	覆土中	関山1式
121	縄文土器	深鉢	-	(5.8)	-	長石・石英・繊維	褐	普通	单筋縫文→梯子状沈模文	覆土中	関山1式
122	縄文土器	深鉢	-	(3.9)	-	長石・石英・繊維	に赤い褐	普通	单筋縫文	覆土中	前期後半
123	縄文土器	深鉢	-	(3.7)	-	長石・石英・繊維	に赤い褐	普通	竹管による連續円形刻文	覆土中	花積下層
124	縄文土器	深鉢	-	(2.3)	[5.0]	長石・石英・繊維	褐	普通	側面部下端单筋縫文 内面ナデ	覆土中	5% 関山式

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 33	縄器	35	23	10	6.4	瑪瑙	側面片面	覆土中	PL 18
Q 34	磨石	97	31	29	[109.6]	泥岩	側縁部使用痕	覆土中	-

### 第3号陥し穴（第34図 PL13）

位置 調査A区南部のD 2b7区、標高21mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.62m、短径1.48mの楕円形で、長径方向はN~81°~Eである。深さは186cm、底面は径0.8mで、平坦である。壁はほぼ直立している。

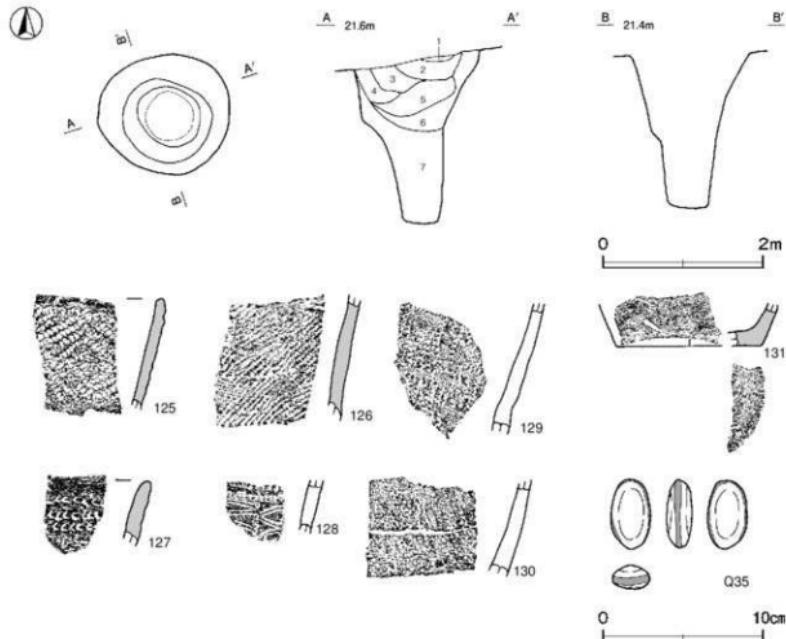
覆土 7層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれていることから、埋め戻されている。

#### 土層解説

- |   |   |   |           |   |   |   |           |             |
|---|---|---|-----------|---|---|---|-----------|-------------|
| 1 | 褐 | 色 | ロームブロック少量 | 5 | 黒 | 褐 | ロームブロック多量 | 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 | 黒 | 褐 | ロームブロック少量 | 6 | 褐 | 色 | ロームブロック多量 |             |
| 3 | 褐 | 色 | ロームブロック中量 | 7 | 明 | 褐 | ロームブロック多量 |             |
| 4 | 黒 | 褐 | ロームブロック多量 |   |   |   |           |             |

遺物出土状況 縄文土器149点（深鉢）、石器1点（磨石）、剥片53点（砂岩28、砾岩12、チャート6、雲母片岩3、石英岩2、玄武岩1、泥岩1）が、覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から前期後半（浮島式期）と考えられる。



第34図 第3号陥し穴・出土遺物実測図

第3号陥し穴出土遺物観察表（第34図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
125	陶文土器	深鉢	-	(6.8)	-	長石・石英・繊維	にぶい褐色	普通	波状羽状施文	覆土中	前期 PL. 17
126	陶文土器	深鉢	-	(7.9)	-	長石・石英・赤色粒子・繊維	にぶい褐色	普通	結束縦文第1種	覆土中	開山1式
127	陶文土器	深鉢	-	(4.1)	-	長石・石英・繊維	褐色	普通	半截竹管による連續網状文（爪形文）	覆土中	浮島I a式
128	陶文土器	深鉢	-	(3.4)	-	長石・石英	褐色	普通	单孔工具による連續網状文・竹管による連續網状文・手截竹管による波状文	覆土中	浮島I a式
129	陶文土器	深鉢	-	(8.1)	-	長石・石英	褐色	普通	具截波線による波状波紋文	覆土中	浮島III式
130	陶文土器	深鉢	-	(5.9)	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	具截波線文	覆土中	浮島式
131	陶文土器	深鉢	-	(2.6)	[9.0]	長石・石英・繊維	にぶい褐色	普通	下端・外側削り後磨き 内面ナデ	覆土中	5% 前期

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 35	磨石	42	25	15	206	チャート	側縁部使用痕	覆土中	-

第4号陥し穴（第35図 PL13）

位置 調査A区中央部のC27区、標高22mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第16号堅穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.40m、短径1.08mの楕円形で、長径方向はN-24°-Wである。深さは90cmで、底面は平坦である。壁はほぼ直立している。

**ピット** 底面のほぼ中央部に掘り込まれている。径32cmの円形で、底面からの深さは28cmである。逆茂木のピットと考えられる。

**覆土** 4層に分層できる。第2～4層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第1層は含有物が微量で、周囲からの流れ込んだ状況から自然堆積である。

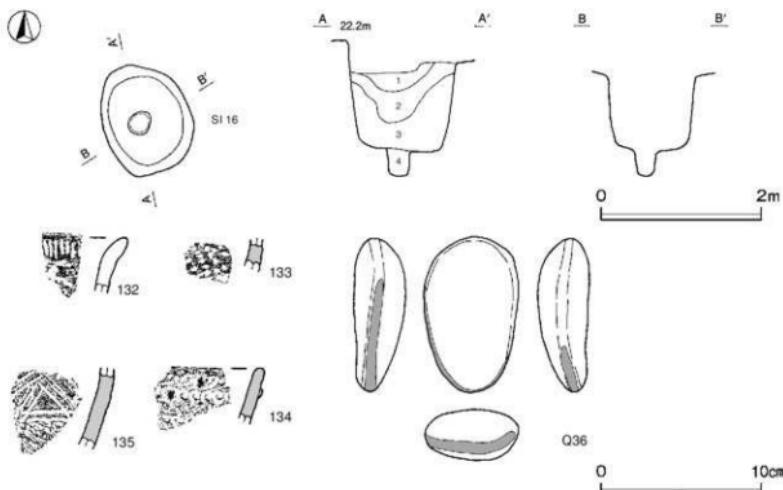
#### 土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量  
2 黒褐色 ロームブロック少量

3 黒褐色 ロームブロック多量  
4 黒褐色 ロームブロック中量

**遺物出土状況** 繩文土器片32点（深鉢）、石器1点（磨石）、剥片15点（砂岩4、安山岩4、玄武岩4、チャート3）が、覆土中から出土している。

**所見** 遺物は、前期前半（関山式期）と前期後半（浮島式期）の土器片が混在して出土している。前期前半（関山式期）の土器片は重複している第16号竪穴建物跡の出土土器と同時期であるため、当遺構への流れ込みと考えられる。このことから当遺構の時期は、前期後半（浮島式期）と考えられる。



第35図 第4号陥し穴・出土遺物実測図

第4号陥し穴出土遺物観察表（第35図）

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
132	繩文土器	深鉢	-	(34)	-	長石・石英	棕	普通	山林苔刷み目文（平軽竹管による条縞文）・三脚文	覆土中	浮島式
133	繩文土器	深鉢	-	(20)	-	長石・石英・鐵錐	棕	普通	貝殻模様文	覆土中	浮島式
134	繩文土器	深鉢	-	(35)	-	長石・石英・鐵錐	棕	普通	结束繩文第1種→瘤状胎土文	覆土中	関山1式
135	繩文土器	深鉢	-	(49)	-	長石・石英・鐵錐	棕	普通	平軽竹管による沈縞文・結束繩文第1種	覆土中	関山1式

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 36	磨石	95	59	32	243.7	輝岩	側縫部使用痕	覆土中	-

表3 繩文時代陥し穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	D 3gl2	N - 48° - W	楕円形	325 × 200	90	外傾	平坦	人為	縄文土器、石器、調片	-
2	D 2c8	N - 60° - W	楕円形	257 × 227	288	直立	平坦	自然 / 人為	縄文土器、石器、調片	SI 8 → 本跡
3	D 2b7	N - 81° - E	楕円形	162 × 148	186	直立	平坦	人為	縄文土器、石器、調片	-
4	C 2f7	N - 24° - W	楕円形	140 × 108	90	直立	平坦	自然 / 人為	縄文土器、石器、調片	SI 16 → 本跡

## (3) 炉穴

## 第1号炉穴（第36・37図 PL13）

位置 調査A区南部のD 3gl区、標高21mほどの台地緩斜面部に位置している。

規模と形状 長径269m、短径235mの楕円形で、長径方向はN - 70° - Wである。深さは24cmで、底面は平坦である。火焚部は、中央部に位置し、径60cmの円形で、深さ20cmの皿状に掘りくぼめ、第6・7層を埋め戻して炉床が構築されている。火熱を受けて赤変しているが硬化はしていない。

覆土 4層に分層できる。ロームブロック、焼土ブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第6・7層が掘方への埋土で、第5層上面が火床面である。

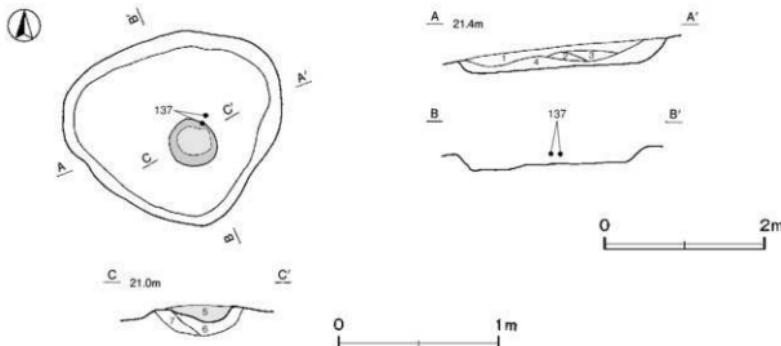
## 土層解説

1 黒褐色	ロームブロック多量、燒土粒子、炭化粒子微量	5 赤褐色	燒土ブロック多量、炭化粒子微量
2 褐色	ロームブロック多量、燒土ブロック中量	6 明褐色	ロームブロック多量、燒土粒子、炭化粒子微量
3 褐色	ロームブロック中量、燒土粒子、炭化粒子微量	7 黄褐色	ロームブロック多量
4 暗褐色	ロームブロック多量、燒土粒子、炭化粒子微量		

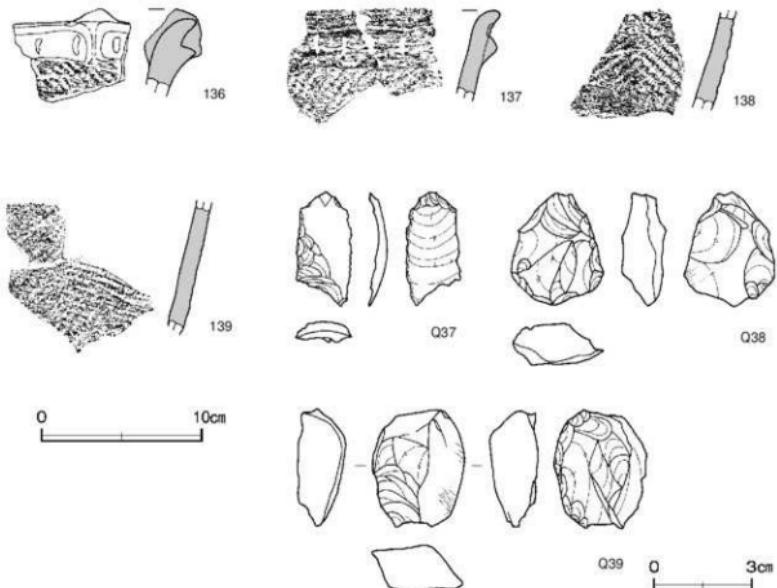
遺物出土状況 縄文土器片39点（深鉢）、石器3点（搔器）、剥片7点（チャート4、砂岩1、安山岩1、石灰岩1）

が、覆土中から出土している。137は、ほぼ中央部の覆土中層から出土している。

所見 前期前半（関山式期）の土器片が覆土上層から出土しているが、時期は土器の出土状況から前期初頭（遼下式期）と考えられる。



第36図 第1号炉穴実測図



第37図 第1号炉穴出土遺物実測図

第1号炉穴出土遺物観察表（第37図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
136	縄文土器	深鉢	-	(5.5)	-	長石・石英・織維	にぶい褐色	普通	口縁部斜面付・半截骨質文（爪彫文）胸部 單屈筋状縊文 内面磨光	覆土中	流下式 P.L. 17
137	縄文土器	深鉢	-	(5.5)	-	長石・石英・織維	にぶい赤褐色	普通	口縁部斜面付・半截骨質文（爪彫文）胸部 单屈筋状縊文 内面磨光	覆土中	流下式 P.L. 17
138	縄文土器	深鉢	-	(6.1)	-	長石・石英・織維	明褐色	普通	粘土第一種縊文・ループ文	覆土中	開山式
139	縄文土器	深鉢	-	(8.3)	-	長石・石英・織維	にぶい褐色	普通	單屈筋状縊文	覆土中	開山式

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	手法	出土位置	備考
Q 37	縁器	35	17	0.6	2.02	チャート	側面刃部調整	覆土中	-
Q 38	縁器	35	29	1.3	10.21	石英	側面刃部調整	覆土中	-
Q 39	縁器	36	28	1.6	15.08	チャート	側面刃部調整	覆土中	-

#### (4) 土坑

土坑19基は、調査A区の全域にわたり分布している。うち特徴のある5基については文章で記述し、ほかは一覧表で掲載する。

#### 第7号土坑（第38図 PL13）

位置 調査A区中央部のC 2h9区、標高23mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.88m、短径1.66mの椭円形で、長径方向はN-80°-Eである。深さは20cmで、底面は

平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

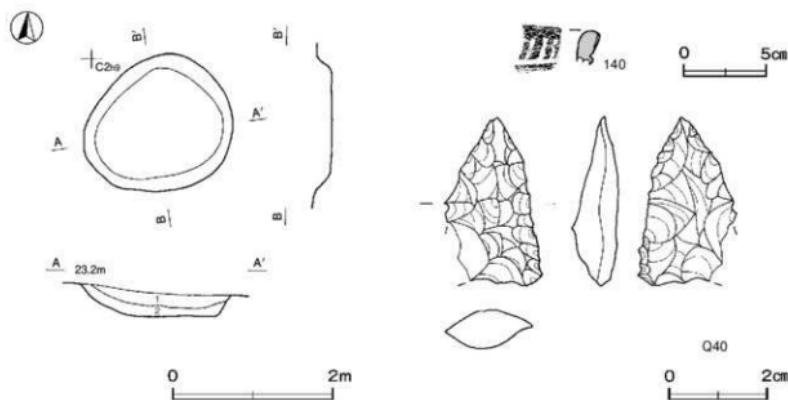
**覆土** 2層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれていることから、埋め戻されている。

**土層解説**

1 埋 地 色 ロームブロック多量。焼土粒子・炭化粒子微量 2 埋 地 色 ロームブロック多量

**遺物出土状況** 縄文土器片8点(深鉢), 石器1点(鎌), 剥片4点(チャート2, 安山岩1, デイサイト1)が出土している。Q40は北東部の底面, 140は覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から前期と考えられる。骨などの出土は見られなかったが、遺構の形状や覆土が人為堆積であることから、墓坑の可能性がある。



第38図 第7号土坑・出土遺物実測図

第7号土坑出土遺物観察表(第38図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴	は か	出土位置	備 考
140	縄文土器	深鉢	-	(2.0)	-	長石・石英・楕圓	明赤褐色	普通	平鉗竹管による連続沈継文	-	覆土中	前期

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q40	鎌	3.5	(2.0)	1.0	(5.13)	石英	平基無茎鎌 背面押圧剥離 頂部一部欠損	北東部底面	-

**第9号土坑(第39図・PL13)**

**位置** 調査A区中央部のC28区, 標高22mほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第16号竪穴建物跡を掘り込み, 北部を倒木による擾乱を受けている。

**規模と形状** 長径222m, 短径20.5mの楕円形で, 長径方向はN-72°-Eである。深さは28cmで, 底面は有段である。壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 3層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

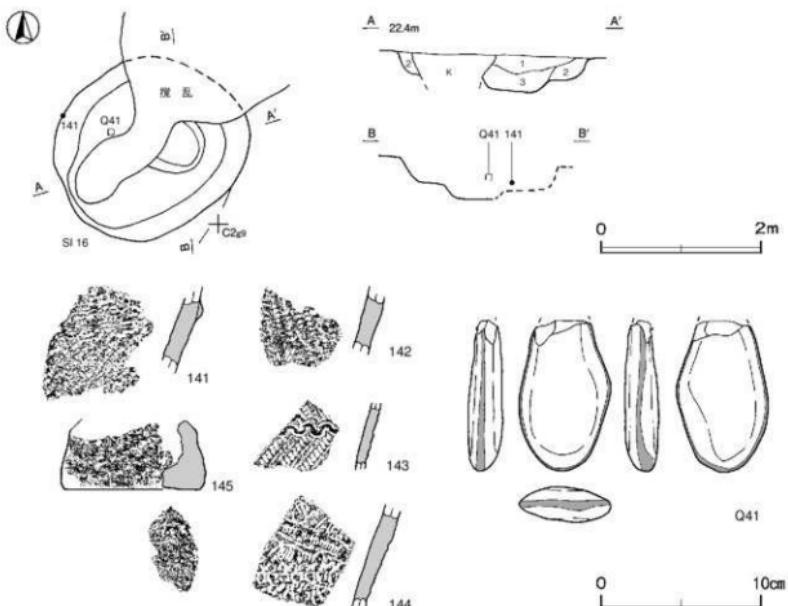
**土層解説**

1 埋 地 色 ロームブロック中量。焼土粒子・炭化粒子微量 3 埋 地 色 ロームブロック多量。焼土粒子・炭化粒子微量

2 埋 地 色 ロームブロック多量。焼土粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 繩文土器片 74 点（深鉢），石器 1 点（磨石），剥片 18 点（砂岩 7，安山岩 4，チャート 3，石英岩 2，雲母片岩 1，石英閃綠岩 1），自然縫 2 点（安山岩）が、散在して覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から前期中葉（黒浜式期）と考えられる。骨などの出土は見られなかったが、遺構の形状や覆土が人為堆積であることから、墓坑の可能性がある。



第39図 第9号土坑・出土遺物実測図

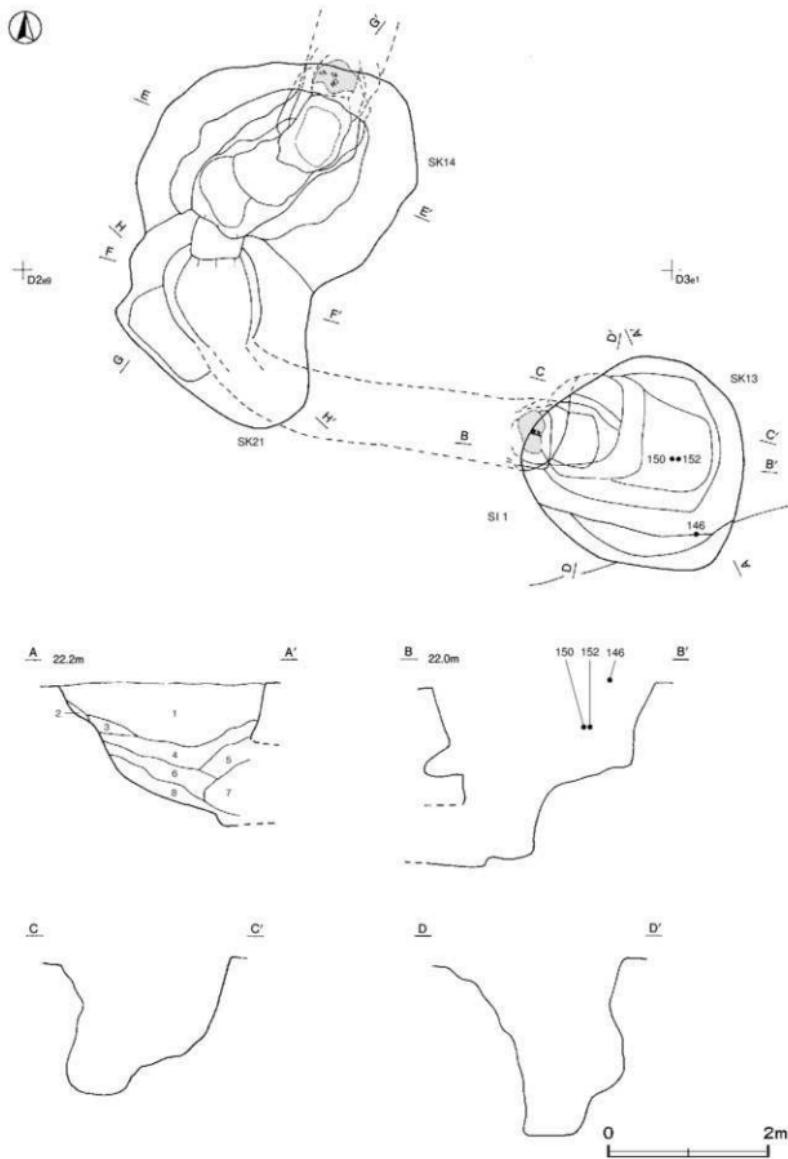
第9号土坑出土遺物観察表（第39図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
141	縄文土器	深鉢	-	(5.4)	-	長石・石英・鐵鉻	灰褐色	普通	陸帯貼付文・單縦縄文LR	西面部覆土下層	流下式
142	縄文土器	深鉢	-	(4.2)	-	長石・石英・鐵鉻	明赤褐	普通	單縦縄文RL	覆土中	流下式
143	縄文土器	深鉢	-	(4.3)	-	長石・石英・鐵鉻	灰褐	普通	附加条1種縄文→コシバズ文	覆土中	黒浜式 PL. 17
144	縄文土器	深鉢	-	(6.5)	-	長石・石英・鐵鉻	棕	普通	平軽竹管による沈痕文の中に刷毛目を光模・多段ループ文→盤状貼付文	覆土中	黒浜式
145	縄文土器	深鉢	-	(4.3)	[8.4]	長石・石英・鐵鉻	明褐	普通	白苔跡脚部・底部外面單縦縄文・下端部ナデ	覆土中	5%

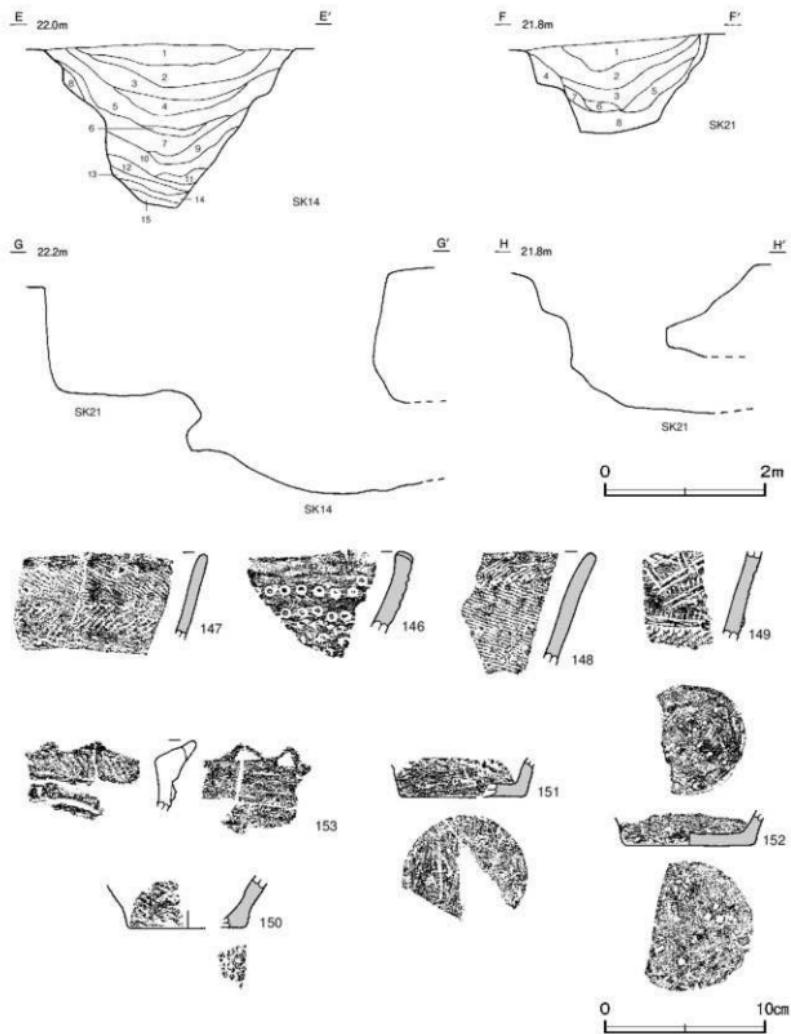
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 41	磨石	(9.3)	57	2.1	(155.9)	砂岩	側縁部使用痕	北西部覆土下層	-

第13号土坑（第40・41図 PL14）

**位置** 調査 A 区南部の D 2 e0 区、標高 22 m ほどの台地平坦部に位置している。



第40図 第13・14・21号土坑実測図



第41図 第13・14・21号土坑・第13号土坑出土遺物実測図

**重複関係** 第1号堅穴建物跡を掘り込み、第21号土坑と連結していると推測できる。

**規模と形状** 長径 2.74m、短径 2.62m の楕円形で、長径方向は N-83°-W である。深さは 120~210cm で、東壁側には底面から高さ 1.0m ほどの中位に段を有し、出入りする施設と考えられる。底面は平坦である。西

部にはトンネル状の入り口がある。その入り口付近の底面からは、長径48cm、短径28cmの楕円形の範囲で焼土と炭化材が出土している。焚火のような痕跡である。壁は外傾している。崩落の恐れがあることから、完掘はできなかつたが、西部はさらに第21号土坑の方向にトンネル状に延びており、第21号土坑と連結していると推測できる。

**覆土** 8層に分層できる。第2~8層は、ロームブロックが多く含まれていることから、埋め戻されている。

第1層は黒色を基調とし、含有物が微量であることから自然堆積である。

#### 土層解説

1 黒 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	5 黄 棕 色	ロームブロック多量
2 暗 棕 色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 黑 棕 色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 黑 棕 色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 明 棕 褐 色	ロームブロック多量
4 明 棕 褐 色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量	8 暗 棕 褐 色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 繩文土器片117点(深鉢)、剥片45点(砂岩17、チャート9、安山岩7、石英岩6、玄武岩3、雲母片岩1、デイサイト1、ラピリストーン1)が覆土中から、炭化材2点が底面からそれぞれ出土している。153は西部の覆土第6層、146は南東部、150・152は東部の覆土第1層からそれぞれ出土している。そのほかの土器片、剥片は覆土第1層から出土している。

**所見** 遺物は、前期初頭(花積下層式)、前期前半(関山式)の土器片が覆土第1層、中期初頭(五領ヶ台式)の土器片が覆土第6層からそれぞれ出土している。時期は土器の出土状況から中期初頭(五領ヶ台式期)と考えられる。底面から出土している炭化材についてC14年代測定を行ったところ、中期頃との結果がでている。詳細は付章を参照されたい。

第13号土坑出土遺物観察表(第41図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
146	縄文土器	深鉢	-	(5.0)	-	長石・石英・繊維	棕	打質による影刻突出 棒状工具による連続網状文	花積下層式 東部覆土第1層 P.L.17		
147	縄文土器	深鉢	-	(5.5)	-	長石・石英・繊維	にぶい棕	普通 打質網目彫文第1種	覆土第1層 黒浜式		
148	縄文土器	深鉢	-	(7.0)	-	長石・石英・繊維 赤色粒子・繊維	にぶい棕	普通 羽状網文 暗系	覆土第1層 P.L.17		
149	縄文土器	深鉢	-	(5.5)	-	長石・石英・繊維	にぶい棕	普通 文1.R	覆土第1層 関山式		
150	縄文土器	深鉢	-	(3.2)	[7.4]	長石・石英・ 粘土・繊維	にぶい棕	普通 外面單節繩文LR 内面外單節繩文 内 面竹管による沈綱文	東部覆土第1層 5% 関山式		
151	縄文土器	深鉢	-	(2.4)	[7.6]	長石・石英・繊維	棕	普通 外・内面ナデ	覆土第1層 5% 前期		
152	縄文土器	深鉢	-	(2.2)	8.0	長石・石英・繊維	にぶい棕	普通 下端・底部外側ナデ 内面棒状工具による十字 状の連続網文	東部覆土第1層 P.L.17	10% 前期	
153	縄文土器	深鉢	-	(4.3)	-	長石・石英	にぶい串褐	普通 口縁部外側圓形の突起 内面三角印彫文 繩文文様 竹管による沈綱文	西面覆土第6層 5% 関山式 P.L.17		

第14号土坑(第40~42図 PL14)

**位置** 調査A区南部のD2d9区、標高21mほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第1号竪穴建物跡を掘り込み、第21号土坑と連結している。

**規模と形状** 長径3.40m、短径3.20mの楕円形で、長径方向はN-68°-Eである。深さは250~268cmで、底面は平坦である。南部はスロープ状に上がり第21号土坑へ連結している。北部のトンネル状の入り口付近の底面からは、長径52cm、短径38cmの楕円形の範囲で焼土と炭化材が出土している。第13号土坑同様、焚火のような痕跡である。壁は外傾している。トンネル部分は崩落の恐れがあることから完掘できなかつたが、第2号竪穴建物跡の方向に横穴状に延びている。当遺構の北側には、連結しそうな土坑は調査区域内では確認できなかつた。トンネル状の横穴は、調査区域外の北東方向へ延びていくものと考えられる。

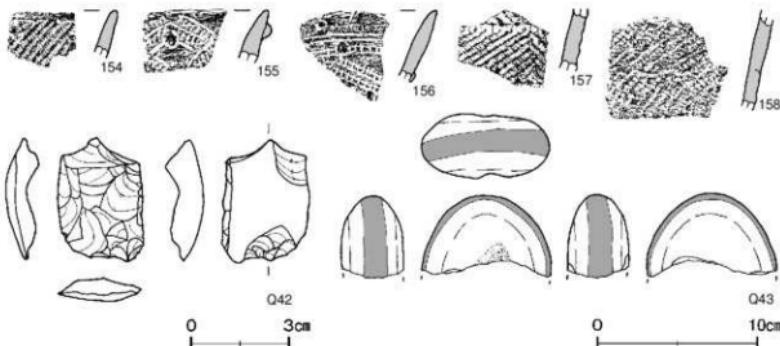
**覆土** 15層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

### 土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量	9 黄褐色	ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量
2 明褐色	ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量	10 黑褐色	ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量
3 褐色	ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量	11 にぶい褐色	ロームブロック多量
4 明褐色	ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量	12 明褐色	ロームブロック中量
5 褐色	ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量	13 灰白色	灰白色燒土ブロック多量、ロームブロック中量
6 にぶい褐色	ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量	14 明褐色	ロームブロック多量
7 褐色	ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量	15 にぶい褐色	ロームブロック少量
8 黄褐色	ロームブロック多量		

**遺物出土状況** 繩文土器片 46 点（深鉢）、石器 2 点（搔器、凹石）、網片 32 点（砂岩 13、安山岩 9、石灰岩 3、チャート 2、デイサイト 2、雲母片岩 1、黒色片岩 1、玄武岩 1）が覆土中から、炭化材 3 点が底面からそれぞれ出土している。

**所見** 遺物は、前期前半（関山式）の土器片が覆土中から出土しているが、当遺構が掘り込んでいる第 1 号堅穴建物跡（関山 I 式期）からの混入遺物と考えられる。当遺構は、第 13 号土坑とトンネル状の横穴で連結していることから関連する遺構で、時期は中期初頭（五領ヶ台式期）と考えられる。底面から出土している炭化材について C 14 年代測定を行ったところ、中期頃との結果がでている。詳細は付章を参照されたい。



第 42 図 第 14 号土坑出土遺物実測図

第 14 号土坑出土遺物観察表（第 42 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
154	繩文土器	深鉢	-	(3.0)	-	長石・石英・繊維 外層 内・芯部	普通	補修孔あり	単縦繩文 LR	覆土中	前期
155	繩文土器	深鉢	-	(3.3)	-	長石・石英・繊維	中期	普通	梯子状沈繩文→瘤状貼付文	覆土中	関山 I 式
156	繩文土器	深鉢	-	(4.4)	-	長石・石英・繊維	にぶい橙	普通	梯子状沈繩文→瘤状貼付文	覆土中	関山 I 式
157	繩文土器	深鉢	-	(3.9)	-	長石・石英・繊維	にぶい褐	普通	单縦羽状繩文→ループ文	覆土中	関山式
158	繩文土器	深鉢	-	(6.2)	-	長石・石英・ 雲母・繊維	にぶい褐	普通	結節繩文	覆土中	関山式

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 42	搔器	38	27	12	9.48	チャート	側縁部刃部調整	覆土中	-
Q 43	凹石	(5.1)	8.0	39	(182.3)	砂岩	側面兼用 摭縫部使用痕	覆土中	-

### 第21号土坑（第40・41・43図 PL14・15）

**位置** 調査A区南部のD2e9区、標高21mほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第14号土坑及び第13号土坑と連結していると推測できる。

**規模と形状** 長径2.88m、短径2.10mの梢円形で、長径方向はN-44°-Wである。深さは42~174cmで、底面は平坦である。南部には階段状の段を有する。西部と東部の壁は外傾して立ち上がっている。北部は第14号土坑と連結し、東部はトンネル状に横穴が延びている。崩落の恐れがあることから完掘できなかつたが、南東部は第13号土坑の方向にトンネル状に延びており、第13号土坑のトンネル状の横穴と方向が合致することから、連結していると推測できる。

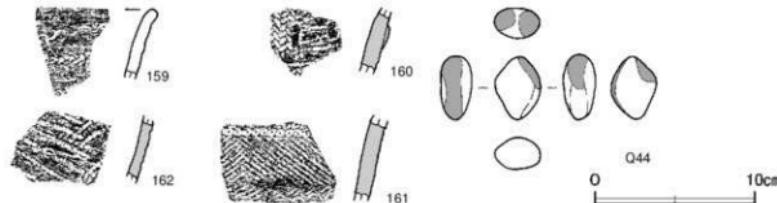
**覆土** 8層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれていることから、埋め戻されている。

#### 土層解説

1	暗褐色	ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量	6	灰白色	灰白色粘土ブロック・ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量
2	黒褐色	ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量	7	褐色	ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量
3	黒色	ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量	8	黒褐色	ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量
4	褐色	ロームブロック多量			
5	黒色	ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量			

**遺物出土状況** 縄文土器片14点（深鉢）、石器1点（磨石）、剝片2点（砂岩・安山岩）が、覆土中から出土している。

**所見** 遺物は、前期（関山式・栗島台式・黒浜式）の土器片が覆土中から出土しているが、混入遺物と考えられる。当遺構は第13号土坑と関連する遺構と考えられることから、時期は中期初頭（五領ヶ台式期）と考えられる。性格については、第4節まとめで検証する。



第43図 第21号土坑出土遺物実測図

第21号土坑出土遺物観察表（第43図）

番号	種別	器種	口径	深度	底質	胎土	色調	施成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
159	縄文土器	深鉢	-	(4.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	結晶縄文	覆土中	栗島台式
160	縄文土器	深鉢	-	(4.1)	-	長石・石英・赤色粒子・鐵錆	にぶい褐色	普通	熱系文→平組縦文→斜交文→底状貼付文	覆土中	関山1式
161	縄文土器	深鉢	-	(5.2)	-	長石・石英・赤色粒子・鐵錆	褐色	普通	单面羽状縄文+コンバス文・多段ループ文	覆土中	関山1式
162	縄文土器	深鉢	-	(4.3)	-	長石・石英・鐵錆	にぶい褐色	普通	熱系文羽状施成	覆土中	黒浜式

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 44	磨石	40	29	20	26.6	チャート	側縁部3か所使用痕	覆土中	-

表4 繩文時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 規		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
5	D 2b9	-	円形	115 × 105	36	外傾／有段	平坦	人為	縄文土器、石器、調片	SI 8 → 本跡
7	C 21b	N - 80° - E	椭円形	188 × 166	20	外傾	平坦	人為	縄文土器、石器、調片	-
8	C 2a9	N - 30° - W	椭円形	296 × 208	18	外傾	平坦	人為	縄文土器、調片	本跡 → SD 5
9	C 21b	N - 72° - E	椭円形	222 × 205	28	外傾	有段	人為	縄文土器、石器、調片、自然縫	SI 16 → 本跡
13	D 2e9	N - 83° - W	椭円形	274 × 262	120 ~ 210	外傾	白灰／人為	縄文土器、石器、調片	SI 1 → 本跡 - SK 21	
14	D 2d9	N - 68° - E	椭円形	340 × 320	250 ~ 268	外傾	平坦	人為	縄文土器、石器、調片	SI 1 → 本跡 - SK 21
15	C 2e6	-	円形	223 × 223	18	垂直	平坦	人為	縄文土器、調片	SI 7 → 本跡
19	D 2e9	N - 51° - E	長方形	304 × 160	32	外傾	平坦	人為	縄文土器	本跡 → SI 2
20	C 2a7	N - 71° - W	椭円形	158 × 101	18	外傾	平坦	人為	縄文土器	-
21	D 2e9	N - 44° - W	椭円形	288 × 210	42 ~ 174	外傾	平坦	人為	縄文土器、石器、調片	本跡 - SK 13 - 14
22	C 2b7	N - 65° - W	椭円形	193 × 167	16	外傾	平坦	人為	-	-
23	B 2i7	N - 25° - E	椭円形	138 × 118	10 ~ 18	外傾	平坦	自然	-	-
24	B 2b7	N - 16° - W	【椭円形】	(154 × 106)	82	外傾	平坦	自然	縄文土器、調片	本跡 → SK 28
25	B 2i6	N - 37° - W	椭円形	116 × 092	23	直立	平坦	自然	縄文土器	-
26	B 2e6	N - 15° - W	椭円形	098 × 082	68	直立	平坦	人為	-	-
27	C 2i7	N - 34° - W	椭円形	180 × 158	28	外傾	平坦	自然	-	本跡 → TM 1
28	B 2b7	N - 17° - W	【椭円形】	(292 × 190)	28	外傾	平坦	自然	縄文土器	SK 24 → 本跡
29	D 2a8	N - 81° - E	隅丸長方形	300 × 082	62	直立	平坦	人為	縄文土器、調片	SI 8 - 18 → 本跡
30	C 2f6	N - 82° - W	椭円形	150 × 129	50	外傾	風状	人為	-	本跡 → SD 4

## 2 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、調査区域内のほぼ中央部に集中して分布している。堅穴建物跡2棟、方形周溝墓1基、溝跡2条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

## (1) 堅穴建物跡

## 第6号堅穴建物跡（第44～46図 PL 7・8）

位置 調査A区中央部のC 2j8区、標高23mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第17号堅穴建物跡、第1号方形周溝墓を掘り込み、第1号溝に掘り込まれている。

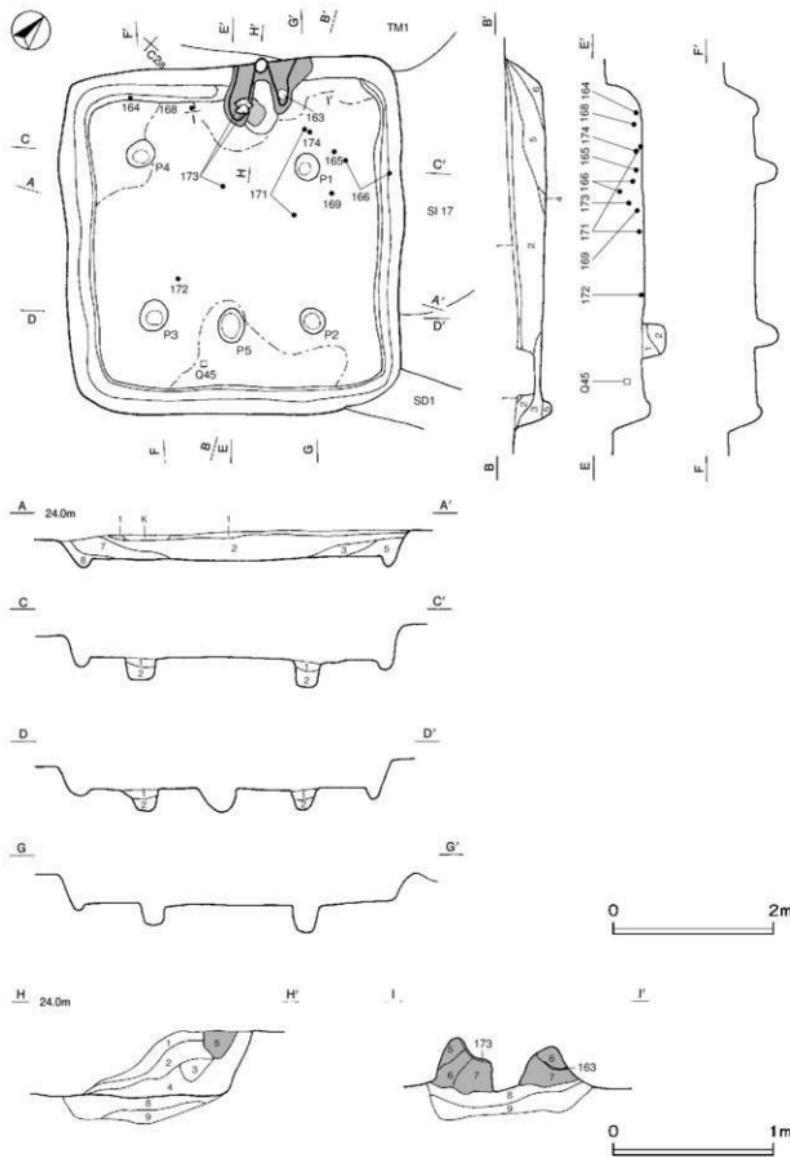
規模と形状 長軸430m、短軸424mの方形で、主軸方向はN - 43° - Wである。壁は高さ22～38cmで、外傾している。

床 平坦である。竈の手前と、西コーナー部、南東部を除き踏み固められている。壁下には、壁溝が巡っている。

竈 北西壁中央部に付設されている。規模は焚口から煙道部まで92cmで、燃焼部幅は24cmである。燃焼部は、床面を18cm掘りくぼめた部分に、ロームブロックや焼土ブロックを含んだ第8・9層を埋土している。煙道部は壁外に10cmほど掘り込まれ、火床部から外傾している。袖部は、地山の上に5～7層を積み上げて構築されている。天井部はわずかに残存している。火床面は第8層の上面で火熱を受け赤変硬化している。

## 竈土層解説

1	暗褐色	ローム粒子多量、焼土粒子微量	燒土粒子少量、炭化粒子微量
2	暗褐色	焼土粒子微量	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量
3	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	ローム粒子多量、焼土ブロック中量
4	明褐色	焼土粒子微量	ロームブロック中量、焼土粒子微量
5	灰褐色	粘土ブロック・ロームブロック・砂渺多量	ロームブロック多量、焼土粒子微量



第44図 第6号豎穴建物跡実測図

**ピット** 5か所。P 1～P 4は深さ25～35cmで、配置状況から主柱穴と考えられる。P 5は深さ29cmで、配置状況から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

**ピット土層解説 (P 1～P 4)**

- |   |   |   |         |
|---|---|---|---------|
| 1 | 褐 | 色 | ローム粒子中量 |
| 2 | 褐 | 色 | ローム粒子多量 |

**ピット土層解説 (P 5)**

- |   |   |   |           |         |
|---|---|---|-----------|---------|
| 1 | 暗 | 褐 | 色         | ローム粒子微量 |
| 2 | 褐 | 色 | ロームブロック少量 |         |

**覆土** 8層に分層できる。第1・2層は黒色土を基調とし、周囲からの流れ込みの状況や含有物が少ないことから自然堆積である。第8層はロームブロックが多く含まれていることから、埋め戻されている。

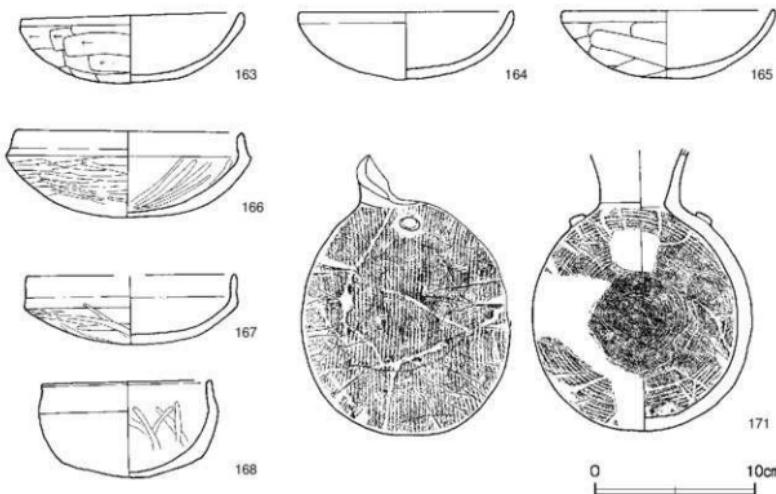
**土層解説**

- |   |   |   |           |              |
|---|---|---|-----------|--------------|
| 1 | 黒 | 褐 | 色         | ローム粒子微量      |
| 2 | 黒 | 褐 | 色         | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 | 褐 | 色 | ロームブロック中量 |              |
| 4 | 褐 | 色 | ローム粒子中量   |              |

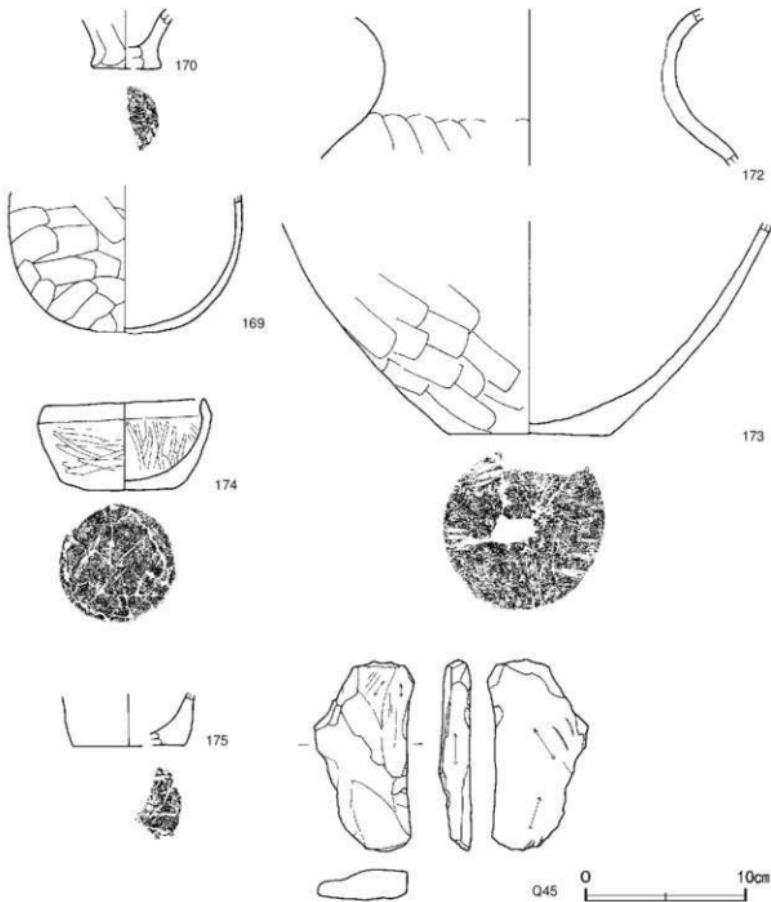
- |   |   |   |           |           |
|---|---|---|-----------|-----------|
| 5 | 暗 | 褐 | 色         | ロームブロック中量 |
| 6 | 褐 | 色 | ロームブロック多量 |           |
| 7 | 明 | 褐 | 色         | ロームブロック多量 |
| 8 | 黄 | 褐 | 色         | ロームブロック多量 |

**遺物出土状況** 土器片97点(环27、鉢1、壺1、提瓶2、甕64、手程土器2)、須恵器片1点(甕)、土製品1点(支脚)、石器1点(砥石)が、覆土中層から床面にかけて散在して出土している。164は西コーナー部から正位の状態で床面に置かれたような状態で出土している。163・173は竈袖部の補強材として、165・169・174は北部の、168は竈の西部付近から正位の状態で、172は南部の覆土下層からそれぞれ出土している。また、166は北部の覆土下層と北東壁際の覆土中層から出土したもの、171は北部と北東部寄りの覆土下層から出土したものがそれぞれ接合できたものである。さらにQ 45は、南東壁際の覆土中層から出土している。覆土中層から下層にかけてのものは、廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は出土土器から6世紀前葉と考えられる。



第45図 第6号堅穴建物跡出土遺物実測図(1)



第46図 第6号堅穴建物跡出土遺物実測図(2)

第6号堅穴建物跡出土遺物観察表(第45・46図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
163	土師器	环	13.6	4.4	-	灰石・石英・赤色粒子	に赤い褐色	普通	外側へラ削り 内面横位のヘラナデ	甌部	90% P L 19
164	土師器	环	13.1	4.2	-	灰石・石英・赤色粒子	に赤い褐色	普通	外側へラ削り後ナデ 内面横位のヘラナデ	床面	95% P L 19
165	土師器	环	13.0	4.3	-	灰石・石英・赤色粒子	橙	普通	外側へラ削り 内面横位のナデ	甌下部	70% P L 19
166	土師器	环	13.8	5.3	-	灰石・石英・赤色粒子	に赤い褐色	普通	口縁部外・内面横位のナデ 体部外側へラ削り 後磨き 内側へラ削り	甌土下部/甌土下部	70% P L 19
167	土師器	环	[12.8]	4.3	-	灰石・石英・赤色粒子	に赤い褐色	普通	外側へラ削り後磨き 内面横位のヘラナデ	甌土下部	60% P L 19

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
168	土師器	壺	103	59	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横位のヘラナデ 体部外面ヘラ削り残墨き 内面ヘラナデ	覆土下層	80% P L 19
169	土師器	鉢	-	(89)	-	長石・石英	にぶい褐	普通	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土下層	40% P L 19
170	土師器	壺	-	(37)	[42]	長石・石英	にぶい橙	普通	外面横位のヘラナデ 体部横位のヘラナデ	覆土下層	10%
171	土師器	提瓶	-	(17.4)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	頭部外・背面ナデ 肩部カラン状の把手 体部外側削り残墨き 日照調査 内面ナデ	覆土下層	60% P L 20
172	土師器	甕	-	(96)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤	普通	頭部外・内面ヘラナデ 体部外面斜位のヘラ削り残墨き 内面ヘラナデ	覆土下層	10% P L 19
173	土師器	甕	-	(132)	98	長石・石英・玄母	にぶい赤褐	普通	頭部外斜位のヘラ削り 内面ヘラナデ 底部外側削り残墨き	鐵輪部	30% P L 19
174	土師器	手捏土器	99	57	68	長石・石英・赤色粒子	褐色	普通	口縁部外・内面ヘラナデ 体部外面斜位のヘラ削り残墨き 内面ヘラナデ	覆土下層	90% P L 19
175	土師器	手捏土器	-	(32)	[70]	長石・石英・玄母	にぶい褐	普通	口縁部外・内面ヘラナデ 体部下面斜位のヘラ削り残墨き 内面ヘラナデ 底部外面本筋痕 ナデ	覆土下層	15%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 45	砾石	11.8	6.2	2.0	153.3	砂岩	風面3面	覆土中層	-

### 第13号竪穴建物跡（第47・48図 PL 9）

位置 調査A区中央部のC2c6区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第4号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北西コーナー部と竪の一部が調査区域外へ延びているが、一辺5.02mの方形で、主軸方向はN-24°-Wであることが確認できた。壁は高さ40~60cmで、ほぼ直立している。

床 平坦である。南東端部と、東部の一部を除き踏み固められている。壁下には、北コーナー部を除いて壁溝が巡っている。

竪 北西壁の中央部に付設されている。規模は焚口から煙道部まで128cmで、燃焼部幅は48cmである。燃焼部袖部は、床面を12cmほど掘りくぼめた部分に、ロームブロックを含んだ第11・12層が埋め戻して構築されている。袖部は、土山の上に6~10層を積み上げて構築されている。煙道部は壁外に40cmほど掘り込まれ火床部からやや外傾している。火床部は火熱を受けて赤変しているが硬化はしていない。

#### 竪土層解説

1	褐	灰	色	ローム粒子微量	7	赤	褐	色	焼土ブロック多量、ロームブロック少量
2	灰	褐	色	燒土ブロック少量	8	灰	白	色	灰白色粘土ブロック・ロームブロック多量
3	褐	褐	色	燒土粒子微量	9	褐	色	ロームブロック多量、灰白色粘土ブロック少量	
4	灰	褐	色	燒土粒子少量	10	明	褐	色	ロームブロック多量
5	灰	褐	色	ロームブロック・燒土ブロック微量	11	赤	褐	色	燒土ブロック多量、灰化粒子微量
6	灰	褐	色	ロームブロック多量、黃褐色山砂中量	12	明	褐	色	ロームブロック多量、灰白色粘土ブロック少量

ピット 5か所。P 1~P 4は深さ34~63cmで、配置状況から主柱穴と考えられる。底面には柱のあたりが認められる。P 5は深さ29cmで、配置状況から出入り口施設に伴うピットと考えられる。底面には柱状のあたりが認められる。

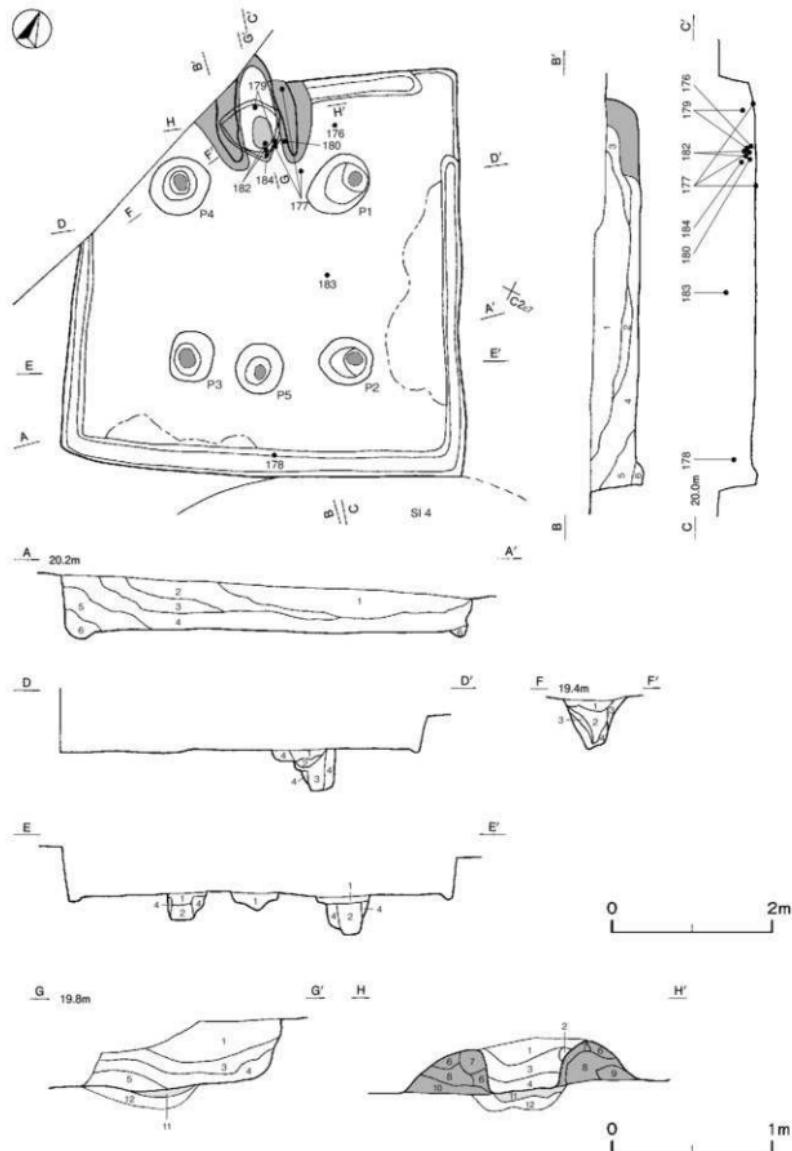
#### ピット土層解説（P 1~P 4）

1	暗	褐	色	ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量	1	暗	褐	色	ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量
2	黒	褐	色	ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量	2	暗	褐	色	ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量
3	明	褐	色	ロームブロック多量	3	明	褐	色	ロームブロック多量
4	黄	褐	色	ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量	4	暗	褐	色	ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量

覆土 6層に分層できる。第2~6層はロームブロックが多く含まれていることから埋め戻されている。第1層は、黒色を基調とし、周囲からの流れ込みの状況や含有物が少ないと自然堆積である。

#### 土層解説

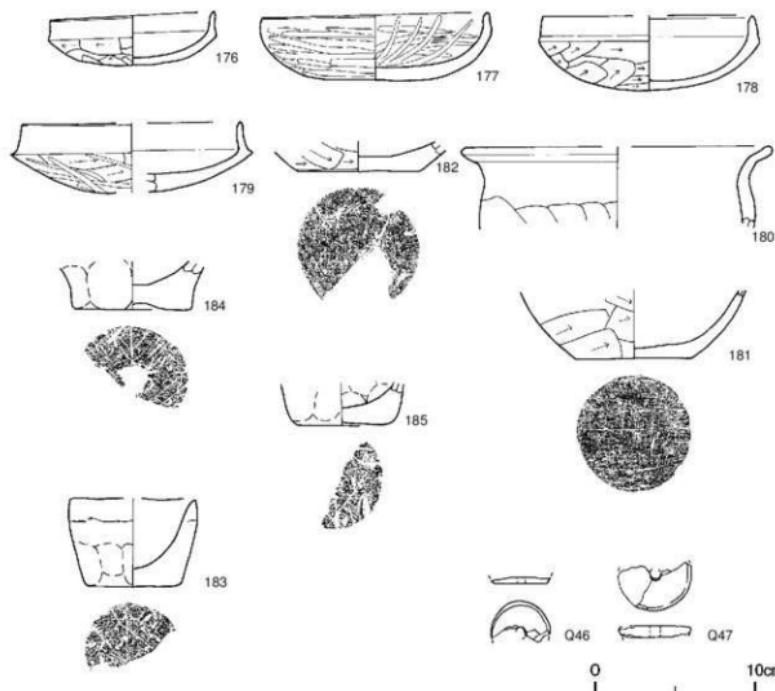
1	黑	褐	色	ローム粒子微量、燒土粒子・炭化粒子微量	4	黑	褐	色	ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量
2	暗	褐	色	ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量	5	明	褐	色	ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量
3	褐	色	ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量	6	暗	褐	色	ロームブロック多量	



第47図 第13号竪穴建物跡実測図

**遺物出土状況** 土器器片 114 点（坏 17, 壺 94, 手捏土器 3）。須恵器片 2 点（坏）。石器 2 点（紡錘車）が、覆土上層から下層にかけて散在し、窓内からは集中して破片が出土している。179・180・182・184は窓内、177は窓付近の床面と窓内から出土した破片が接合したものである。176は北部、178は南東壁際の覆土下層、183は中央部からやや東部寄りの覆土中層、Q 46・Q 47は北西部の覆土中層からそれぞれ出土している。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は出土土器から 6 世紀中葉と考えられる。



第 48 図 第 13 号堅穴建物跡出土遺物実測図

第 13 号堅穴建物跡出土遺物観察表（第 48 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
176	土器器	坏	100	33	-	長石・石英・赤色粒子	に赤い程	普通	口縁部横縫のヘラナデ 体部外側ヘラ削り 内側ヘラナデ	覆土下層	95% P L 20
177	土器器	坏	139	42	-	長石・石英・赤母	に赤い程	普通	外側ヘラ削り後ヘラ削き 内面ヘラナデ後ヘラ削り	床面/窓内	80% P L 20
178	土器器	坏	[130]	46	-	長石・石英・赤色粒子	黒褐	普通	口縁部横縫のヘラナデ 体部外側ヘラ削り 内側ヘラナデ	覆土下層	80% P L 20
179	土器器	坏	[134]	42	-	長石・石英・赤母・赤色粒子	に赤い程	普通	口縁部横縫のヘラナデ 体部外側ヘラ削り後ヘラ削き 内面ヘラナデ	窓内	45% P L 20
180	土器器	壺	[190] (50)	-	長石・石英	明赤褐	普通	体部外側ヘラ削り 内面ヘラナデ	窓内	10%	
181	土器器	壺	-	(42)	7.1	長石・石英・赤色粒子	に赤い程	普通	体部外側ヘラ削り 内面ヘラナデ 底部外側ヘラ削り	覆土下層	10%

番号	種別	器種	口径	縦高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
182	土師器	甕	-	(1.9)	7.4	長石・石英・雲母	橙	普通 体部下端へラ筋り	底部外縁へラ筋り 内面へ 内面指頭によるナデ	窓内	5%
183	土師器	手捏土器	(7.8)	5.4	[5.6]	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通 外縁指頭によるナデ	内面へラナダ後黒色処理 底部不燃質	覆土中層	P L 20
184	土師器	手捏土器	-	(3.0)	7.2	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい橙	普通 外縁指頭によるナデ	内面へラナダ後黒色処理 底部不燃質	窓内	10%
185	土師器	手捏土器	-	(2.4)	[5.0]	長石・石英・ 赤色粒子	橙	普通 外縁指頭によるナデ	内面黒色処理 底部不燃質	覆土中層	20%

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 46	粘鍊草	(3.7)	(0.6)	(0.5)	(4.05)	粘板岩	上面から下面への片面穿孔。	覆土中層	P L 20
Q 47	粘鍊草	(4.5)	(0.6)	(0.7)	(9.29)	粘板岩	上面から下面への片面穿孔。	覆土中層	-

表5 古墳時代堅穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	幾何			内部施設	覆土	主な出土遺物	時期	備考	
				縦幅	横幅	床面						
6	C2j8	N - 43° - W	方形	4.30 × 4.24	22 ~ 38	平坦	[112] 全周 [112] 全周	4 1	-	北西壁	白灰 / 土師器、須恵器、有字瓦 人骨 / 土師器、須恵器	6C前葉 →本跡 → SD 1
13	C2e6	N - 24° - W	方形	5.02 × 5.02	49 ~ 60	平坦	[112] 全周	4 1	-	北西壁	白灰 / 土師器、須恵器、石器 人骨 / 石器	6C中葉 S I 4 → 本跡

## (2) 方形周溝墓

### 第1号方形周溝墓 (第49 ~ 51図 PL11)

**位置** 調査A区中央部のC2g5区、標高21mほどの台地縁辺部に位置している。

**重複関係** 第9・15号堅穴建物跡・第27号土坑を掘り込み、第6号堅穴建物、第2号溝に掘り込まれている。規模と形状 西部は、後世の搅乱に掘り込まれているため、内法が南北軸10.70m、東西軸は8.50m、外法が南北軸15.20m、東西軸は12.40mしか確認できなかった。軸方向はN - 35° - Wで、平面形は隅丸方形あるいは隅丸長方形と推測できる。方台部は上部が削平されており、盛土は不明である。ほぼ中央部と考えられる位置から埋葬施設が確認できた。

**周溝** 西部が搅乱されているため、全周するか否かは不明である。規模は、上幅2.72 ~ 3.02m、下幅0.62 ~ 1.02m、深さは34 ~ 82cmで、壁は一様でなく、南部は直立し、北部から南東部にかけては方台部側、外縁部側は共に外傾し、外縁部側にテラス状の段を有している。

**覆土** 3層に分層できる。盛土及び壁面の崩落土が流入した堆積状況を呈している。

#### 土層解説

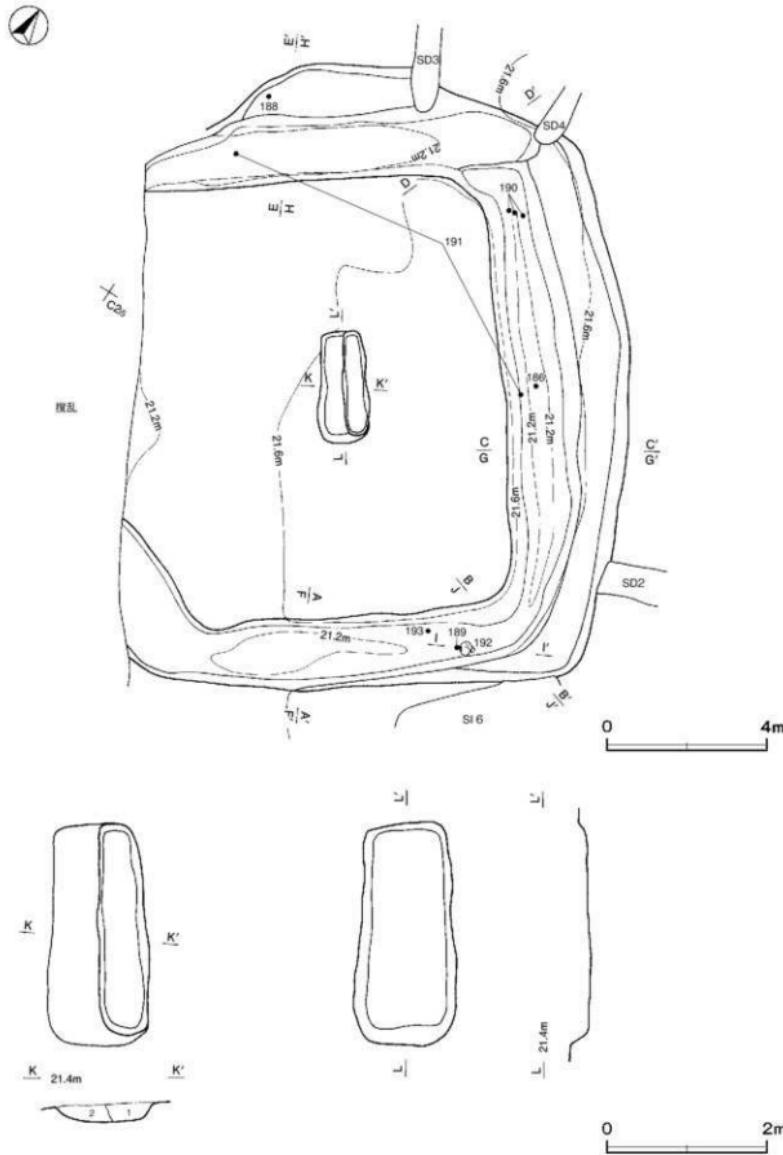
- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 墓褐色 ロームブロック中量

#### 3 黄褐色 ロームブロック多量

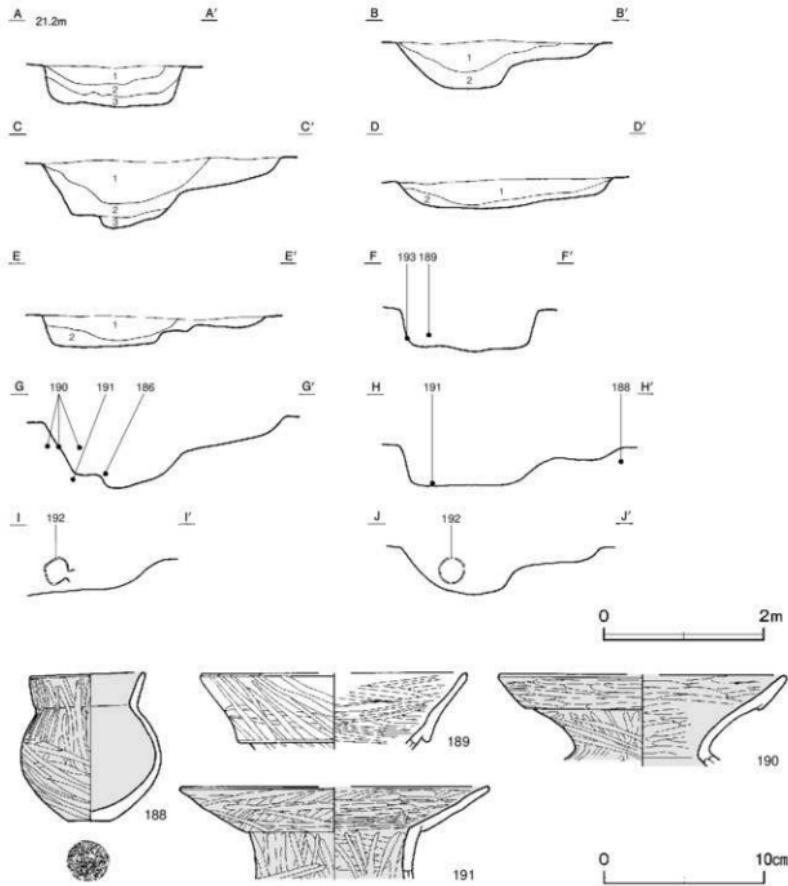
**埋葬施設・掘方** 西部が搅乱を受けているため不明な部分もあるが、遺存している部分からほぼ中央部に構築されていると推測できる。覆土の断面や平面形状から木棺直葬と考えられる。長軸2.60m、短軸0.60mの長方形で、長軸方向はN - 36° - Wである。確認面から底面までの深さは20cmで、底面は平坦である。壁は外傾している。掘方は南北軸2.70m、東西軸1.18mの長方形に掘りくぼめ、埋葬施設の構築材と考えられる位置までロームブロックを多量に混入した第2層で埋め戻している。埋葬施設内には人骨や出土遺物がなく、第1層はロームブロックが多量に含まれている。

#### 埋葬施設・掘方土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量
- 2 明褐色 ロームブロック多量



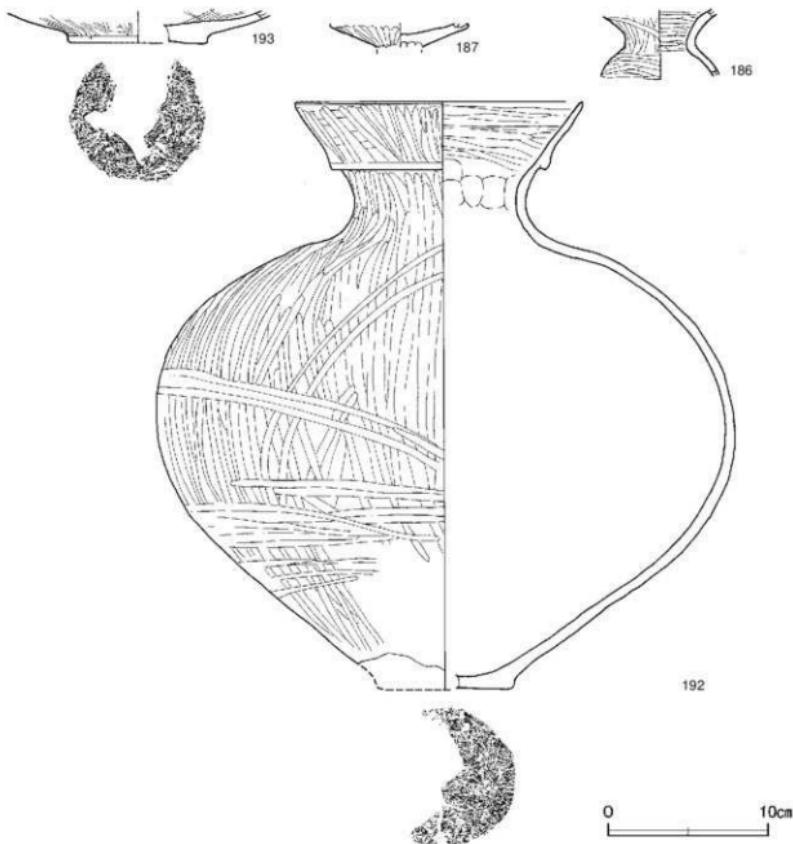
第49図 第1号方形周溝墓実測図(1)



第50図 第1号方形周溝墓・出土遺物実測図

**遺物出土状況** 土師器片 198 点(坏 27, 増 4, 高坏 1, 壺 116, 小形壺 1, 館 47, 手捏土器 2), 粘土塊 2 点が、周溝の覆土中から出土している。188は完形で正位の状態で北部のテラス状の平坦部の覆土下層から出土している。190は北部コーナー部の覆土中層、186・191は東部、189は南東コーナー部からバラバラの破片の状態で、192は南東コーナー部から口縁部が東を向いた横位の状態で覆土中層からそれぞれ出土している。188以外は、いずれも方台部側から周溝へ転落したものと考えられる。

**所見** 時期は出土土器から4世紀中葉と考えられる。



第51図 第1号方形周溝墓出土遺物実測図

第1号方形周溝墓出土遺物観察表（第50・51図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
186	土師器	壇	-	(4.1)	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	普通	口縁部外・内面へラ磨き 体部外面へラ磨き	覆土中層	20% P.L. 20
187	土師器	高环	-	(1.4)	-	長石・石英	浅黄褐色	普通	口縁部下半外側腹板のへラ磨き 内面へラナデ	覆土中層	10%
188	土師器	小形壇	69	9.2	2.7	長石・石英・赤色粒子	に赤い程	普通	外面へラ磨き 内面へラナデ 赤彩	覆土下層	100% P.L. 20
189	土師器	壺	[164]	(4.7)	-	長石・石英・赤色粒子	に赤い程	普通	複合口縁 外面横傾位のへラ磨き→斜傾のへラ磨き 内面横傾位のへラ磨き	覆土中層	10%
190	土師器	壺	[178]	(5.6)	-	長石・石英	に赤い赤褐色	普通	複合口縁 外・内面へラ磨き 赤彩	覆土中層	15%
191	土師器	壺	[190]	(5.7)	-	長石・石英・雲母	に赤い赤褐色	普通	複合口縁 口縁部外・内面へラ磨き 額部外側 へラ磨き 内面へラナデ 体部外面へラ磨き 内面へラナデ	覆土中層	10%
192	土師器	壺	177	36.2	[8.3]	長石・石英・雲母	に赤い赤褐色	普通	複合口縁 口縁部外・内面へラ磨き 額部外側 へラ磨き 内面へラナデ 体部外面へラ磨き 内面へラナデ	覆土中層	90% P.L. 21
193	土師器	壺	-	(2.0)	8.6	長石・石英	に赤い赤褐色	普通	複合口縁 口縁部外・内面へラ磨き 額部外側 へラ磨き 内面へラナデ 体部外面へラ磨き 内面へラ磨き 底部後壁穿孔	覆土中層	10%

(3) 溝跡

**第3号溝跡 (第52・53図 PL12)**

**位置** 調査A区中央部のC2e5～C2f6区、標高21mほどの台地縁辺部に位置している。

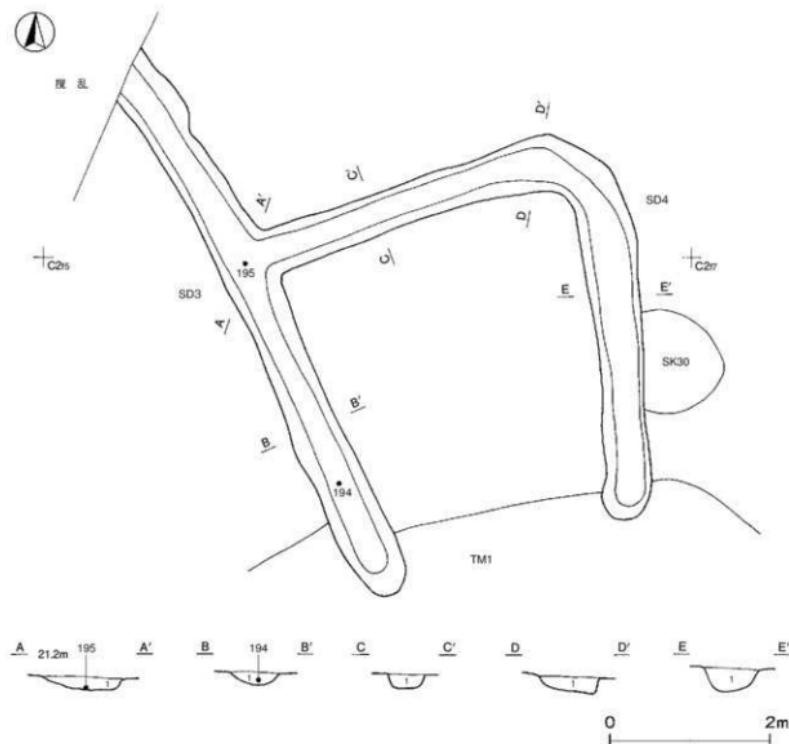
**重複関係** 第1号方形周溝墓、第4号溝に接続している。

**規模と形状** C2e5区から南方向(N-27°W)に延び、第1号方形周溝墓の周溝に合流している。北部は調査区域外北側に延びているため、確認できた長さは7.20mで、上幅0.50～0.70m、下幅0.22～0.42mである。深さは16～23cmで北部の斜面部に向かって7cmほど深くなっている。断面形は浅いU字状で、底面はほぼ平坦である。

**覆土** 単一層である。ロームブロックが多量に含まれていることから埋め戻されている。

**土層解説**

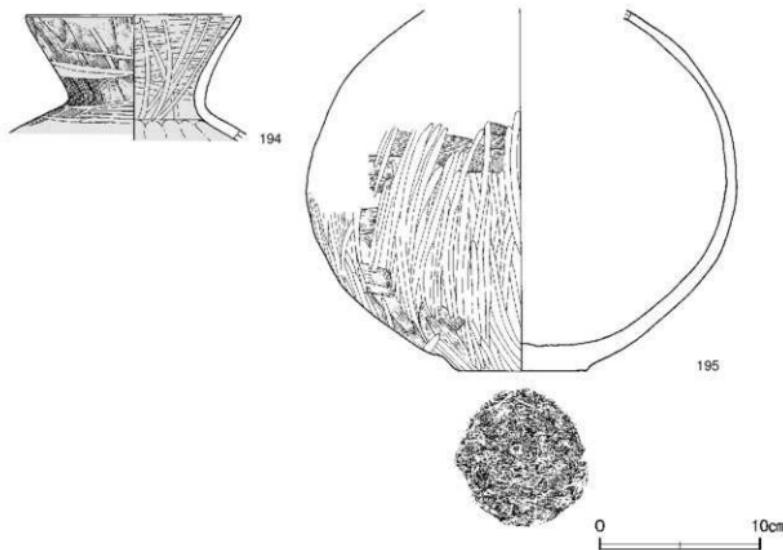
1 塗 緑色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量



第52図 第3・4号溝跡実測図

**遺物出土状況** 土師器片 10 点（壺）が覆土中から出土している。194 は口縁部の破片が正位の状態で覆土下層から出土している。また、195 は第 4 号溝と合流地点の覆土下層から散在して出土している破片が接合したものである。

**所見** 時期は、出土土器から 4 世紀中葉と考えられる。第 1 号方形周溝墓と同時期であることから、周溝の排水施設あるいは、葬送儀礼に伴う付属施設の可能性があるが詳細は不明である。



第 53 図 第 3 号溝跡出土遺物実測図

第 3 号溝跡出土遺物観察表（第 53 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
194	土師器	壺	13.1	(7.8)	-	長石・石英・赤色粒子	にふい赤褐色	普通	口縁部～頭部外周壁部の崩毛目→ヘラ削き、内面ヘラ削き、頭部内底部頭によるナラ削き、赤彩	覆土下層	30% PL 21
195	土師器	壺	-	(22.3)	8.0	長石・石英・赤母・赤色粒子	にふい赤褐色	普通	9 個崩毛目→ヘラ削き、内面ヘラナダ、底部ヘラナダ	覆土下層	50% PL 21

第 4 号溝跡（第 52 図 PL12）

**位置** 調査 A 区中央部の C 2e5 ~ C 2f6 区、標高 22 m ほどの台地縁辺部に位置している。

**重複関係** 第 1 号方形周溝墓、第 3 号溝に接続している。第 30 号土坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 第 1 号方形周溝墓の周溝北壁から北方向 (N - 8° - W) に直線状に延び、逆 L 字状に屈曲し、西方向 (N - 108° - W) に直線状に延び C 2f5 区で第 3 号溝と合流している。長さは 8.40 m で、上幅 0.54 ~ 0.70 m、下幅 0.22 ~ 0.45 m である。深さは 16 ~ 26 cm で、北部から南西部に向かって 10 cm ほど深くなっている。断面形は浅い U 字状で、底面はほぼ平坦である。

**覆土** 単一層である。ロームブロックが多量に含まれていることから埋め戻されている。

**土層解説**

1 黒 極 色 ロームブロック多量

**所見** 時期は、遺物の出土はないが、形状から第3号溝と一連の遺構と考えられることから、4世紀中葉と考えられる。

表6 古墳時代溝跡一覧表

番号	位 置	方 向	平面形	規 模			断 面	壁 面	覆 土	主 な 出 土 遺 物	備 考	
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)						
3	C2e5～C2f6	N-27°-W	直線状	7.20	0.50-0.70	0.22-0.42	16-23	浅い U字状	ほぼ 直立	人為	土師器	TM1・SD4
4	C2e5～C2f6	N-8°-W N-108°-W	逆L字状	8.40	0.54-0.70	0.22-0.45	16-26	浅い U字状 直立	ほぼ 直立	人為	-	TM1・SD3 SK30→本跡

### 3 平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、堅穴建物跡2棟を確認した。調査区域内のほぼ中央部と南部に散在して分布している。

以下、遺構及び遺物について記述する。

#### 堅穴建物跡

##### 第3号堅穴建物跡（第54図 PL10）

**位置** 調査A区南部のD2d0区、標高23mほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第1号堅穴建物跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長軸2.72m、短軸2.60mの方形で、主軸方向はN-16°-Wである。壁は高さ32-44cmで、ほぼ直立している。

**床** 平坦である。北西コーナー部と、南東コーナー部を除き踏み固められている。

**竈** 北西壁中央部に付設されている。規模は焚口から煙道部まで124cmで、燃焼部幅は66cmである。燃焼部は床面を12cmほど掘りくぼめ、ロームブロック、焼土ブロックを含んだ第1・2層を埋め戻している。煙道部は、壁外に20cmほど掘り込まれ火床部からやや外傾している。袖部は、地山を削りだして基部とし、ロームブロック、焼土ブロックを含んだ暗褐色土を積み上げて構築されている。袖の内壁は火熱を受けて赤変しているが、火床面は赤変していないことや灰屑がみられないことから、火床部を清掃した後に、第1・2層は埋め戻したものと考えられる。

**竈土層解説**

1 極 色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量 2 極 色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子微量

**ピット** P1は長径102cm、短径92cmの梢円形である。深さ52cmで、配置状況や形状から貯蔵を目的としたピットと考えられる。底面はほぼ平坦である。

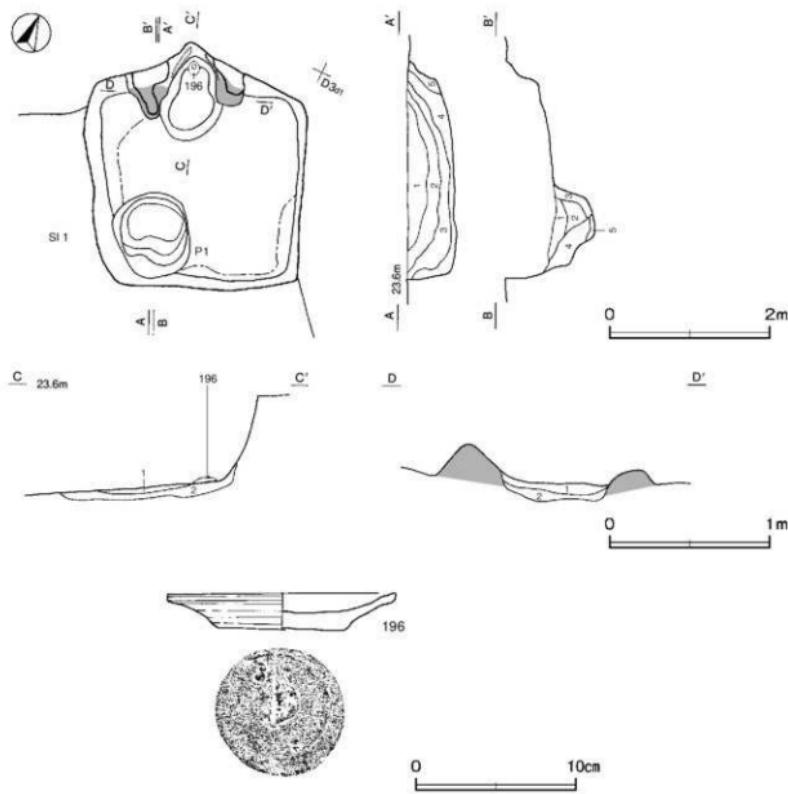
**ピット土層解説**

1 黒 極 色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 4 極 色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量  
2 黒 極 色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 5 極 色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量  
3 暗 極 色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量

**覆土** 5層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれていることから、埋め戻されている。

**土層解説**

1 黒 極 色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 4 暗 極 色 ロームブロック多量  
2 黒 極 色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 5 明 極 色 ロームブロック多量  
3 暗 極 色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量



第54図 第3号竪穴建物跡・出土遺物実測図

**遺物出土状況** 土師器片18点(環2、壺16)、須恵器1点(皿)が出土している。196は竪の火床部覆土上面に、逆位で置かれたような状態で出土している。また、覆土中から出土している土師器片は細片のため、図示できなかった。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。

第3号竪穴建物跡出土遺物観察表（第54図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎	土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
196	須恵器	皿	140	24	78	長石・石英	灰黄	普通	底部回転ヘタ切り		火床部覆土上面	100% 覆土 外・内面の一部に縁付着 P.L. 21

### 第 11 号竪穴建物跡 (第 55・56 図 PL10)

**位置** 調査 A 区中央部の C 2e7 区、標高 22 m ほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第 4・7・12・16 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長軸 2.96 m、短軸 2.84 m の方形で、主軸方向は N - 3° - W である。壁は高さ 66 cm で、ほぼ直立している。

**床** 平坦である。竪付近から中央部にかけて踏み固められている。

**壁** 北壁中央部に付設されている。規模は焚口から煙道部まで 78 cm で、燃焼部幅は 38 cm である。燃焼部は床面を 5 cm ほど掘りくぼめている。煙道部は、壁外に 10 cm ほど掘り込まれ火床部からやや外傾している。袖部は、地山の上に第 2 層から第 6 層を積み上げて構築されている。袖の内壁は第 3 号竪穴建物跡同様、火熱を受け赤変しているが、火床面は赤変していないことから、火床面を清掃した後に、第 1 層を埋め戻したものと考えられる。また、川原石を利用した支脚が煙道部際の高い位置の第 1 層に突き刺したかのようにたてられている。

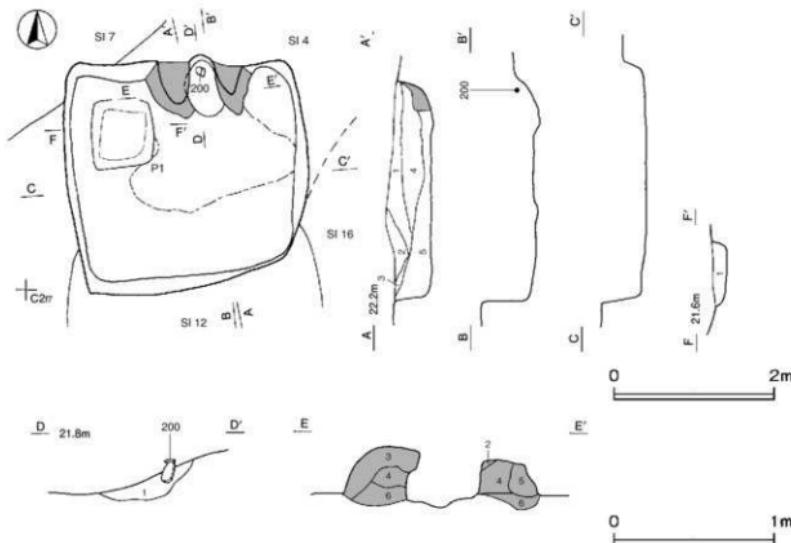
#### 遺土層解説

1	暗	褐色	ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量	5	明	褐色	ロームブロック多量、黃褐色山砂少量、燒土粒子・炭化粒子微量
2	灰	褐色	ロームブロック・炭化粒子多量、燒土ブロック中量	6	暗	褐色	ロームブロック多量、黃褐色山砂少量、燒土粒子・炭化粒子微量
3	褐	色	ロームブロック多量、黃褐色山砂中量				
4	褐	色	ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量				

**ピット** P 1 は長軸 84 cm、短軸 78 cm の方形である。深さ 18 cm で、底面はほぼ平坦である。配置状況や形状から貯蔵穴のようにみえるが、掘り込みが浅いため、不明である。

#### ピット土層解説

1	黒	褐色	ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量
---	---	----	-----------------------



第 55 図 第 11 号竪穴建物跡実測図

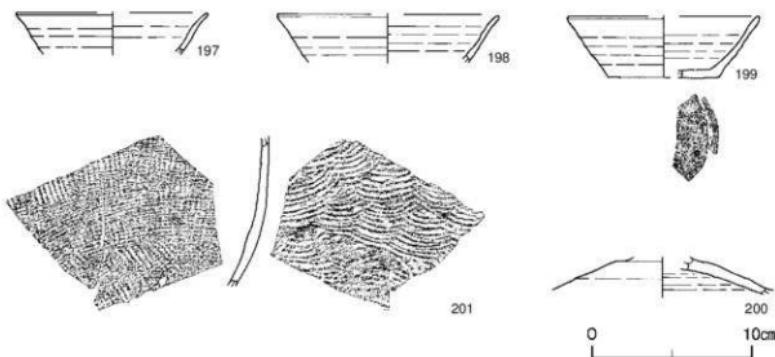
**覆土** 5層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれ、不規則な堆積状況から埋め戻されている。

土壤解說

- |   |   |   |           |               |
|---|---|---|-----------|---------------|
| 1 | 褐 | 色 | ロームブロック多量 | 燒土粒子・炭化粒子微量   |
| 2 | 明 | 褐 | ロームブロック多量 | 燒土粒子・炭化粒子微量   |
| 3 | 暗 | 褐 | ロームブロック中量 | 燒土粒子・炭化粒子微量   |
| 4 | 明 | 褐 | ロームブロック多量 | 燒土粒子少量・炭化粒子微量 |
| 5 | 褐 | 色 | ロームブロック多量 | 燒土粒子少量・炭化粒子微量 |

**遺物出土状況** 土師器片 12 点（壺 3、甕 9）、須恵器片 15 点（壺 11、蓋 3、甕 1）自然礫 1 点（支脚に使用）が、出土している。200 は、支脚の上に正位の状態で、置かれた状態で出土している。197～199 は南東部の覆土下層、201 は覆土中からそれぞれ出土している。そのほかの土器片は細片のため、図示できなかった。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。また、竈の支脚が、煙道部をふさぐように立てられていることから、竈祭祀に関係する行為の可能性が考えられる。



### 第56図 第11号竪穴建物跡出土遺物実測図

第11号竪穴建物跡出土遺物觀察表（第56図）

番号	種別	器種	口径	基高	底径	胎	土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
197	須恵器	环	[118]	(26)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	部芯クロナデ	覆土下第	5%	新古窯 内面塗付有
198	須恵器	环	[136]	(30)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	部芯クロナデ	覆土下第	3%	新古窯
199	須恵器	环	[116]	38	[69]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	覆土下第	30%	新古窯 L1_22
200	須恵器	盃	-	(23)	-	長石・石英・雲母	にふい黄灰	普通	外面回転ヘラ削り 内面クロナデ	窓内	15%	新古窯 内面塗付有
201	須恵器	甕	-	(92)	-	長石・石英	黄灰	普通	外面斜子目の叩き→カギ目 内面心円凹の当 直痕	覆土中	5%	新古窯 L1_22

表7 平安時代堅穴建物跡一覽表

番号	位置	主軸方向	平面形	規 横		壁 高 (cm)	床面 傾 溜	内 部 施 設			覆 土	主な出土品	時 期	備 考		
				長軸	短軸			通路	壁孔	人口	ビット	単・複	房間			
3	D 2d0	N - 16° - W	方 形	272	× 260	32 ~ 44	平坦	-	-	-	-	北西向	I	人骨	土師器、須恵器	9 C 中葉 S I 1-2 -本跡
11	C 2e7	N - 3° - W	方 形	296	× 284	66	平坦	-	-	-	1	北東向	-	人骨	土師器、須恵器、青銅鏡(戈頭)	9 C 前葉 S I 4 - S I 15 S I 12 - 本跡 S I 7 - 本跡

#### 4 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期や性格が明確でない溝跡5条を確認した。その中で、特徴のある3条については文章で記述し、その他は一覧表で掲載する。また、遺構に伴わない遺物については、実測図と観察表を掲載する。

### (1) 溝跡

#### 第5・7号溝跡（第57図、付図 PL15）

**位置** 調査A区中央部のC2f9～C2h9区、標高23mほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第5号溝は、第8号土坑を掘り込んでいる。第7号溝跡は第2号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 第5溝跡は、C2f9区から南西方向（N-155°-W）に直線状に延びC2g9区で途切れている。北東方向は調査区域外の北東側へ延びるため、確認できた長さは3.22mで、上幅0.70～1.44m、下幅0.46～1.10mである。深さは21～25cmで北部から南西部に向かって4cmほど深くなっている。断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦である。第7号溝跡は、C2h9区から北西方向に（N-56°-W）に直線状に延び1.30mほどで途切れている。南東方向は調査区域外の南東側へ延びている。上幅0.76～0.94m、下幅0.40～0.50mで深さは41～43cm、南東部から北西部に向かって2cmほど深くなっている。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。

**覆土** 4層に分層できる。ロームブロックが多量に含まれていることから、埋め戻されている。

##### 土層解説（第5・7号溝跡共通）

1 黒褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量	3 墓褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 開色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量	4 黒褐色	ロームブロック多量

**所見** 時期は、出土遺物がないため不明であるが、第7号溝跡が第2号溝に掘り込まれていることから、第2号溝より古い。性格は、調査区域外に延びているため不明な部分もあるが、両溝跡は、覆土の状況が同一で、形状や方形周溝墓が近接する位置に立地することから、方形周溝墓あるいは、古墳の周溝の可能性がある。



第57図 第5・7号溝跡実測図

#### 第6号溝跡（第58図、付図 PL15）

**位置** 調査A区北部のB2b4～B2c5区、標高17～19mほどの台地斜面部に位置している。

**規模と形状** B2b5区から南西方向（N-155°-W）に直線状に延びている。北東部に進むに従い急斜面になることから、安全のため、長さは4.60mしか調査できなかった。上幅2.20～4.30m、下幅0.40～0.80mである。深さは90～208cmで北東部から南西部に向かって120cmほど深くなっている。断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦で西側の斜面に沿って急激に下がっている。

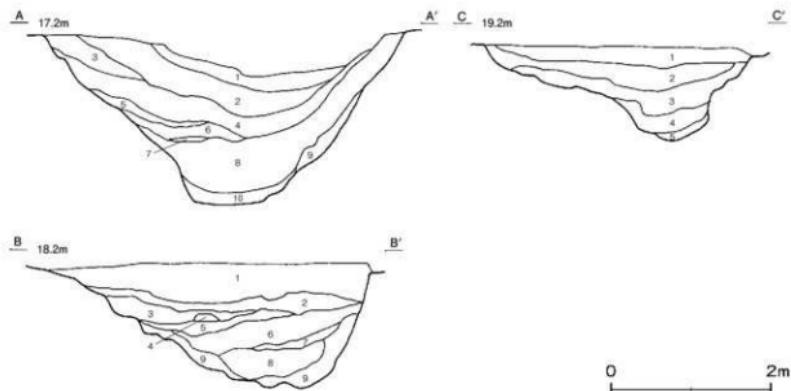
**覆土** 10層に分層できる。ロームブロックが多く含まれ、時代の異なる遺物が混在して出土していることが埋め戻されている。

##### 土層解説

1 墓褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 墓褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 開色	ロームブロック多量、炭化物少量、焼土粒子微量	8 墓褐色	ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子微量
3 墓褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 開色	灰白色粘土ブロック多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4 明褐色	ロームブロック・灰白色粘土ブロック多量	10 明褐色	灰白色粘土・ロームブロック多量、ロームブロック少量
5 黒褐色	ロームブロック多量、炭化物少量、焼土粒子微量		
6 墓褐色	ロームブロック多量、炭化物・焼土粒子微量		

**遺物出土状況** 繩文土器片 31 点（深鉢）、土師器片 31 点（壺 6、甕 25）、須恵器片 1 点（壺）、陶器片 9 点（碗 8、擂鉢 1）、磁器片 10 点（碗）、土製品 7 点（埴輪）、瓦片 3 点（平瓦）が覆土中から出土している。遺構の形状や覆土の状況から、これらは、埋め戻しの際の混入遺物で当遺構には伴わない遺物と考えられ、遺構外出土遺物の頁で主なものを掲載した。

**所見** 伴う遺物がないために、詳細な時期は不明であるが、形状から中世城郭に伴う堅堀と考えられ、宮田館に関係する防御施設の可能性がある。陶磁器の出土から、18世紀前半には廃絶したものと考えられる。



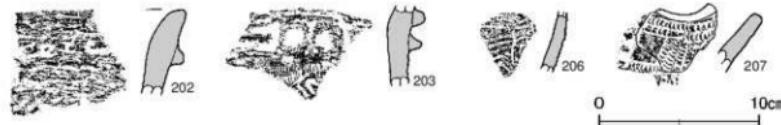
第 58 図 第 6 号溝跡実測図

表 8 その他の溝跡一覧表

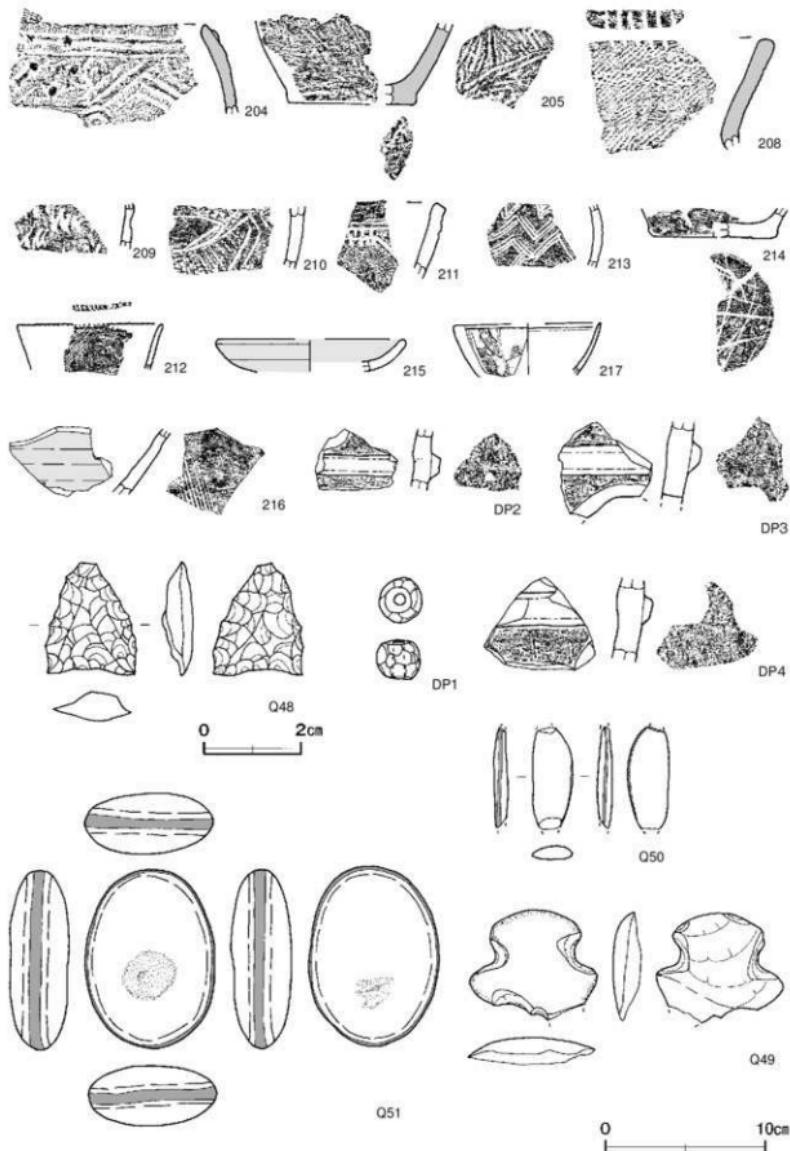
番号	位 置	方 向	平 面 形	度 横			断 面	横 面	覆 土	主な出土遺物	備 考	
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
1	C 218-C 210	N-108°-W	直線状	(8.06)	0.54-0.70	0.22-0.58	7-26	U字状	外傾	人為	-	SI 6→本跡
2	C 218-C 210	N-108°-W	直線状	(7.10)	0.68-0.70	0.22-0.52	10-28	U字状	外傾	人為	-	TM 1, SD 7 →本跡
5	C 219-C 219	N-155°-W	やや曲面状	(3.22)	0.70-1.14	0.46-1.10	21-25	逆台形	外傾	人為	-	SK 8→本跡
6	B 214-B 215	N-155°-W	直線状	(4.60)	2.20-4.30	0.40-0.80	90-208	逆台形	外傾	人為	縄文土器、土師器、須恵器、陶器、埴輪、土製品	-
7	C 210	N-56°-W	直線状	(1.30)	0.76-0.94	0.40-0.50	41-43	逆台形	外傾	人為	-	本跡→SD 2

#### (2) 遺構外出土遺物 (第 59 ~ 61 図)

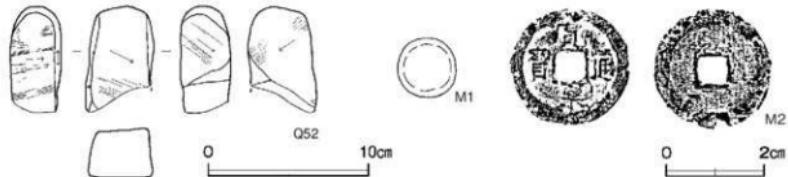
今回の調査で、出土した遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。



第 59 図 遺構外出土遺物実測図 (1)



第60図 遺構外出土遺物実測図（2）



第 61 図 遺構外出土遺物実測図（3）

遺構外出土遺物観察表（第 59 ~ 61 図）

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
202	縄文土器	深鉢	-	(5.2)	-	長石・石英・赤色粒子・織維	棕	普通	口唇部に陰文 壁に半截竹管による爪形文	表土	道下 P. 22
203	縄文土器	深鉢	-	(5.0)	-	長石・石英・赤色粒子・織維	棕	普通	ボタン状貼付文 ループ文→梯子状沈綱文	表土	花橋下層式 P. 1
204	縄文土器	深鉢	-	(5.5)	-	長石・石英・織維	にぶい褐	普通	梯子状沈綱文→コンパス文→瘤状貼付文	S 111	関山式
205	縄文土器	深鉢	-	(5.2)	[7.8]	長石・石英・織維	青灰・内面赤	普通	外壁・内面普通	表土	5% 早期後半
206	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	長石・石英・赤色粒子・織維	青	普通	外唇部窪文し R →コンパス文	表土	前野前半
207	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	長石・石英・織維	にぶい褐	普通	口唇部の窪文 半截竹管による爪形文→瘤状貼付文	S 111	関山式
208	縄文土器	深鉢	-	(6.9)	-	長石・石英・赤色粒子・織維	棕	普通	口唇部山形の刻文 半截竹管し R →結節綱文	表土	黒浜式 P. 1, 22
209	縄文土器	深鉢	-	(2.8)	-	長石・石英	にぶい褐	普通	外面流狀具紋文 内面ナデ	表土	浮島式
210	縄文土器	深鉢	-	(4.1)	-	長石・石英・赤色粒子	にぬ(赤)青	普通	外唇部窪文に貝殻復縫文を充填 内面丁寧な帶	表土	興津Ⅱ式
211	縄文土器	深鉢	-	(4.6)	-	長石・石英・赤色粒子	にぬ(赤)青	普通	半截竹管による沈綱文・刺突文	表土	阿太の木 P. 1, 22
212	弥生土器	壺	[9.0]	(2.8)	-	長石・石英	褐	普通	口唇部連続刺突文 口縁部單脚磨擦縫文 R L	表土	10% 深木中期後半
213	弥生土器	壺	-	(3.8)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	3本の柳葉原体による連続山形沈綱文 内面へ	表土	東中領式
214	弥生土器	壺	-	(1.9)	[7.6]	長石・石英・青灰・赤色粒子	にぶい褐	普通	外唇部窪文 内面ヘラナデ 底部木彫痕	S 113	10% 深木後期

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土・色調	文様の特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
215	陶器	瓶	[11.4]	(2.0)	-	精緻・褐・灰白	外・内面貫入	白陶釉	志野	表土	10% 17 C後半 P. 1, 22
216	陶器	壺鉢	-	(4.2)	-	精緻(石英)・にぬい赤系	12 本の環目	鐵釉	廻戸・美濃	S D 6	18 C前半 P. 1, 22
217	磁器	樂付磯	[9.0]	(3.2)	-	緻密・灰白	筆書き R 2部外表面縫文 内面二重圓鏡文 体部に画文に青草文	透明釉	肥前	S D 6	10% 大須彌字 V前18 C前半 P. 1, 22

番号	器種	長さ・径	幅・孔径	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 1	玉	2.7	0.7	2.3	17.63	長石・石英・雲母	にぬい褐	指壓によるナデ 一方向からの穿孔	表土	P L 22
DP 2	円筒埴輪	(3.8)	-	-	(22.74)	長石・石英・赤色粒子	棕	台形状の凸沿 外面横位の刷毛目 内面ヘラナデ	S D 6	P L 22
DP 3	円筒埴輪	(5.0)	-	-	(52.18)	長石・石英・雲母	棕	台形状の凸沿 透かし穴円形 内面ヘラナデ	S D 6	-
DP 4	円筒埴輪	(5.2)	-	-	(66.68)	長石・石英・雲母	棕	台形状の凸沿 外面縦位の刷毛目 内面ヘラナデ	S D 6	P L 22

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 48	礫	23	19	0.6	2.05	砂岩	平基無茎縫、両側押圧凹溝	T M 1	-
Q 49	打製石斧	(6.8)	6.9	1.6	(86.8)	砂岩	一部欠損 分割形 両面調整	表土	-
Q 50	磨石	(8.2)	2.5	0.9	(23.1)	綠色岩	側縫部使用痕	表土	-
Q 51	円石	11.0	8.0	3.7	488.1	安山岩	四部にか所 磨石兼用側縫部使用痕	表土	-
Q 52	砾石	(6.6)	4.2	3.2	(124.7)	砂岩	底面4面	T P 2	-

番号	器種・鉢名	径	幅・孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	鉢	12	12	-	11.18	鉢	火照れの玉 鈴(鉢を荷車という形容で木の柄のついた玉杓子状の容器で溶かし、玉杓といふ就状の鉢型に入れて作る。)	表土	P L 22
M 2	寛永通寶	24	0.6	0.2	3.31	銅	背面無文	表土	3割前駆年(1697) P. 1, 22

## 第4節 まとめ

### 1 はじめに

今回の調査で、殿島遺跡では、縄文時代、古墳時代、平安時代と断続的に土地利用されてきたことが明らかとなった。縄文時代では竪穴建物跡14棟、陥し穴4基、炉穴1基、土坑19基、古墳時代では竪穴建物跡2棟、方形周溝墓1基、溝跡2条、平安時代では竪穴建物跡2棟を確認した。ここでは、各時代の様相について概観し、遺構及び遺物について所見を述べ、若干の考察をする。

### 2 縄文時代

今回の調査区は、台地の西側の縁辺部にあたる。当時代の遺構は、北部と南部の緩斜面部を除き、台地部のほぼ全城に分布している。

遺構は、竪穴建物跡が、台地の縁辺部に沿って分布し、陥し穴や土坑は、それらの竪穴建物跡に沿って、重複して分布している。出土遺物は、早期後半（貝殻条痕文期）、前期初頭（遠下式期）、前期前半（花積下層式期、関山式期）、前期中葉（黒浜式期）、前期後半（浮島式期、興津式期）、中期前半（五領ヶ台式期・阿玉台I式期）の縄文土器（深鉢）、石器（琢器・鎌・石匙・打製石斧・磨石・敲石・凹石）などが出土している。早期後半の縄文土器は、遺構に伴わないものである。当時代では、前期初頭から中期前半にかけて集落が営まれていたことがわかる。

#### (1) 竪穴建物跡について（第4～29図 付図）

竪穴建物跡は、台地の縁辺部に沿って確認できた。時期は、出土土器の文様の特徴から前期前半（関山式期）、前期中葉（黒浜式期）、前期後半（浮島式期）の3時期に分けられる。前期前半（関山式期）は、第1・2・4・7・8・9・10・12・16・18号竪穴建物跡、前期中葉（黒浜式期）は第5号竪穴建物跡、前期後半（浮島式期）は、第17号竪穴建物跡が該当する。ほかに、第14・15号竪穴建物跡が遺構の形状から縄文時代と考えられるが、出土遺物がないため、詳細な時期は不明であるが、前期前半（関山式期）のものが圧倒的に多いことが判明している。さらに関山式期のものは、瘤状貼付文が特徴の関山I式の一時期に収まる。

次に平面形状をみていくと、関山I式期では、不整長方形、長方形、円形、楕円形の4タイプに分けられる。不整長方形のものは、第18号竪穴建物跡、長方形のものは、第1・7・8・9・10号竪穴建物跡、円形のものは、第2号竪穴建物跡、楕円形のものは、第4・16号竪穴建物跡がそれぞれ該当する。

出土土器では、時期差を確認することはできないが、第2号竪穴建物は第8号竪穴建物跡を掘り込み、第7号竪穴建物は第4号竪穴建物跡を、第8号竪穴建物跡は第18号竪穴建物跡をそれぞれ掘り込んでいることから、楕円形→不整長方形→長方形→円形の順で新しくなることが考えられる。また、分布状況は、狭長の調査区のため、不明な点が多いが、数の多い長方形のものは、台地の縁辺部を沿うような形で分布していることがわかる。

前期中葉（黒浜式期）では、第5号竪穴建物跡一棟のみで、遺構は、調査区域外に延びるため、不明な点が多いが、平面形は方形ないし長方形である。

前期後半（浮島式期）は、第17号竪穴建物跡は楕円形の1例しかわからないが、関山式期から遡ると、楕円形→不整長方形→長方形→円形→方形・長方形→楕円形と移り変わっており、当遺跡の前期の竪穴建物跡については、方形基調と円形基調が繰り返し、変遷していくことが考えられる。

#### (2) 陥し穴について（第30～35図 付図）

陥し穴は、調査区南部から中央部にかけて、点在して確認できた。出土土器の文様の特徴から、前期前半（関山式期）と前期後半（浮島式期）の2時期に分かれる。前期前半（関山式期）のものは第1・2号陥し穴、前期後半（浮島式期）のものは第3・4号陥し穴が該当する。

関山式期のものは、調査区の南部寄りに2基確認できた。第2号陥し穴は、第8号竪穴建物跡を掘り込んでいるが、出土土器に時期差がないことから、第2号陥し穴の出土土器は、第8号竪穴建物跡の土器が流れ込んだ可能性がある。いずれにしても、第8号竪穴建物跡の廃絶後に掘り込まれた遺構と考えられる。

形状をみていくと、第1号陥し穴は平面形が楕円形で、掘り込みは浅い。底面も楕円形で狭くなる。第2号陥し穴は平面形が楕円形で、壁の途中に段を有し、掘り込みが深い。底部は楕円形で狭くなる。以上のようにタイプの異なる陥し穴であることから、鹿や猪などの獣の種類によって、使い分けで構築されたものと考えられる。

浮島式期のものは、調査区中央部に点在して2基確認できた。第4号陥し穴は、関山式期の第16号竪穴建物跡を掘り込んでいることから、関山式期の集落が廃絶後に陥し穴を掘り込んでいることが考えられる。形状をみていくと、第3号陥し穴は、平面形が楕円形、壁の途中に段を有し、底面が円形で狭くなる。第4号陥し穴は楕円形の筒形で、底面に逆茂木のピットを有する。2基の陥し穴は同時期であるが、形状が異なることから、関山式期のものと同様、鹿や猪等の捕獲に使い分けをしていた可能性がある。

さらに、関山式期、浮島式期とともに、立地的な観点から台地平坦部から、台地縁辺部に追い込むように設置されていたと推測できる。また、浮島式期の陥し穴と竪穴建物跡との関係であるが、位置的に近接していることから、出土土器が細片のため不明な部分があるが、浮島式期の新しい様相を示す口線直下に縱位の条線文と波状貝殻文の土器が出土している陥し穴と第17号竪穴建物跡はほぼ同時期と考えられる。

#### (3) 炉穴について（第36・37図 付図）

炉穴は、調査区南部の台地緩斜面部から1基確認できた。出土土器は、器壁が厚く、胎土に纖維を含み、口縁部には隆帯を貼付する。口縁部の文様帶は、半截竹管による刺突文の特徴から、前期初頭（遼下式）に比定できる。県内で遼下式土器の出土例は、標識遺跡である日立市遼下遺跡<sup>1)</sup>を筆頭に、那珂市森戸遺跡<sup>2)</sup>、同市伊達遺跡<sup>3)</sup>、茨城町奥谷遺跡<sup>4)</sup>、常陸太田市瑞龍古墳群<sup>5)</sup>と少なく、県北に集中してみられる。また、「炉穴は早期末葉には衰退して、以降は散発的に確認されるだけである。」<sup>6)</sup>とあるように、前期初頭の炉穴は、県内では類例がなく、貴重な資料である。

#### (4) 土坑について（第38～43図 付図）

土坑は19基確認した。調査区域の北端部と南端部を除き、ほぼ全域に分布している。19基中時期が明確なのは、9基である。出土土器から、前期前半（関山式期）、前期中葉（黒浜式期）、中期初頭（五領ヶ台式期）に時期区分ができる。前期前半（関山式期）のものは、第15・19・20・29号土坑、前期中葉（黒浜式期）のものは、第5・9号土坑、中期初頭（五領ヶ台式期）のものは第13・14・21号土坑にそれぞ

れ該当する。

以上のように時期別に分布状況をみていくと、前期前半（関山式期）の土坑は、台地の縁辺部に沿うような形で分布している。当期の土坑の性格は、人骨や副葬品などの遺物の出土はないが、形状や覆土状況から墓坑と考えられる。

前期中葉（黒浜式期）の土坑は、同じ等高線上に点在して分布している。関山式期の堅穴建物跡を掘り込んでいることから、関山式期の集落が廃絶後に土地利用をしていることがわかる。同時期の第5号堅穴建物の確認状況から、集落は調査区域外東側の台地平坦部へ拡がるものと考えられる。性格は人骨や副葬品などの遺物の出土はないが、形状や覆土の状況から墓坑と考えられる。

中期初頭（五領ヶ台式期）の土坑は、調査区の南部に集中して分布している。特筆すべきことは、3基の土坑が、トンネル状の横穴で連結していることである。第13・14号土坑の横穴の入り口部分の底面からは、焚火の跡と考えられる炭化材や焼土が出土している。炭化材については自然科学分析（C14年代測定・樹種の同定）を行ったところ、時期が中期頃で、出土土器の時期とはほぼ合致している。樹種は、第13号土坑がクリ属、第14号土坑がエノキ属という結果がでている。このことから、食用の植物が周辺に生育していたことがわかる。

次にこの遺構の類例であるが、県内では、同様な類例は現在のところ見られない。県外の管見に触れる類例としては、千葉県柏市の小山台遺跡<sup>7)</sup>で、前期の同様な土坑がトンネル状の横穴で連結され、横穴は100m以上にわたって掘り込まれている。焚火の跡や、出入り口とみられるスロープ、貝が多量に捨てられた土坑も確認されているが、性格は不明とされている。当遺跡や小山台遺跡のトンネル状の横穴は、径が1mほどで、大人がしゃがんで通れるほどの穴である。横穴の入り口には、焚火の跡があり壁面や天井部に煤が付着していることから、一方の土坑で火を焚いて対する土坑に肉を吊るし、煙でいぶして焼製を作る施設であることが考えられるが、通路のように長く続いているので、詳細が不明のため、資料の増加を待って検討しなければならない。

### 3 古墳時代

当時代の遺構は、調査区のほぼ中央部に分布している。前期では、方形周溝墓1基、溝2条、後期では、堅穴建物跡2棟が確認できた。出土遺物は、土師器（壺・高壺・壇・鉢・壺・提瓶・甕・手捏土器）、須恵器（甕）、土製品（土玉・円筒埴輪）である。なお、円筒埴輪に伴う遺構は、調査区域内では確認できなかつたが、横位のハケ目がみられることから、調査区域外に5世紀代の古墳が存在する可能性がある。

#### (1) 堅穴建物跡について（第44～48図 付図）

堅穴建物跡は、台地の平坦部から台地の縁辺部寄りに第6・13号堅穴建物跡2棟が散在して存在している。該当する遺構は、第6・13号堅穴建物跡である。出土土器の特徴から、第6号堅穴建物跡が6世紀前葉、第13号堅穴建物跡が6世紀中葉に比定でき、2時期に分けられる。時期差はあるものの、平面形状は方形で、北壁のほぼ中央部に龜を構築し、主柱穴4か所で、南部の主柱穴間のほぼ中央部に出入り口施設と考えられるピットが1か所付設されていることから、共通した構造をもっている。第6号堅穴建物跡から第13号堅穴建物に建て替えて移り住んだとも考えられるが、詳細は不明である。

遺物の出土状況では、両者ともに、全体にまばらで少量の出土状況から、不要なものだけを廃棄しているような状況である。

また、第6号竪穴建物跡には、西コーナー部の床面に土師器壊のほぼ完形の土器が、正位で置かれたような状態で出土している。これをもって、廃絶時の祭祀と判断するのは短絡的であるが、覆土下層から破砕されてバラバラになった状態で、須恵器の模倣と考えられる酸化炎焼成の提瓶が出土していることから、廃絶時に祭祀が行われた可能性はある。

第13号竪穴建物跡では、窓内から集中して出土しているが、通常の廃棄であり、祭祀を行ったような痕跡はみられなかった。のことから、廃棄時の祭祀は、ある特別な目的や意味があるものと考えられる。他遺跡の類例をみて検討しなければならない。

#### (2) 方形周溝墓について（第49～51図 付図）

方形周溝墓は、調査区の中央部の台地縁辺部から1基確認できた。出土土器の特徴から4世紀中葉に比定できる。ほぼ中央部には、埋葬施設と考えられる土坑が確認できた。埋葬施設内には、人骨や副葬品等の遺物の出土はみられなかった。

周溝では、北部から南東部にかけて外縁部側にテラス状の段が付設されている。北部から完形の土師器壺が出土しており、祭壇状の性格を持っていると考えられる。

遺物の出土状況は、北部のテラス状の段から出土している土師器壺を除き、そのほかはすべて周溝内の覆土からの出土である。遺物の出土状況を観察すると、底部を打ち欠いた完形の壺が南東部の覆土下層から出土しているが、それ以外の壺や甕はバラバラの破片の状態で出土している。出土状況から方台部側から周溝へ転落したものと考えられる。

方形周溝墓の遺物出土状況については、奥沢哲也氏が瑞龍古墳群<sup>8)</sup>において出土状況を分析している。それによると「壺は埋葬後の墓前祭祀で使用され、葬送儀礼に伴って底部の打ち欠きや穿孔、破碎などの変形行為を行い方台部に据え置かれたと考えられる。また、甕類は同様の祭祀後、周溝内に投棄され、破碎されたと考えられる。」と推測している<sup>9)</sup>。

当遺跡では、完形の壺がみられるが、バラバラになって出土している壺もみられることから、方台部に据え置かれたものと、祭祀後に破碎して投棄された壺もあることになる。このことから集落や地域による葬送儀礼の違いがあるものと考えられる。

また、特筆すべきことは、当遺構から出土している完形の壺は体部の肩が張っていることである。関東でみられる球形の体部に対し、「北陸系」の土器に似た体部の特徴をもっている<sup>10)</sup>。

墓域は方形周溝墓の東側に隣接して、調査区域外の東側に延びる周溝状の溝が確認できることから、台地の中央部にむかって拡がる可能性がある。

#### (3) 溝跡について（第52・53図 付図）

当時代の該当する遺構は、第3・4号溝跡である。調査区中央部の第1号方形周溝墓に隣接している。時期は、出土土器の特徴から4世紀中葉に比定できる。隣接する方形周溝墓と、同時期であることから、付随する施設と考えられる。遺構の性格は、形状から排水施設か墓前祭祀等の葬送儀礼に関係する施設を区画する溝の可能性がある。台形状に区画された部分は、古墳の「造り出し」のような壇状の施設の可能性がある<sup>11)</sup>。溝から出土している土師器壺は赤彩を施されているものがみられ、祭祀に使われて、投棄されたものと考えられる。

#### 4 平安時代

当時代の遺構は、堅穴建物跡2棟が調査区中央部と南部で確認できた。両者は台地の同一等高線上にあり、間隔は35mほどの距離がある。

##### 堅穴建物跡について（第54～56図　付図）

該当する遺構は、第3・11号堅穴建物跡である。時期は、出土土器の特徴から、第3号堅穴建物跡が9世紀中葉、第11号堅穴建物跡は9世紀前葉である。時期差は若干あるものの、両遺構の規模はほぼ同一である。調査区が狭長なため、集落の全容はつかめないが、平川南氏の研究によると、「同一時期の土器を出土する住居群の中には、形態・規模・窓の構造・主軸方位など酷似する一对の住居がしばしば認められるが、住居は二棟一組のあり方と呼び、それを集落の中から抽出すると、その距離はおむね20m前後であり、たいていの場合は15～30mにおさまっている。」と論じられている<sup>12</sup>。当遺跡も35m間隔であることから、ほぼ合致している。

また、両者ともに、窓は袖部の内壁は赤変しており、使用痕がある。火床面が赤変しておらず、灰層も確認できないことから、火床部を清掃の後、埋め戻しているものと考えられる。第3号堅穴建物跡では、埋戻し後に、火床部の覆土上面に須恵器皿の完形品を逆位に伏せた状態で置かれている。第11号堅穴建物跡では、天井部を撤去し、窓の火床部から袖部の高さまで埋戻し、煙道部付近に石製の支脚を刺し込み、その上には須恵器蓋の破片が正位の状態で載せられた状態で出土している。

この窓廃絶時のプロセスの研究については、堤隆氏の研究<sup>13</sup>がある。それによると1段階の窓解体では、両遺構共に袖部が残っていることから、窓天井部の解体、さらに、支脚の解体、2段階の構築材の処置では遺構外に廃棄、3段階の祭祀行為では、第3号堅穴建物跡が土器・礫・土による封鎖、完形土器の据置き、第11号堅穴建物跡が土器・礫・土による封鎖、支脚の土器による被覆があてはまる。堤氏は「窓祭祀を総体的に位置づけるなら、『解体』あるいは『封鎖』こそその本質であり、それが窓神を送り出す意味をもった行為であることが察せられよう。」と述べられている。

以上のように、第3・11号堅穴建物跡の廃絶に伴う行為は、解体して、それぞれ使用した部分を封じ込める行為と考えられることから、窓廃絶に伴う祭祀の可能性がある。

#### 5 おわりに

今回の調査区は、遺跡西部の台地縁辺部にあたる。狭長な調査区域であったが、縄文時代では、前期初頭から中期前半の集落跡と断続的に土地利用されていたことが明らかとなった。

特筆すべきことは、当地域では、検出例の少ない縄文前期前半（関山式期）の堅穴建物跡がまとまって確認できたことである。また、古墳時代前期では、台地の縁辺部に方形周溝墓が1基確認できた。國部川を挟んで対岸の石岡市弥陀ノ台遺跡<sup>14</sup>では、前期の堅穴建物跡7棟が確認され、出土土器から第1号方形周溝墓とはほぼ同時期であることから、集落と墓域の関連性が考えられる。さらに、第1号方形周溝墓は、県内では類例のない排水溝あるいは祭壇状の張り出し部を区画する溝を付随する特異な形状や、出土土器の特徴からも弥生土器から繼承された装飾がなくなる段階の土器であることから、関東の古墳出現期である4世紀中葉以降の方形周溝墓の系譜を引きながら古墳に移行する過渡期の遺構ではないかと考えられる。

当調査A区内には、城郭に関する小字名「権現平」から、宮田館の城城と推測されている<sup>15</sup>。のことから、宮田館の関連する施設を念頭に調査を行ったが、台地の平坦部からは、遺構は確認できなかった。しかし、

遺構外から火縄銃の玉が出土しているのと、出土遺物がないため、時期は不明であるが、北部の台地斜面部から堅堀が1条確認できたことから、中世城郭の一部の可能性はある。

調査B区は、小字名が「天神山」と呼ばれ、調査区域外の北東側には神社が建っている。現況では、南北と西側には、谷が入り自然地形を利用した中世城郭の曲輪状の形をしている。地元古老人の話では、今から20年前に調査区域外の北東側のグランドゴルフ整備に伴い、当調査区内も整地したことが判明した。隣接する神社は、以前は、高い山の上有ったという。宮田館の施設を想定して調査を行ったが、調査の結果、盛土整地層は現代と判明し、城郭に伴う遺構は確認できなかった。

#### 註

- 1) 川崎志郎・佐藤政則・大平達雄・鈴木裕芳・島崎和夫『日立市遠下道路発掘調査報告書』日立市教育委員会 1975年3月
- 2) 那珂町史編さん委員会『那珂町史 自然環境・原始古代編』1988年3月
- 3) 註2文献と同じ
- 4) 茨城県史編さん第一部会原始古代専門委員会『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』茨城県 1979年3月
- 5) 奥沢哲也『瑞龍古墳群 県立常陸太田特別支援学校施設整備事業地内埋蔵文化財調査報告』『茨城県教育財團文化財調査報告』第415集 2016年3月
- 6) 戸沢光則『縄文時代研究辞典』東京堂出版 1994年9月
- 7) 財団法人千葉県教育振興財团『房総の文化財』VOL47 2009年3月
- 8) 註5文献と同じ
- 9) 奥沢哲也『瑞龍古墳群の方形周溝墓における遺物出土状況の検討』『研究ノート』第13号 公益財団法人茨城県教育財團 2016年6月
- 10) a 石川県金沢市戸水C11号墳(前方後方墳)から出土している中葉の二重口縁壺に器形が似ている。鈴木三男・鶴木英道・大西謙『金沢市戸水C道路・戸水C古墳群(第9・10次)』財団法人石川県埋蔵文化財センター 2000年2月  
b 堀大介著『第1節 墓出土器式土器の検討』『地域政権の考古学的研究-古墳成立期の北陸を舞台にして-』 雄山閣 2009年5月
- 11) 潤ノ上隆介「古墳における造り出し周辺遺物群の様相-配置と組成を中心に-」『考古学研究』第52卷第3号 通巻207号 考古学研究会 2005年12月
- 12) 平川南「2 東国の村落」『日本村落史講座2 景観I 原始・古代・中世』雄山閣 1990年8月
- 13) 堀隆「壺の発見のプロセスとその意味」『山梨県考古学協会誌』第7号 山梨県考古学協会 1995年5月
- 14) 小川和博・大瀬淳志・大瀬由紀子ほか『石岡市弥陀ノ台道路-小美玉市道栗又四ヶ瀬道路改良工事に伴う発掘調査-』小美玉市・石岡市教育委員会・有限会社日考研茨城 2014年8月
- 15) 田村雅樹「宮田館跡 主要地方道玉里水戸線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」「茨城県教育財團文化財調査報告」第374集 2013年3月

# 付 章

小美玉市殿畠遺跡出土遺物の自然科学分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

## 1 はじめに

小美玉市宮田に所在する殿畠遺跡は、沢目川左岸の台地縁辺部に立地する。今回の発掘調査により、縄文時代の竪穴建物跡・陥し穴・土坑、古墳時代の竪穴建物跡・方形周溝墓、平安時代の竪穴建物跡、室町時代の溝跡などの遺構が検出されている。

今回の分析調査では、土坑から出土した炭化材を対象として、年代確認のために放射性炭素年代測定をおこなうとともに、木材利用を検討するために樹種同定を実施する。

## 2 試料

試料は、SK-13とSK-14から出土した炭化材2点である。SK-13の炭化材は、同一試料名で2点（試料名：No.6-炭1,2）あるうち、炭1を用いる。多数の破片が認められる中から、一番大きい破片を抽出した。この炭化材は分割状で5年分の年輪が認められ、樹皮は残っていない。またSK-14の炭化材（試料名：炭化材14.12.04）は、柵目板状の破片で、3年分の年輪が認められ、樹皮は残っていない。それぞれ、半分に分割して、年代測定試料および樹種同定試料とした。

## 3 分析方法

### (1) 放射性炭素年代測定

試料中の土壤や根などをメスやピンセットを用いて取り除いた後、HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C（30分）850°C（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO<sub>2</sub>を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO<sub>2</sub>と鉄・水素を投入し封じる。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定も行うため、この値を用いて<sup>13</sup>Cを算出する。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma:68%）に相当する年代である。曆年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIBR0. (Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

曆年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の字

宇宙強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期5,730 ± 40年)を較正することである。曆年較正は、CALIB 7.1.0.のマニュアルにしたがい、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値および北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

曆年較正結果は  $\sigma \cdot 2\sigma$  ( $\sigma$  は統計的に真の値が 68.2% の確率で存在する範囲、 $2\sigma$  は真の値が 95.4% の確率で存在する範囲) の値を示す。また、表中の相対比は、 $\sigma \cdot 2\sigma$  の範囲をそれぞれ 1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

なお、較正された曆年代は、将来的に曆年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値も併記する。

## (2) 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Wheeler 他（1998）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

## 4 結果

放射性炭素年代測定・曆年較正および樹種同定結果を表 1、図 1 に示す。同位体効果の補正を行った値（補正年代）は、SK-13 が  $4,360 \pm 30$ BP、SK-14 が  $4,330 \pm 30$ BP である。また、測定誤差を  $\sigma$  で計算した曆年較正結果は、SK-13 が calBC3.010-2.914、SK-14 が calBC3.009-2.902 である。

また、年代測定を実施した炭化材はいずれも広葉樹で、SK-13 がクリ、SK-14 がエノキ属に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

### ・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は 3-4 列、孔圈外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1-15 細胞高。

### ・エノキ属 (*Celtis*) ニレ科

環孔材で、孔圈部は 1-3 列、孔圈外で急激に径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列。小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6 細胞幅、1-40 細胞高で鞘細胞が認められる。

## 5 考察

炭化材が出土した土坑（SK-13、SK-14）はいずれも深さが約 3m ある大型の土坑であり、炭化材は底部付近から出土している。出土した炭化材の年代測定結果（補正年代）は、SK-13 が  $4,360 \pm 30$ BP、SK-14 が  $4,330 \pm 30$ BP であった。また、測定誤差を  $\sigma$  で計算した曆年較正結果は、SK-13 が calBC3.010-2.914 (calBP4,959-4,863)、SK-14 が calBC3.009-2.902 (calBP4,958-4,851) である。の測定結果は、関東地方で蓄積された縄文時代の年代測定結果（小林, 2008）と比較すると、縄文時代中期頃の年代に該当する。今回の結果から 2 基の土坑は縄文時代中期頃の比較的近い時期に構築・使用された可能性がある。一方、炭化材の樹種は、SK-13 がクリ、SK-14 がエノキ属であった。クリは、二次林等に生育する落葉高木で、

木材は重硬で強度と耐朽性が高い。エノキ属は、河畔等に生育する落葉高木で、木材はやや重硬な部類に入る。いずれも関東平野で現在も普通に見られる種類であり、縄文時代中期頃の本遺跡周辺にも生育していたことが推定される。

表1. 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

調査区	出土遺構	試料名	材質 形状 種類	測定年代 BP	$\delta^{13C}$ (‰)	補正年代 (曆年較正用) BP	曆年較正結果			Code No.
							誤差	cal BC/AD	cal BP	
303-179 A区	SK-13	N6-炭1	炭化材 分割状 クリ	4,430±20	-29.76 ±0.28	4,360±30 (4,355±25)	$\sigma$	cal BC 3,010 - cal BC 2,978	cal BP 4,959 - 4,927	0.449
							$2\sigma$	cal BC 2,966 - cal BC 2,951	cal BP 4,915 - 4,900	0.161
303-179 A区	SK-14	炭化材 14.12.04	炭化材 柱状 木/木質	4,390±30	-28.36 ±0.28	4,330±30 (4,334±26)	$\sigma$	cal BC 3,078 - cal BC 3,073	cal BP 5,027 - 5,022	0.011
							$2\sigma$	cal BC 3,024 - cal BC 2,905	cal BP 4,973 - 4,854	0.989

1)試料は、いずれも酸洗削-アルカリ処理-酸処理の前処理を実施している。

2)年代の算出には、Libbyの半減期5,760年を使用した。

3)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

4)付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$  (測定値の96.8%が入る範囲)を年代値に換算した誤差。

5)歴年の計算にはRADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0(Copyright 1986-2010 M Stuiver and P.J Reimer)を使用した。

6)歴年の計算には、補正年代(じごうねんじや)で曆年較正年代として用了した。一桁目を丸めた値を使用している。

7)年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、曆年較正曲線や曆年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、曆年較正年代値は1桁目を丸めていない。

8)統計的に真の値が入る確率は $\sigma$ は68.3%、 $2\sigma$ は95.4%である

9)相対比は、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ のそれぞれを1とした場合、確率に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

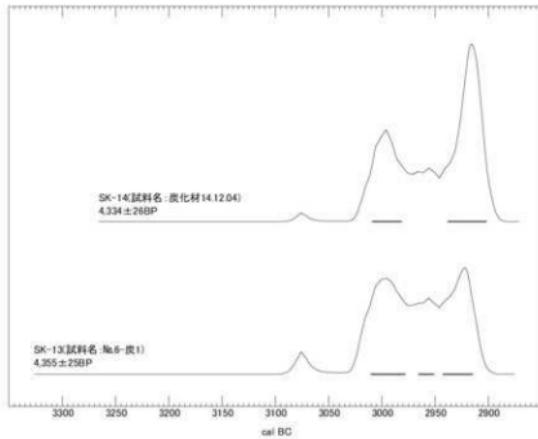
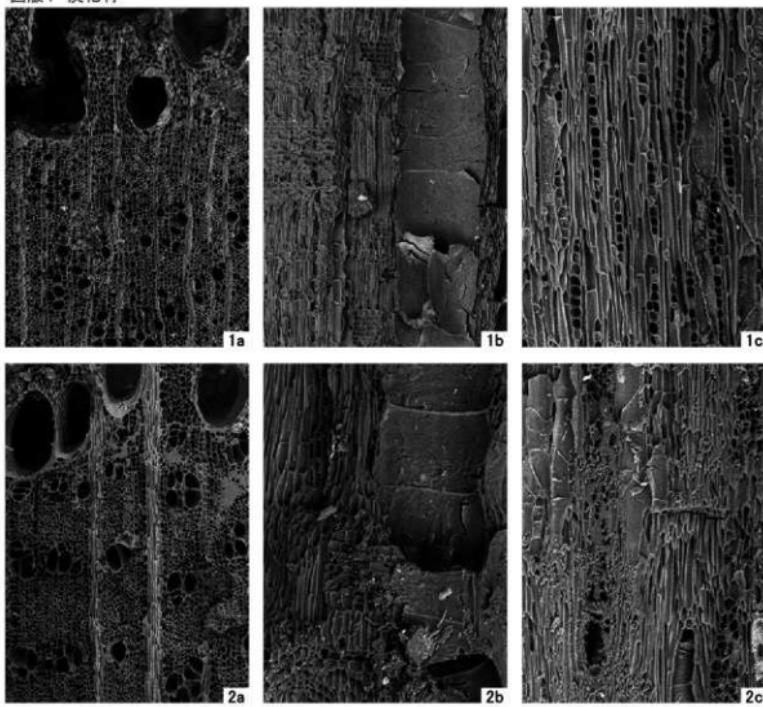


図1. 曆年較正結果(1 $\sigma$ )

図版1 炭化材



1.クリ(SK-13-No.6-炭1)

2.エノキ属(SK-14; 炭14.12.04)

a:木口,b:柾目,c:板目

100  $\mu\text{m}$   
100  $\mu\text{m}$ b,c

引用文献

- 林 昭三.1991.日本産木材 跟微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫.1995.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料31.京都大学木質科学研究所.81-181.
- 伊東隆夫.1996.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料32.京都大学木質科学研究所.66-176.
- 伊東隆夫.1997.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料33.京都大学木質科学研究所.83-201.
- 伊東隆夫.1998.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料24.京都大学木質科学研究所.30-166.
- 伊東隆夫.1999.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料25.京都大学木質科学研究所.47-216.
- 小林謙一.2008.縞文土器の年代(東日本).小林達雄(編)「縞観・縞文土器」,「縞観・縞文土器」刊行委員会.896-903.
- 鳥居 謙・伊東隆夫.1982.国説木材組織.地球社.170p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編).1998.広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修).海青社.122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

写 真 図 版



遺跡遠景  
(西から)



調査区北部全景  
(南から)



調査区南部全景  
(北から)

PL2



第1号竪穴建物跡



第2号竪穴建物跡  
遺物出土状況



第2号竪穴建物跡

第5号竪穴建物跡  
遺物出土状況



第5号竪穴建物跡



第7号竪穴建物跡  
遺物出土状況①





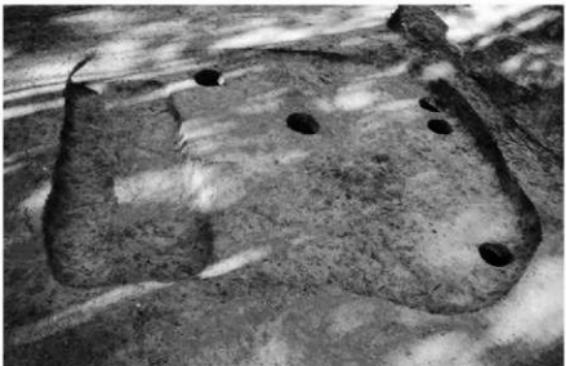
第7号竪穴建物跡  
遺物出土状況②



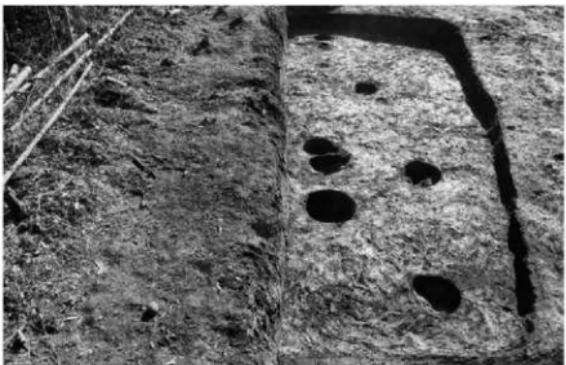
第7号竪穴建物跡



第8号竪穴建物跡



第9号竖穴建物跡

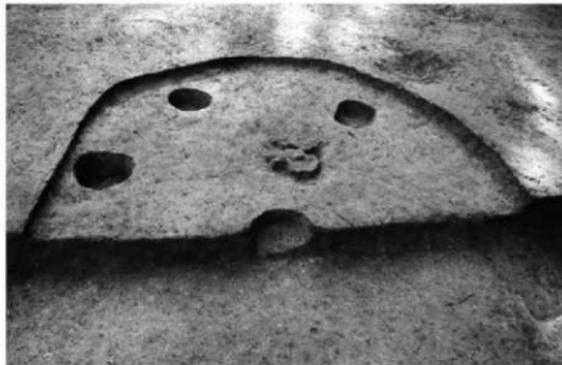


第10号竖穴建物跡

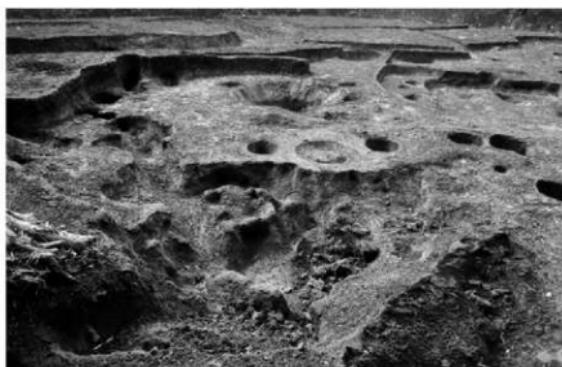


第14号竖穴建物跡

PL6



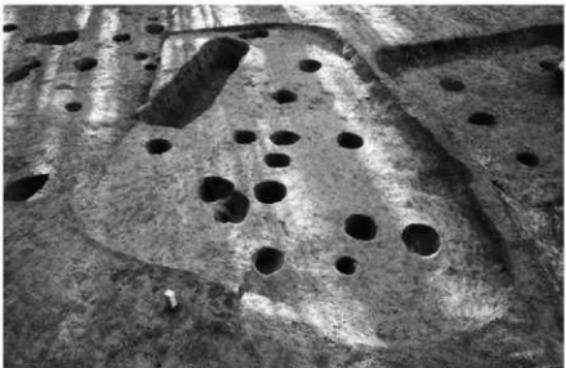
第15号竪穴建物跡



第16号竪穴建物跡



第17号竪穴建物跡



PL8



第6号竪穴建物跡



第6号竪穴建物跡  
竪袖断ち割り状況



第6号竪穴建物跡  
竪袖内遺物出土状況



第13号竪穴建物跡  
遺物出土状況



第13号竪穴建物跡



第13号竪穴建物跡  
遺物近景

PL10



第3号竪穴建物跡  
竈内遺物出土状況



第3号竪穴建物跡



第11号竪穴建物跡



第1号方形周溝墓



同南東コーナー部遺物出土状況（南から）



同北東部遺物出土状況（西から）



同南東コーナー部遺物出土状況（東から）



同北東部遺物出土状況（東から）



第3号溝跡遺物出土状況（南から）①



第3号溝跡遺物出土状況（南から）②



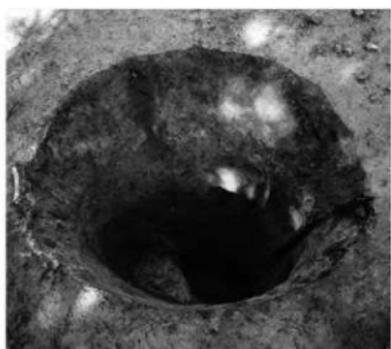
第3・4号溝跡



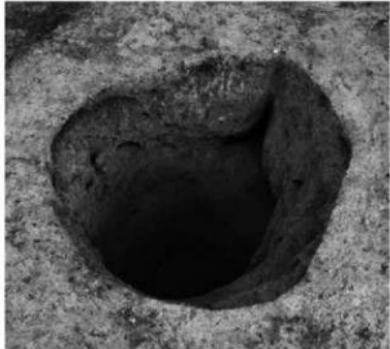
第1号陥し穴土層断面



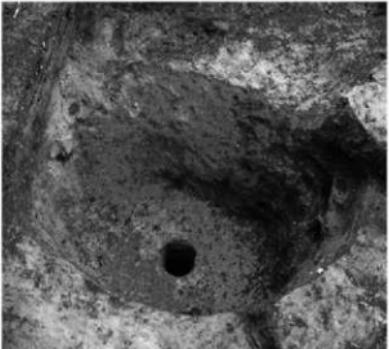
第1号陥し穴



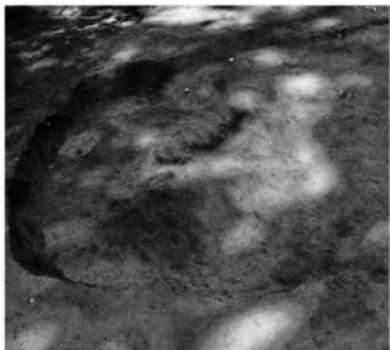
第2号陥し穴



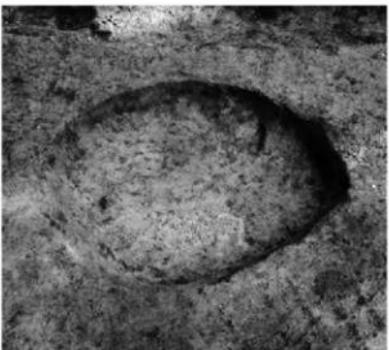
第3号陥し穴



第4号陥し穴



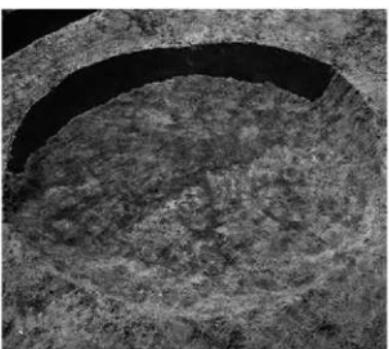
第1号炉穴



第7号土坑



第9号土坑



第15号土坑

PL14



第13·14·21号土坑



第14号土坑土层断面



第13号土坑烧土·炭化材出土状况



第14号土坑烧土·炭化材出土状况



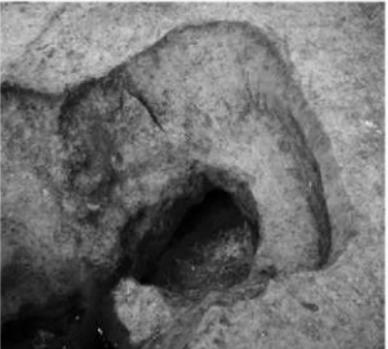
第13号土坑



第14号土坑



第21号土坑土层断面



第21号土坑



第1号溝跡



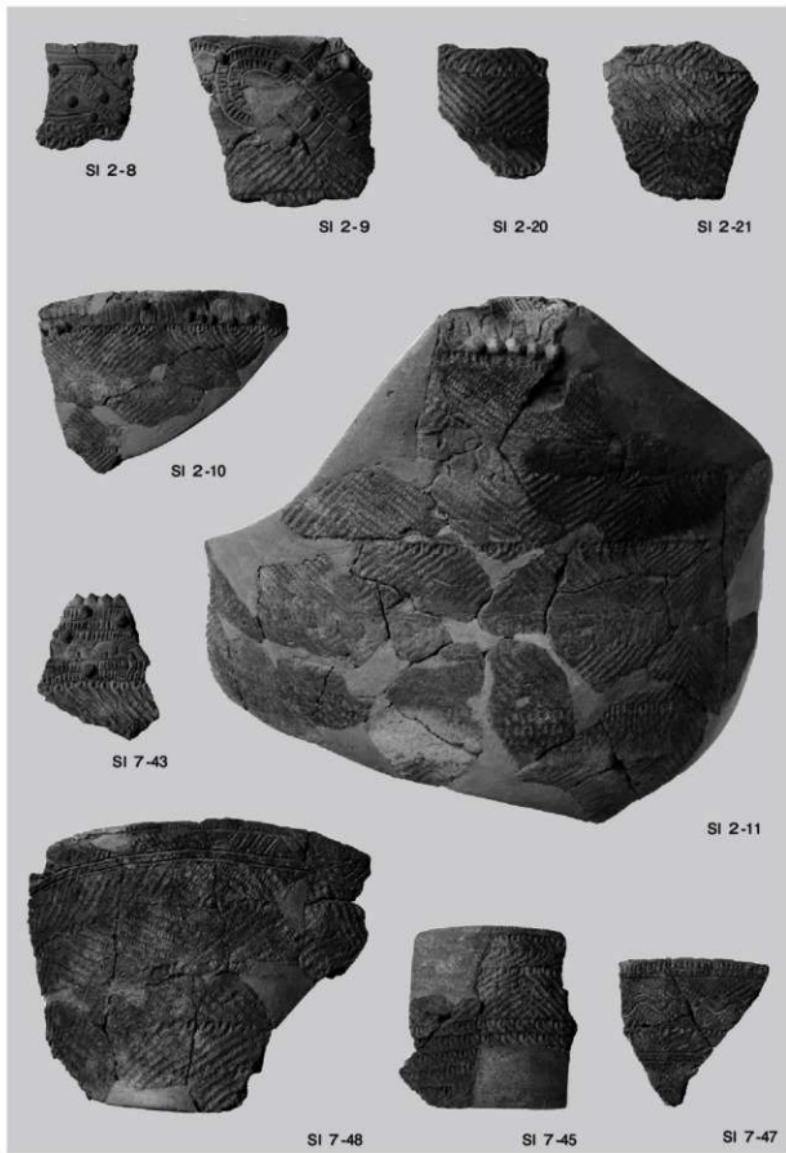
第2号溝跡



第5·7号溝跡



第6号溝跡



第2·7号竖穴建物跡出土土器



第7·8·10·12·16号竖穴建物跡，第2·3号陷穴，第1号炉穴，第8·9·13·15号土坑出土土器



第1・2・4・7・12・17・18号竪穴建物跡、第1・2号陥し穴出土石器



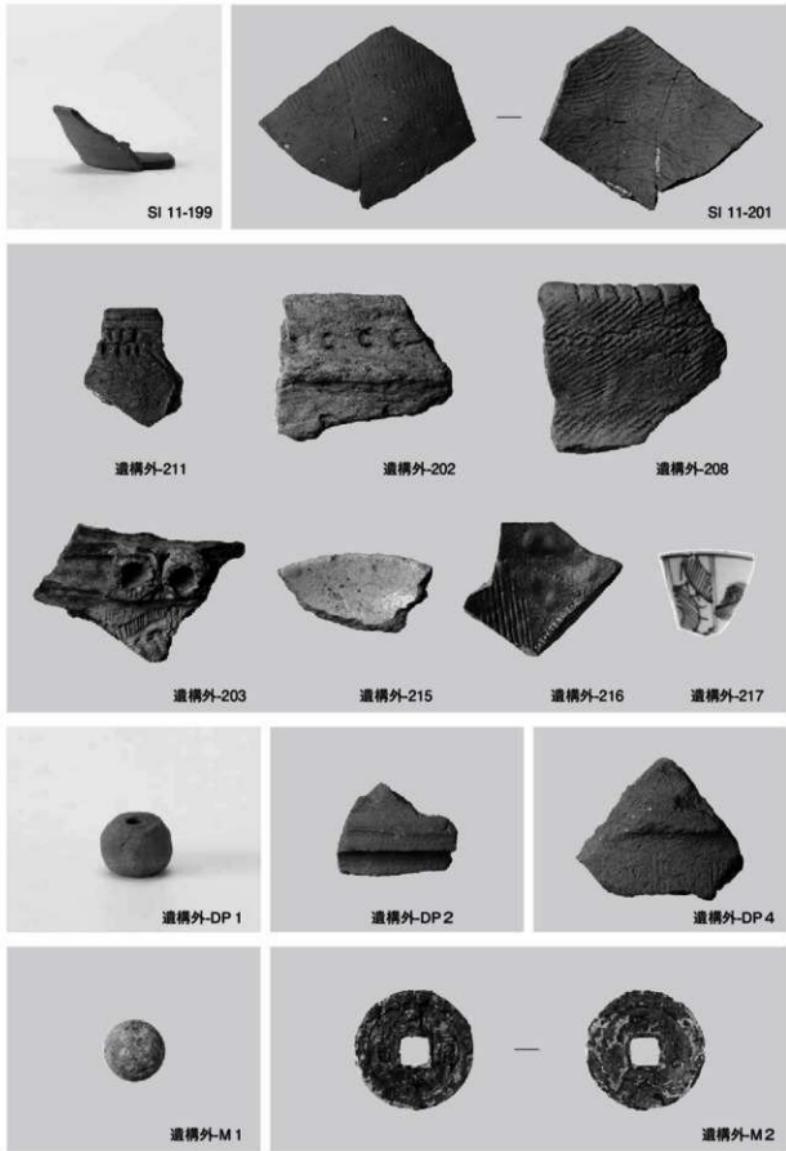
第6号竖穴建物跡出土土器



第6·13号竖穴建物跡、第1号方形周溝墓出土土器・石器



第3号竖穴建物跡、第3号溝跡、第1号方形周溝墓出土土器



第11号竪穴建物跡、造構外出土土器・陶器・土製品・金属製品

## 抄 錄

## 印 刷 仕 様

編 集 O S Microsoft Windows 7  
Home Premium ServicePack1  
編集 Adobe InDesign CS6  
図版作成 Adobe Illustrator CS6  
写真調整 Adobe Photoshop CS6  
Scanning 6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000  
原画類 EPSON ES-10000G  
使用Font OpenType リュウミンPro・L  
写 真 線数 モノクロ175線以上 カラー210線以上  
印 刷 印刷所へは、Adobe InDesign CS6でレイアウトして入稿

### 茨城県教育財団文化財調査報告第420集

### 殿 嘉 遺 跡

#### 主要地方道玉里水戸線道路改良事業 地内埋蔵文化財調査報告書

平成29（2017）年 3月15日 印刷

平成29（2017）年 3月17日 発行

発行 公益財團法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587  
H P <http://www.ibaraki-mabun.org>

印刷 高野高速印刷

〒310-0853 水戸市平須町1822-122  
TEL 029-305-5588